即ち聖書教會は先づ倒され、次て間もなく「ジーサス」協會の亡ぶるに至りたるは、只當然の成行と謂ふべきなり。

聖書協會の倒れたる以來は宗務院は奇體にも羅馬教會と稍相似るに至れり。即ち新約全書の弘まることは之を奬勵するも、舊約は然らず、但し詩篇は例外なりと知るべし。又宗務院は經典の飜譯に關して非常に用心注意すること羅馬教會と異ならず。即ち露譯の書をのみ保護し新約全書にして外國より來る者の如きも、凡て宗務院の許可せる飜譯を複製したるものなり。

アレキサンドル二世の時即ち千八百六十三年に新に聖書賣弘協會は設けられ、爾來繼續して今日に至れり。此協會は以前のとは大に異なりて其の賣弘むる書籍は唯だ詩篇と新約全書とに過ぎず。新約全書は實に露西亞人間に廣く賣行けり。特に福音書は其の最も愛讀する所にして、如何なる家と雖之を備へざるはなし。而て多數人民は縱令無學にして且迷信を脫せずと雖、其の露人の精神に及ぼす感化の至大なるは固より多言を要せざるなり。

第三章

禮拜及儀式。東方教會に於ては儀式大に重んぜらる。露西亞人の形式を貴ぶ事。祈禱の儀式。教會堂內の儀式及模樣。耶蘇復活祭。露西亞教會と美術。迷信を防ぐの注意。畫像。奇神聖女。畫像の製作。教會の音樂及唱歌

教會の組織に關しては希露正教は舊教と新教との間に立つが如しと雖、儀式の一點に至れば全く二者と相反して耶蘇教界の一極端を爲せり。思ふに其中間の地位に在る者は寧ろ羅馬舊教なるべきなり。蓋古代耶蘇教徒の慣例儀式は羅馬の爲めに大に省略せられ、後又宗教改革に依て殆ど排斥し去られたりと雖、東方教會に於ては第四五世紀以來の儀式を其儘に襲用採守し、少しも之を改むることなきが故に、其禮拜は極めて儀式的形式的なり。而して其原因は第一に東洋的精神に存するは明かにして、次に正教國民の概ね無學なること、並に又露西亞人は元來儀式を喜ぶの民なること等は其の主なる者なるべし。蓋し露西亞人の儀式を喜ぶとは、其の日常些細の事にも一定の儀式を設けて之に準據すること甚だ密なるに

徴するも明かなり。彼等は教會の祭典儀式等の外に誕生結婚及死亡等の場合に於ける特種傳來の儀式を有し、之を重ゼ之を守ると敢て教會の制規に對すると異ることなし。例へば其結婚式の如き古來傳はり來れる一種の演劇にして人も事も凡て詩中のものならざるなし。斯かる性質を有する人民にして、若し宗教を儀式的形式的に流れしめずんば、寧ろ天下の怪事と稱すべきのみ。されば彼等は教會の規定以外に自から好んで儀式を作るとあり、即ち祈禱は其一例にして是れ正に其特有の一儀式たり。起立して祈禱を行ふは正教徒の常なりと雖、露西亞人は祈禱中靜かに起立せず。彼等は絶へず兩手を擴げて胸の前に十字を描き天を仰ぎ右手を擧げ、或は俯し、或は直立し、祈禱の終るまで之を繰返へして止むことなし。而して更に叮嚀なる者は、定時に跪きて地上に叩頭禮拜せり。是れ實に外國人の目に映じて最も奇なる者なり。

又彼等は教會内に於て聖書を讀むこと殆どなし。蓋彼等は堂内に坐して書を讀むを以て甚だ不都合の事と思惟せるなり。即ち蠟燭に火を點じ、十字を描き或は拜し或は跪き、斯くて始より終に至るまで、唯だ同一儀式を繰返へすを以て足れりと爲せるなり。されば僧侶の儀式を行ふも甚だ重々しく、其嚴肅なる風貌、其長くして麗はしき頭髪及其の莊嚴なる擧動は、自から之をして神秘界の俳優たらしめの演劇たり。又儀式を省略するは彼等の最も好まざる所にして、且禮拜は常に公開なり。人の居ざる所にて勤行するが如きは其の全く思ひ到らざる所なり。

露西亞の教會は盛んに繪畫及音樂等を利用し、信徒の五官を經て其精神に達するの策を取れり。然れども同時に又其の過度に流れんことを恐れ、信徒の耳目を喜ばすに偏せざらんことを努めり。且教會の繪畫及音樂は之を俗間のと區別し、厳ふべき俗氣の健場を潰さゞらんことを期せり。實に禮拜の嚴肅なることは會堂の模樣を見るも明かにして、其の最も華麗なる場合と雖、猶單純素朴にして教會は即ち禮拜所なりとの感じを亂すべき者は一も存せず。試みに其有樣を記せんに先づ東向の神坐(アルタス)に一個の祭壇あり、此祭壇と會場との間には境界を設け、之に僧侶のみ出入するを得るの入口あり。而して此聖門はパン及葡萄酒を神に捧げたる其時期間は之を閉ざすの常にして、俗人中之に立入るを得るは皇帝のみに限られ、

而かも其即位式の時のみなり。而して僧侶が祭壇に物を移し或は副牧師が新約全書又は聖杯を頭上に捧げて持運び、或は聖門の開閉せらるゝ等は正に堂内の光景をして神聖莊嚴ならしむる所以にして、實に儀式的演劇の一舞臺たらずんば非ざるなり。

希露教會の儀式は寓意的の者甚だ多し。例へば結婚式は其一例にして最も詩的趣味に富めり。結婚式の折は新夫婦は頭上に冠を戴く(寧ろ頭上に冠を擬せらる)の常なるに因り、之を戴冠式(クラウニング或はコロナーション)と云ふ。而して先づ僧侶の指圖に應じて公衆の面前に指輪を交換し且互にキッスの禮を爲したる後、新夫婦は同一の杯より代はる〳〵三度神酒を戴くの定めなり、是れ今後何物も皆共有たるべしとの意なり。杯の式了れば僧侶は兩人をして手を握らしめ、且之を其の長袍にて掩ひ、祭壇の處に三度嚮導す、是れ其の一生相離れざるべきを示せるなり。葬式の折には知友親戚の人々遺骸を負ふて教會に到り、更に代はる〳〵死者の面にキッスするの習あり。是れ新夫婦のキッスと相似たる者にして、其の永訣の意を表するの點のみは相違せる所なり。要するに其の極めて詩的なるは共に同じと謂ふべし。

祭典特に耶蘇復活節(イースター)に關しては莫斯科は決して羅馬或はセヴィールに讓らず。特に半夜の復活祭は殆ど他に其比を見ず。勿論羅馬教會も夜の祭を行ふと雖、希羅教會は特に復活の夜に重きを置けるなり。扨て其當夜は人民は手に手に蠟燭を携へてアイヴァン、ヴェリキ院の鐘樓の邊りに集り、靜かに救世主復活せりとの報知の來るを待てり。やがて愈夜半となるや、鐘は一時に鳴り響き、歡喜の聲は全市を埋め、蠟燭は直ちに點ぜられ、且途に大砲の轟の聞ふる間は人皆其帽を脱ぎて禮意を表せり。而して寺院内の光景は更に奇にして先づ讃美歌も謠ひ了り愈々定めの時刻と爲るや、僧正は聖門を排して壇上に進み、基督の聖屍の横へ在る所に到り靜かに其被布を徹して、聖屍の存せざるを見、さても訝かしやと暫時遲疑すること往時の使徒の爲したる如くし、更に僧を伴ふて教會を去り、救世主の行方を搜がしたる後、再び堂内に入り來りて愈々『基督昇天し給へり』と宣言するや、鐘は直ちに之に和して盛んに合奏を始むるなり。正に是れ宛然たる演劇にして、人民中には其意味の如何を解せざる者少なからず。而かも猶教會と共に之を祝し、或は途上相

擁して『基督昇天し給へり』と祝辭を述べ、或は復活節の鷄卵を交換する等、其の光景は實に名狀す可らざるなり。

斯くも儀式の詩的にして麗はしきにも拘らず、古來美術の發達を助けざりしは一見甚だ奇なるが如しと雖、是れ第一には人民の趣味なりしに因り、第二には教會の責任も少なからず。即ち教會は敢て繪畫音樂の類を排斥したるには非ざれども、成るべく其の世間的趣味を帶ぶるを制し、故らに耳目を喜ばすが如き者を斥け、美術をして自由自在に其美を發揮するを得ざらしめたり。之を譬へば羅典教會の美術に於けるは猶慈母の子に對するが如きも、希露教會は之に反し、意持惡き女主人の家僕又は奴隸に對するに似たり。秋風蕭條として摧花殘芳の見るに忍びざるが如き狀あるも亦已むを得ずと謂ふべし。蓋斯く美術より油氣を去り生氣を去り、以て枯燥せる宗教的精神的美術と爲らしめたるは、夫の東洋流の禁慾主義より出でたるものなり。

建築術のみは少しも教會の束縛を受けず、從て露西亞人の天才を最も發達せしめ一種の新機軸を出だすまでに至りたりと雖、不幸にして氣候の凛烈なると石材其他材料の乏しきことゝ並に國民の富の度の低きこと等は、之を妨げて十分の發達を爲さしめざりしは惜むべし。而して其他繪畫、彫刻、音樂等に至ては、窮屈なる束縛の下に蟄息枯死せしめられたること上に記したるが如し。世人は往々正教會を非難するに其の形式に陷るを以てすと雖、其實正教會は古來粧飾的外容の爲めに眞精神を誤まらんことを大に恐れ之を防ぐに努めたるは奇と謂ふべし。又迷信を防ぐに心を用ふるが如きも世人の思ふ所とは異る所なり。例へば彼等は繪畫は之を用ふと雖、木石又は金屬の像に至ては一切之を寺院より排斥せり。蓋其の思ふ所に據れば、彫像は其形活物と同じくして最も人を迷信に陷れ易き恐あり、繪畫の更に抽象的にして人を誤るの憂少なきに如かずと云ふに在り。以て其の木石を拜して神と爲すの迷信を防ぐに注意したるを知るべきなり。然れども繪畫と彫像との此區別は縱令理論上正しきにもせよ、要するに其結果は唯だ正教國の美術をして大に西歐のに劣らしめたるに過ぎず。夫れ像と云ひ、彫刻と云ひ、宗教の保護に依て其發達を爲したること諸國の美術史の示す所なり。然るに正教會は獨り之を排斥して門内に入るを許さず、其の美術の進歩を妨げたるも當然と

謂ふべし。第十八世紀以來は像を教會内に輸入せんとする者大に增加したりと雖、尙之を寺院内に入るゝを許さずして、院外の家に之を置かしめたり。然れども迷信を妨がんとする其注意の爲めに犧牲と爲りたるは唯だ美術のみにして、迷信其者は敢て之が爲めに影響を蒙むらざりしが如し。即ち夫の神の畫像(eikons)は非常に人民の爲めに尊信禮拜せられ、彫刻に成れる像の有無は殆ど問ふの必要なきなり。勿論僧正は其の就職式の時に神に捧ぐる如き崇拜を神像に向て呈せしめざる可しと宣誓すと雖、又現に之を祭壇上に置くが如きは其の努めて避くる所なりと雖、猶人民は之に向て一種の迷信的禮拜を行ふと、普通一般の事實なり。而して彼等が之を禮拜するは敢て之に依て冥界の神を思ふと云ふよりも寧ろ唯だ慣例に從て形式的に之を行へるなり。即ち彼等は其肖像の前に蠟燭を點じ、手にて十字を描き頭を俛し地に跪く等の儀式を以て自ら甘んじ、特別に著名なる三四の外は何れの神像に對しても、同樣に尊崇禮拜せり。而して其足部をキッスして終に消へ失せしむること珍らしからざるに因り、其の處だけは常に之を塗り代ふるの必要あり。

何者の像なるや名の分らざる者の中に「奇術の神」なる者あり。是れ不可思議の力を有し飢饉疫病又は戰爭等の場合に能く厄を拂ひ禍を除くと信ぜらるゝに因て此名あるなり。而して全國到る處に此種の神像少なくも一二種は祭られ、其由來來歷等に付ても或は人間の作に非ずと云ひ、或はセント、ルークの手に成ると稱へらるゝ者も少なからず。

戰爭に臨むに當りては、露人は常に悃ろに神像を携へ、若し軍に利ある時は之を以て其冥助に歸したり。夫のスモレンスクは或聖女(ヴァージン)の像を護符と爲し又彼得大帝も常に之を携へて肩身を離さゝりしと云ふ。是れ現に彼得堡に祭られ居る所のものにして、今も猶ポルタヴァの勝利は即ち其力なりと信ずる者敢て無きに非ず。又之とは異れる或聖女は、千八百十二年に正教徒を助けたりと云ふ。此聖女は即ち露國中最も歸依者の多き「カザンの聖女」にして其緣起は頗る古るく、昔しアイヴァン四世の時王を助けてカザンを陷れしめたりとて爾來其名甚だ高く、國家事あれば必ず之に祈願を凝らしたり。例へば千六百十一年ポジャルスキー及ミニンは其聖像を得る爲めにカザンに赴きたるに彼等は果して其力に依り、當時莫斯科

及ヴラヂスラスを横領せし波蘭人を逐ひ放つを得たり。其後百年彼得大帝は其神坐を舊都より彼得堡に移し、アレキサンドル一世は又之が爲めに壯麗なる寺院を造れり。即ち「我カザンの聖女」と稱せらるゝ者是れなり。爾來人民の尊信は改まることなく、或は敵より奪ひたる銀を溶きて其寺院の粧飾に用ひ、或は戰利品を寺内に奉納して紀念と爲せる者あり。

有名なる神像は通常之を飾るに種々の寶石類を以てし、其壯麗實に目を驚かす者あり。農夫と雖其神像に金剛石の光を放つを以て大に得意と爲し、寶石の得難き地方に於ては、玻璃及人造眞珠の類を以て之に代へり。然し如何なる寒村に至るも、基督聖女及古聖の像を金銀の箱に藏めて之を祭らざるはなし。

露西亞の宗教的美術は、大にビザンスの感化の跡を留め複寫に複寫を重ねたるの其繪畫に於ても猶明かに之を認むるを得べし。而して往時之を畫きたる者は概ね雲水の僧のみなりしと雖、又教會高位の人にして自ら刷毛を振ひたる者もなきに非ず。兎に角教界の人が其勤行の傍に之を爲したるに過ぎざりしも、第十六七世紀の頃に及び、始めて神畫神像を製するを以て定職とする者現はるゝに至れり。

然れども教會は之れに監督を加へて瀆神の事なからしむるに注意し、又畫家に於ても之を神聖なる職業と爲して特に心を用ひたり。現に今日に於てすら其販賣は唯だ之を正教徒にのみ許す可きものにして、猶太人には賣らしむ可らずと說く者なきに非るなり。否神像は賣買せらる可き者に非ず、之を賣買するは瀆神の行爲なり、神像は唯だ金と交換せらるゝなりとは彼等の思想なり。されば之を畫きまた之を刻むに當りても常に原形と違はざらんことを努めざるを得ざるに因り、技術家は到底其手腕を自由に振ふこと能はず。古代の畫家に數派の別はあれども、是れ僅に被衣の摸樣の不同より來れるに過ぎずして、固より形其者には別あるに非ざるなり。

宗教的美術は敢て教會内に止まらずして、更に普通人民の家にも行渡れり。即ち露西亞人は上下の區別なく總べて其家の室々に神像を祭るの風習なるに因り、時としては先祖傳來の多くの神像を藏する者あり。而して此普通の繪畫の外に二折又は三折の折本樣の者を造りて其中に神像を並べ畫けるあり、(其の大さ時としては掌大に過ぎず)。而して之に施したる金屬又は木の細工は頗る精巧の域に達

し敢て繪畫に比して遜色あるを見ず。此折本と爲れる神像は始めは唯だ人民私家の禮拜の爲に造られたる者なるも後には教會の中にも入り込むに至れり。

音樂は神畫神像の美術よりも稍自由を得たるが如し。蓋露西亞人は生來音樂上の天才を有するに因り、敢て窮屈なる束縛に甘んずること能はず、從てビザンス傳來の範圍を脱して別に國風の美術を成すに至りたることならん。元來コンスタンチノープルの正教會は音樂に於ても世間的趣味を排斥して、其の最も精神的ならんことを努めたるは繪畫に於けると同一にして、木なり金屬なり凡て人工に成れる樂器は一切之を斥け、人間の音聲に依て直ちに神を讃美すべしとの主義を取りたり。而して露西亞教會も又奏樂所を有せざるは一なりと雖、此點に於ては希臘教會の教ふる所を守ること夫の繪畫の場合の如くに忠實ならず、自己の嗜好に從て特種の唱歌法を發達せしめたり。蓋彼等の耳は目よりも鋭敏にして、希臘僧侶の如くに乾燥なる唱歌を以て甘んぜざるなり。勿論露西亞教會と雖、音樂に監督を加へ、新作の唱歌を採用する場合にも、猶教會の音樂と俗樂とを區別するに注意したるは固よりなり。而して尼寺及女學校に於ての外は、唱歌は一切男子の爲す所にして婦人は之を許されず。若し夫れ其唱歌の清素莊重にして且沈痛なる餘音を帶び、深く且強く人間の肺腑に徹する底の奥妙森嚴の趣あるに至ては、天下殆ど之に及ぶもの無かるべきなり。

第四章

精進日及祭日。四大精進期。人民の之を守るに堅き事。休日。其非常に多き事並に其弊害。ジュリヤス曆。之を改め難き理由。露西亞の「古聖」。「古聖」の遺骨に對する尊崇。巡禮

禁慾主義は元來東方教會の特色とする所の精神にして、露西亞教會も亦之に漏れず。唯だ音樂に關して其の近世の唱歌法を用ふるを許すの點のみは、當に唯一の例外なるべし。即ち音樂以外の事に於ては萬事頑固に古式に從ひ今日に行はれ難き習慣をも猶依然として之を守れり。斷食及精進は即ち此類にして、之を行ふことの斯くも頻繁に又之を守ることの斯くも嚴なるは、他に其比を見ざるなり。露西亞教會には四回の精進期あり。第一はクリスマス祭の前にして即ち羅馬教

の「アドヴェント」に當り、第二は復活節の前にして之を「大精進」と云へり。又第三はセントピートル祭の前にして、第四は昇天祭(アッサムプシヨンデー)の前なり。されば少くも一年の三分の一は精進日にして、且上記のものゝ外に毎週金曜及水曜も亦然り。是れ救世主の命日とヨユダス反逆の日とに當ればなり。

四精進期の間は肉類は全く禁ぜらる。牛乳牛酪及鷄卵も亦然り。されば魚肉及野菜類の外には殆ど食すべき者なきに、而かも其國柄として野菜は多く產せざるに因り、結局露西亞人は重もに魚食に依頼せり。而して河に海に魚の供給は頗る多きも未だ需要を充すに足らず。魚中人民の最も常食とするは青魚と大口魚となり。然し尋常以上の信心家は魚をすら斷てり。即ち四精進期の間は農民は概ね鹽漬の類を食し、宛然船中の食事に異ならず、從て船中に起り易き病氣特に壞血病に罹る者往々にして之あり。且「大精進期」の終は殆ど冬の終と同時に、して最も肉食の必要ある時期なるに因り、此精進期は最も病院繁昌の季節なり。加之此大精進終れば直ちに復活節となり、四十日間の粗食少食に次ぐに暴飲暴食を以てするが故に益々事態をして非ならしめたり。又セントピートル祭並に昇天祭の折の精進も、時宛も極暑にして且耕作に最も骨の折るゝ頃なるに因り、身躰の健康を害すること敢て甚しく前者と異ならざるなり。

此等の精進は苦しきに相違なしと雖も、人民は愼て之を守れり。是れ蓋彼等は肉躰を苦め慾情を制し、以て苦行勤行を重ぬるを以て信心家の本分と信ぜるに因るなり。然し農夫(ミユジック)と職人とは今も猶之を守りて少しも忘らずと雖も、其他中流以上の人に至りては必ずしも之を勵行せず。特に上流社會の人の之を忽かせにするは既に今日に始まりたるに非ずして、最も篤志の一家と稱せらるゝ者も猶僅に精進期四十日間の第一週と最後の週とを守るに過ぎず。且敎會も此點に於ては頗る寛大にして、必ずしも之を勵行せしめんとせず。然し敎育ある社會の此儀式を重んぜざる其一方に於て、無學なる徒輩は堅く之を守り、其間非常の相違あり。而して下流の人民をして此風を改めしむるには唯だ敎會より其例を示すの外なしと雖、露西亞敎會は元來保守の府古例の巢窟にして、到底斯かる事を爲し得べくもあらず、强ひて之を爲す時は却て自家の破裂を招くに過ぎざるべし(露西亞の國民は宗務院の特許に依り大精進期に唯だ一週間之を守ることゝなれり。)要するに羅馬敎會は法王の口を藉て舊を破り新を

開くの便利を有すと雖、露西亞教會は夫の不言不動の神像と一般、古例舊式の束縛の下に、口開くに由なく手舉ぐるに由なき憐れの境遇に沈めるなり。

露西亞にては「大精進期」は啻に勤行の爲めのみに非ずして、又道を修め德を養ふの目的を有するが如し。即ち國家は力を教會に添へて此點に注意せり。勿論法律に依て精進を强制すると云ふに非ず、又料理屋等の營業に干渉する譯には非ざるも、猶大精進期間は芝居踊の類の興行を禁ぜり。即ち現行刑法の第百五十五條に規定する所是れなり。然し此規定を勵行せらるゝものは主もに國家の補助を蒙れる大劇場にして、其他の小興行物及外國語にて演ずる劇場等は敢て停止を命ぜらるゝに非ず。而かも猶斯かる規定は精進を守らざる者に取ては頗る謂はれなき事にして、之に對する種々の議論の唱へらるも、敢て怪むに足らざるなり。

扨て次に祭日も又精進日と同じく甚だ多くして殆ど日曜日と其數を同ふし、且前後兩日をも合せ休むの祭日も亦決して少なからず。而して宗教上の祭日に加ふるに、皇帝皇后及皇太子の誕生日其他紀念日等の大祭日あり。斯く休日の多きは自から人民の心身を墮落せしむるものにして、其弊害は敢て夫の長き精進日に讓らざるなり。蓋休日は飲酒遊蕩に費さるゝの常にして、好し午前半日は之を教會にて費すとするも、午後は酒房の世界たり。而して教會のなき村落はなきに非ざるべきも、酒舗を有せざるもの一も在るなく、且快活なる運動を好まざる露西亞人なれば、休暇と云へば必ず之を飲酒に費さんと欲するなり。休日の原語其者(Praznik)は正に「怠惰の日」の意にして、怠惰は常に墮落の基たるや何處も異なるなし。健康及道德上の弊害の外に、其の勞働時間を少なくして國家經濟に及ぼすの弊害も亦大に注意せざる可らず。新教國に於ける農夫の働く日數は一年殆ど三百十日なり。又舊教國に於ける職人及農夫の勞働日數は殆ど三百日なり(佛蘭西の如く制規の祭日の數を減じたる所は別なり)。然るに露西亞にては其數殆ど二百五十日に達せず。されば露人の勞働日數は之を伊多利及埃地利亞等に比して五六週少なく、又英吉利及獨逸に比すれば二ヶ月少なし。是れ實に國家經濟上の大損失と謂はざる可らざるなり。而して之に各地各村の特種の休日を加ふる時は、其數は益々非常にして、而かも此等制規の祭日及地方的休日は春夏の頃に起ると多きが故に、或は枯草をして空しく地上に腐らしめ或は苗の芽を出だせるに之を放棄して顧みず、事態をして

益々非ならしむるなり。されば地主は休日を以て露國農業の一大病源と爲し、又教育家も之に反對し、露西亞の見童をして佛獨のに讓らざるの教育を受けしむるには學年を一二年延ばさゝる可らずと云ふ者あり。因に記す、露西亞の農夫は日曜日に賣買を行ふが如きは少しも之を顧みず、又日曜日に農務の始末を爲せるを見たることあり。然れども祭日に勞役に就くは其の斷じて肯んぜざる所にして、之が爲めに外國の雇主との間に悶着を起し、遂にアレキサンドル三世の政府をして制規の祭日は之を守るべき旨命令を發せしめたることあり。其際祭日の數を減ぜざりしは遺憾なりと謂ふべし。

次に夫の曆の改革も深く之と關係せる問題にして、其實行の困難なるは全く人民の頑冥なるに因るなり。蓋露西亞の曆は所謂ジュリヤス曆にして之を新曆に比すれば十二日多し。故に若し之を改むる時は、此の切り去らるべき十二日に當れる「古聖」(セント)は凡て祭日を失ふ譯にして、是れ農民等の決して爲すを肯んぜざる所なり。此に至れば僧侶の力も政府の力も到底之に敵する能はず、即ち事苟も人民の良心に關する限りは、其の迷信的なると否とを問はず、流石の專制政府も其專制を逞ふすると能はずと知るべし。而して今日に於ても猶往時の如く「古聖」を祭るを以て宗教の主要なる部分となせる彼等に於ては、是れ亦敢て奇とするに足らざるなり。實に彼等は多くの「古聖」を有し、且之を禮拜すること頗る厚く、其趣西歐の民とは大に異なれり。人或は希露教會の「古聖」は皆羅馬とビザンスとの分離以前の者に係ると思ふ者あるも事實は決して然らず。特に露西亞は古來多くの「古聖」を作りて之を祭れり。ニコラス帝が僧正シトロファンに「古聖」の位を贈り、又アレキサンドル二世がティコンを「古聖」中に加へたる如きは其の最近なるものなり。

古聖の遺骨を尊び又巡禮を好むことは露亞西人の一大特色にして、農夫中靈地に參詣するの希望を懷かざる者は殆どあるなし。即ち彼等は遙々海を渡てパレスタインに參詣するの常にして、遠くはシナイ山の靈場に到るもあり。而して靈地に詣でたることある者は、村内にて大に尊敬せらるゝなり。扨て巡禮者は、男女共概ね老人なり。是れ法律上の束縛ある爲めにして、即ち彼等は其子女が既に一人前の人となり、己れは最早勞役に堪へ難しと云ふに非ざる以上は、長く村を去て遠國に赴くことを容易に許されざるなり。而して愈々其自由を得れば大抵異樣

の長靴或は草鞋を穿ち、隊を結で其途に上ぼり、途上は或は物を乞ひ或は野に露營し、或は巨刹の通夜堂に寢ぬることもあり。要するに距離の遠近道中の困難は其の少しも顧みざる所にして、唯だ一度靈地に詣でゝ多年の本願を達するを得ば、即ち欣喜措く能はざるなり。彼等の間には組合を設け、互に醵金して此巡禮費を辨ずることあり。

斯くパレスタインの靈地に詣でゝ神前に一丁の蠟燭を捧げ、且ジョルダン河の神水を戴かんと欲する巡禮者は、年々增加の傾あり。而して往時は概ね陸路より赴きたるも、當今は先づオデッサに出で、それより割引滊船に乘てカイァア或はジャファに赴くこの常なり。毎春滊船會社は此種の旅客の爲めに特別に船を仕立て其の參詣の便を圖れるが、費用は露西亞の中央よりパレスタインの海岸に至る間の往復にて五十ルーブル(殆ど三十弗)位なり。

此等の巡禮者は道すがら案内記に從て種々の靈場を參拜すること、中世時代の羅馬教徒と異ることなし。而して其道中に於て病に罹りたる者等を保護する爲め、「パレスタイン正教協會」なるものありてオデッサ、コンスタンチノープル及ジェルサレムに休所及病院を設置せり。而して愈々無事にパレスタインの海岸に上陸するや、背には唯だ重々しき布片の包を負へる彼等巡禮者は、口に所謂の歌を唱へつゝ繰るり〳〵とジェルサレムの町に辿り行くなり。予も曾て彼等が遙に「聖市」の外壁を望み見、忽ち地に俯して塵土にキッスするを目睹したることあり。而して長途の疲れの爲めに病を得て靈地の露と消ふるものも、毎春少なしとせざるなり。

露國政府は其臣民の便利を圖る爲めにジェルサレム市の門外に一大僧庵を設け殆ど町の体裁を爲せり。又第二帝國の時に佛蘭西と力を合して「靈屋」の上に聳へる圓屋塔を再建したることありと雖、露西亞人は之を以て甘んぜずしてパレスタインの處々の寺院を再興し、且露西亞語及亞剌非亞語を教ふるの學校をも設立せり。即ち露西亞の勢力が其信心と共にシリヤに雄を唱ふるを想見するに足るものにして、他日若し蒸旗飜々として地中海頭に飜へることあらば、此等平和の民は或は化して其の東道の主たらんも測る可らざるなり。

第五章

露西亞教會の聖餐式及僧侶と信徒との關係。僧侶妻帶の結果。結婚式。離婚。懺悔。其式の實況。懺悔式の謝金。聖式を受くべき法律上の義務

宗教が道德及政治上に及ぼす影響を明かにする爲めには、唯だ其儀式及習慣を知るを以て甘んず可らず。即ち僧侶と信徒との關係如何を知悉せざる可らざるなり。蓋儀式規則の類は敢て深く顧みるに足らざるが如しと雖、其實其如何んに因て宗教其者の上に少なからざる影響を及ぼすものなり。例へば聖餐式(サクラメント)は羅馬教會も希露教會も共に之を有すと雖、之が爲めに僧侶信徒間の關係の深淺を來す其度合は、決して同じからざるなり。

第一儀式慣例に對する二教會の心得は敢て同一ならず。東方教會は新式新例を輸入するを非常に厭ひ、從て羅馬流の儀式を寛容する能はざるも、羅馬教會は此點に於ては遙かに寛大にして、希臘人の守り來れる儀式に對して必ずしも翻屈なる處置を爲さず。されば羅馬教會は東方教會の儀式を是認して寛容すべしと雖、東方教會は改正省略せられたる羅馬教會の儀式を否認して之を許さゝるなり。されば コンスタンチノープル教會は西歐の人にして正教に改宗せんとする者に再び洗禮を受けしめり。露西亞人も往時は同一の手續を加へしも今は然らず。又聖餐式に於て正教會は夫の新教派の如く僧侶俗人を區別せずして聖餐を分つと雖、羅馬教會は然らず。其他種々の點に於て異同の研究すべき者ありと雖、餘事は暫く擱き、結婚及僧職任命に關する儀式は實際上の影響の最も大なる者なるが故に、特に注意するの價あり。勿論理論上に於ては正教派(オーソドックス)も舊教派(カソリック)も其說を同ふすと雖、實際の慣例に於ては前者は寧ろ新教派(プロテスタント)に近き所あり。即ち希露教會は結婚及就職二者を以て敢て兩立し難き者とは爲さゝるも、羅馬教會は之を區別して一は俗人の式にして一は僧侶の式なりとせり。加之希臘及露西亞に於ては、啻に獨身が就職の條件たらざるのみならず、却て既婚の人のみが僧職に就くを得るの有樣にして實に結婚は僧侶となるの一準備たるなり。

最高の僧職即ち大僧正は一の例外なりと雖、猶此習慣の影響の大なることは殆ど

言ふ可らざるものあり。夫れ僧侶は妻子を有し、從て信徒と其居を共にし其生活を同ふするが故に、自から思想及感情に於て信徒と相隔離するの憂少なし。是れ僧侶の感化を深くし且國民の融和を助くる所以の道にして、正教國の如く各自銘々に教會を別にするの國に於ては、僧侶も亦市民たるの狀を呈せざるに於ては甚だ不可なるなり。此外正教會の僧侶は宗務院の同意に皇帝の裁可を經れば僧籍を脱して還俗するを得る事も、又舊教派と異るの點なり。

斯くて二教會の僧侶は其起原及職務を同ふするにも拘らず、其地位及勢力の點に於て大に相異なるに至れり。正教會の宗務會則は敢て其僧侶と信徒との間に一大溝渠を設くるが如きことを爲さず。從て僧侶は普通俗人と甚しく異ならずして、結婚は正に其の一大鎖鑰たり。且彼等は妻子を有して俗緣深く、且俗界以外に特別の首長を有することなきに因り、夫の舊教國の僧侶の如く別に俗外に超然たる堅固の門閥を作る能はざるなり。要するに希露教會は僧侶の身に神聖なる性質を帶ばしむること羅典教會よりも少なく、又其頭上に燦爆たる御光を放たしむること大に劣れり。即ち人民より之を見れば、僧侶は神の代表者たるよりも寧ろ祭壇の奉仕者たるなり。

結婚に關しては二教會の間に大なる相違なく、東方教會は又羅馬派と新教派との中間に立てり。連添の死後再び結婚するを好まざるは往古の耶蘇教徒と異るなしと雖、東方教會は俗人に限り三度目までは結婚を許し、四度目に至て之を禁ぜり。而して結婚の聖餐式を行ひ、其の神聖にして破る可らざることを唱ふるの點は、正に舊教派と一致する所にして、又一方が貞節を破る時は離婚を要求して可なりと爲すの點は、新教派と一致する所なり。而して被害者の方は新に結婚を約するを得るも、加害者の方は此特權を有せず。又露西亞の正教徒に取ては結婚は皆教會の結婚にして、宗教上の規定は正に民法に代りて有力なり。故に時としては共謀して教會を欺て詐僞の結婚を行ひ、或は相謀りて離婚の目的を達することあり。「夫が故らに自ら罪を負ふて其妻が他の情夫と再婚するを助くるの例は珍しからず。妻にして此の如き献身的の行を爲す者は敢て絶無と云ふには非ざるも甚だ稀れなり。而して罪を犯して離婚となりたる夫又は妻に他の男女と再婚するを許すべきや否やは隨分に八ケ間敷問題なるが、兎に角露西亞の教會は稍寛大の方

針を取り、必ずしも之に絶對的の反對を爲さず、現に斯かる男女に結婚を許したるの事例もなきに非ざるなり。

懺悔に關しても希臘教會と羅典教會との間に理論上の反對はなきも、其實際上の慣習に至ては敢て同じからず。前者は後者に比して寧ろ簡單に大躰の事を懺悔するを以て甘んじ、敢て細密に罪狀を穿鑿するが如きことを爲さず。通常露西亞の「コンフェッソル」(懺悔を聽て罪を赦す僧)は懺悔者に對して先づ問を發す、特に普通人民の場合に於て然り。聞く所に據れば掛僧は農夫に對しては唯だ「盜みたることありや、泥醉したることありや」、の二問を發し、農夫は之に應じて「罪を犯したることあり」と答へ、其れにて罪を赦さるゝの常なりと云ふ。而して餘り綿密に問を發せらるゝ時は、却て僧に對して苦情を唱ふることあり。例へば或官吏は賄賂を取りたることありやとの急所を刺すの問に接し、そは問はるべき限りに非ずと注意したりと云ふ。要するに正教派の主義に從へば、懺悔は敢て罪を贖ふ爲めの者に非ずして、唯だ過を正し道に返へるの一方法に過ぎざるに因り、敢て深く信徒の秘密に立入りて之を暴くことを爲さず。是れ其の羅典教會と異なる所なり。

彼等が懺悔を行ふの實狀を知らんと欲せば、先づ自から「大精進期」の始或は終に教會に赴きて之を見るを可とす。別に懺悔室の設あるに非ず、又大抵は掛僧及懺悔者の爲めの坐席もなし。而して他の人々と隔つる爲めには、薄き紗帳の類にて境界を作ることありと雖、敢て全く其姿を隱すに足らず。否此簡單なる境界すら設けられざることあり。而して幾百幾千の人は順次に進み入り、唯だ僅に一二分の簡單なる問答を行ふて立ち去る其有樣は、實に無意味の儀式と評するの外なき程なり。蓋此場合に於ては一時に多數の人集り來るに因り、餘儀なく斯かる始末と爲ることならん。されば僧侶及信徒中にも斯かる儀式を以て甘んぜずして、眞實丁寧に懺悔の式を行ふ者あり特に古風なる信者は、問答の際、細密に一身の私事を問ひ質し又自白するを憚らざるなり。然し之れを概言するときは東方教會は此式を行ふこと簡單にして、羅馬教會の如くに丁重ならざるは、認ふ可らざる事實なり。

斯かる緒果を生じたる原因は何なるやと云ふに、先づ第一には僧侶の妻帶なるべし。妻帶すればとて敢て必ずしも秘密の俗人間に漏るゝ恐多しと云ふには非ざ

るも、兎に角之が爲めに僧侶は凡俗以外の人たるの趣を減じ、人をして合掌隨喜の涙を注がしむべき靈妙の光彩を失ひ、從て宗教上の儀式を行ふに當り、彼等信徒は敢て之に熱心燃ふるが如きの信心を捧げず、唯だ外形外容のみにて甘んずるに至りたるなり。又第二には懺悔式を行ふに當り、洗禮並に結婚式の場合と同じく僧侶に謝金を納むるの定めなることも、又之をして形式的とならしめたる一原因なり。實に露西亞の教會にては何事を爲すにも金を納めざるを得ざるなり。是れ畢竟僧侶の貧乏なるより來りたるものにして、懺悔式の爲めに農夫は十乃至二十コペックを納め、富民は數ルーブルを納めり。固より其の多少は身分に依り又人々の心得にて異るものと知るべし。

次に國家と教會との關係甚だ密にして、法律が宗教に干渉することも又一大原因たり。即ち法律上の規定に據れば、正教を奉ずる露西亞人は少なくも毎年一度聖式を受けざる可らず。勿論今日に於ては之を實行せざる者甚だ多しと雖、猶法律の明文は依然として存せるに因り、之を勵行することは敢て出來難きに非ざるなり。斯くて國家の干渉の甚しきや、遂に教會をして警察の手足たるが如き觀を呈せしむるに至れり。是れ人民をして政府と僧侶とに對して非常なる猜疑心を懷かしむる所以にして、實に宗教の爲めに最も悲むべきの事たらずんば非ず。聞く所に據れば、或州に於ては懺悔式の際懺悔者に對し露西亞及皇帝を愛するや否やとの問を發することありと云ふ。加之國家の安寧を害し又は皇帝に危害を加ふるが如き陰謀には、死すとも加はらざるべしと誓はしむることありと云へり。是れ決して信者の信心を厚からしむるの道に非ざるなり、眞心よりして聖式を行ふを望ましむるの道にあらざるなり。其の虛禮虛儀に流るゝも亦怪むに足らずと謂ふべし。

懺悔式終れば官吏及兵士は堂司より其の證券を受く。僧侶は凡て聖式を受けたる者の姓名を帳簿に記入し、毎年之を僧正に報告す。僧正は更に之を宗務院に報告し、宗務院總監は之を皇帝の覽に入るゝなり。此等の報告に據れば、全國の正教徒の中幼兒を除き五千萬内外は其の宗教上の義務を行へり。而して之を行はざる五六百萬人は之を數項に分てり。即ち病氣、怯弱、無頓着、冷淡及「分離或は邪宗に一流るゝの嫌疑ある者」等是れなり。然し金を與ふれば教會は直ちに其名を帳簿中

に記入すべきが故に、政府の目を欺くが如きは敢て困難に非ず。而して是亦眞正なる信心を養はずして、却て形式を粧ふの弊を助くるは已むを得ざるなり。

上來記し來りたる所に依れば、希露教會が羅典教會と異る所は敢て啻に外觀上の形のみに止まらずして、深く其精神氣風に於て同じからざるものあるを知るべし。吾人は未だ教會の組織及教會と國家との關係等の十分の研究に立入らずと雖、猶希露教會の道德上の感化及社會上の價値如何は、之を知るに難からざるなり。抑も宗教の形は深く政體と相關係する者ありとは能く人の唱ふる所なるが、げに舊教は中央本山の主義を取り、上に無上權力の法王を設け、下は信徒に服順ならんことを教ふるが故に、自から中央集權と王政とに傾向あり。又新教は個人の信仰と自由討究に餘裕を與へ、分派の紛起を妨げざるが故に、自から自由地方分權及代議政體に傾くの性質あり。而して正教會に至ては其要素前二者の如くに純ならざるに因り、敢て何れにも直接の傾向を有せず。寧ろ如何なる政體とも相容れ並び立つを得べし。即ち自由も專制も共和政も王政も、正教に取りては皆同一にして、要は唯だ四圍の境遇に從て宜きを制するに在り。されば自由の精神を傳ふることもなく、又卑屈主義を植ふることもせず。是非何れに向ふも唯だ人民の天才の動くが儘にして、即ち歷史上の成行如何に存するなり。故に正教は世界を從へるよりも寧ろ之に從ひ、國家を自家の摸型に倣はしむるよりも寧ろ自から國家の模型に倣はんとするものなり。讀者若し此事を心に記せば、露西亞教會の組織及運命を研究するに於て、獨り自から首肯する所あるべきなり。

第六章

教會と國家との關係。露西亞教會史の主もなる時期。ビザンスに從ひたる時期。二中央管長の時期。獨立大管長の時期。大管長ナイコン及靈俗二權力の爭。彼得大帝と大管長制度の廢止。宗務院の創設。教會の事務に於ける皇帝の權力。皇帝は教會の首長なりとは眞なりや

露西亞教會の歷史を說明するものは專制政治なり。吾人若し其運命及組織を正

當に了解せんと欲せば、吾人は常に其の專制國の國立敎會なることを忘る可らざるなり。蓋全能力を有する皇帝の傍に立つや、敎會は唯だ其境遇に自己を適應せしむるの外何等の詮術もなく、遂に俗權の下に屈服するに至りたるなり。是れ羅馬敎會に於ても皇帝の勢力の强大なる間は免るゝこと能はざりし所にして、而かも露西亞敎會は幾百年間斯かる專制權の下に立ちたりとせば、其の如何の影響を蒙りたるべきや知るべきなり。且夫れ其の始めに師事したるビザンスの敎會は國家の隷屬たる地位に在りたる者にして、此模範が卑屈なる風を吹き込みたるは固よりなり。尋で東羅馬帝國の亡ぶるや、露西亞皇帝は東帝國皇帝の相續者を以て自から任じ、之を學ぶを努めたり。唯だ其のビザンス宮廷の偶像的儀式を輸入せず、又東帝國皇帝の如くに自から神學者を氣取て敎理の問題に喙を容るゝが如きことを爲さゞりし二點は、大に喜ぶべき所たり。されど敎理を尊敬すると同時に僧侶は服從の地位に立たせられ、僧侶は又之を以て甘んじて、啻に反抗の意を示さゝるのみならず、却てコンスタンチン及セオドシアス諸帝の時代の流儀に從ひ、拳々忠順の意を表して得意としたり。

されど專制政治が敎會組織に及ぼしたる影響は極めて徐々に來りたり。露西亞敎會は彼得大帝の時に至り遂に大に國家の手細工を蒙りたる其以前に於て、幾多の變化變遷を經過したりしなり。人或は九百年間を一唾の中に過ごしたるやに思ふものありと雖、其實露西亞敎會は活潑に且悲壯なる歷史を有するなり。即ち第一には夫の父にして師なるコンスタンチノープルの敎會より次第〳〵に分離獨立したることにして、第二には本國に於て靈俗二權力の關係の益々密となりたることと是れなり。

外に對し且內に對する其關係より露西亞敎會の歷史は自から四期に分れり。即ち(一)コンスタンチノープル敎會に全く從屬したる時期、(二)徐々に自治を得るに至りたる過渡の時期、(三)全く獨立したる時期及び(四)大管長制度並に晩近の宗務院制度の時期、是れなり。

第一期の間は中央管長(Metropolitan)は大公(Grand-Kniazes)と同じく首都キーフに住居し、通常コンスタンチノープルの大管長(Patriarch)に因て任命せられ、且露國の言語及習慣に通せざる希臘人なりしこと屢々之れあり。されば諸公等が度々力を

盡して此羈絆を脱せんと試みたるにも拘らず、當時の露西亞教會はビザンス大管長の從屬たるを免るゝ能はざりしなり。次に韃靼人の侵入及政治的中心のニーブル河畔よりヴォルガ地方に移りたる事情等は、ビザンスと露西亞との關係を疎遠ならしめたり。即ち大公に伴ふて先づヴラヂミルに移り、更に又莫斯科に移りたる中央管長は、縱令猶希臘大管長の副官長たるを免れざりしと雖、而かも其人は純然たる露西亞人にして且僧侶間より選擧せられ若くは君公より任せられたり。而して諸公間の內訌と韃靼人の支配とは益々中央管長をして勢力を養ふを得せしめ、露西亞教會は諸公の相爭ひ治者と被治者との相反ける中に立て、能く人心を糾合統一するの任に當りたり。されば中央管長は莫斯科帝國の建設を促すに於て大に與て力ありたるものにして、且此時代は露西亞教會の最も盛んなりし時なるが如し。當時又西部の諸公は敢て莫斯科に頡頏せんと欲して、別に中央管長を置き、ヴィルナ或はキーフを以て交代に其本山と爲したり。勿論莫斯科の管長は依然として「全露西亞人の管長」と稱したるも、十七世紀の終までは其の統一行はれず、僅に小露西亞の大露西亞に合併せらるゝに及び、始めて其の實行を見るを得たり。

韃靼人の迫ひ拂はれて莫斯科帝國の新に勃興するや、教會は寧ろ王權の下風に立たざるを得ざることゝなれり。例へばアイヴァン四世の如きは諸公を鎭壓すると同一樣に僧侶をも壓服したり。然れども帝の死後間もなく、即ち千五百八十九年其嗣子セオドル帝の時、露西亞教會は愈々ビザンスより獨立して別に大管長を設くるに至れり。此計畫はセオドルの義兄弟なるボリス、ゴヂユノフの立案にして、即ち夫の僕農制度を設けたると同一人の手に成りたるものなり。而して事の此に至りたる次第は敢て他に非ず。當時露西亞は大に膨脹して其版圖頗る廣く、到底之を遠くビザンスより支配することゝ能はざる其一方に於て、ビザンチン帝國は既に土耳其人の爲めに倒されて大管長は又昔日の地位を保たず。即ち獨立の大管長を設けんとするに至りたる所以にして、國家が既に外人の支配を脱却せる其際に、獨り教會のみが依然として外國教會に屬せんとは、固より有り得可らざるなり。而してゴヂユノフが之を決行するに當り、而して其の將來に於ける至大の影響を豫想したるや否やは吾人の知る能はざる所なりと雖、兎に角彼が教會を獨

立せしめたるは正にアイヴァン諸帝が「ザー」(露西亞皇帝)の稱號を僭したると同一政畧を遂行したるなり。思ふに大望心ある彼は此邊の意味をも暗々に感じ居たりと見へ、新大管長は之を外より迎へずして「ヨロップ」と稱する露西亞人をして之に當たらしめたり。

莫斯科の大管長は純然たる國家的性質を帶び、其の支配區域は露西亞帝國の政治的境界を出でず。而して其選擧は全國の僧正會議を開て之を行ひ、先づ三名の候補者を選びて次に皇帝其中より指命せり。大管長の特權は正味の所中央管長と異ることなく、唯だ其名譽の遙に大なるのみ。即ち彼は宗教裁判の長にして、此中には僧侶の事件、結婚の問題及相續に關する訴訟をも含めり。是れ彼得大帝の時に至るまで行はれたるの制度なり。而して其經費は富有なる寺の收入及其財產にて之を支辨したり。又其居宅は皇帝の宮廷に擬して之を造り、侍人部局の設に至るまで、儼然として王公と異ならざりしなり。然れども此改正の爲めに露西亞教會は大に其壯大を加へたりと雖、其獨立に至ては必ずしも然らざるが如し。是れヒザンスとの緣を絶て全く孤立し、俗權の爲めに大に干涉左右せらるゝを得るの有樣となりたればなり。されば皇帝が早晩之を忌で其特權を減殺し、或は之を全廢するに至るべきは自然の勢にして、現に僅に百年有餘の壽命を保つに過ぎざりしなり、(千五百八十九年より千七百年まで)。

大管長の新に設けられたる其當時は、宛もルリック王家の血統正に絶へて、國情紛々を極めんとする場合なりしに因り、其間に立て管長が國內の統一を圖り、ロマノフ王家の新に位に即くを助けたる等の功績は決して輕からず。且十代の大管長中には活潑に國事に與かりて露西亞帝國を利したる人物頗て少なからず、特に夫のナイコンは其中最も頭角を現はせる者にして、實に彼得大帝以前第一流の偉人たり。蓋露西亞教會の歷史中俗權と相對して雌雄を爭ひたるは、前後唯だナイコンあるのみにして、之が爲めに露西亞人は往々彼を非難し、慾深くも露西亞の法王たらんとしたるの俗僧なりと云ふ者あり。然れども是れ寧ろ彼を誤解せる者にして、ナイコンの如き達觀博識にして且卓犖不羈の偉人物が、彼得大帝より二三十年以前の露西亞に現はれんとは、吾人の窃に驚嘆する所なり。抑も彼の主張する所に據れば、教會と國家とは相待ち相依るべきものにして、決して何れを高

しとし何れを卑しとする能はず。即ち彼は斯く二者の關係を說き、更に嚴然として斷言して曰く『國家が敎會の上に立て之を支配せんとするは亡狀の甚きものにして、僧侶が頭を垂れて之に默從するは卑屈の極なり』と。曰く『吾々が王或は皇帝より神聖なる權力を受くるには非ずして、夫の執政者こそは吾々の爲めに其地位の神聖を來すなり。是に因て之を見れば高僧たるは忠臣たるよりも遙に優れるを知るべきなり』と。此大膽不敵なる主張に對し、異論は盛に沸騰せり。然し温順なるアレキシス皇帝は敢て自から宣告を下さず、之を僧正會議の判斷に附したるに、同會議は彼の職を剝でホワイト湖畔の僧庵に流せり。後彼は其の自から莫斯科の北に設けたるニューエルサレム寺に歸ることを許されたるも、未だ之に達せずして途上に死せり。而して其遺骨はニューエルサレムに葬むられ、今も猶此偉人の名殘を留むと雖、巡禮者にして之に詣づる者もなきは實に悲むべし。

扨て靈俗二權力の爭は此の如き結果に終りを告げ、敎會は到底國家に敵する能はざること明かとなりたれば、爾後敎界寂として氣焰揚らず、ナイコンを界ひとして茲に衰頽の氣運に向へり。且ナイコンの行いたる儀式上の改正は、更に異論者を同派內に生じて遂に夫の「ラスコル」(分派)の發生を招き、從て本敎會の勢力を減殺せり。而して異派分派に對して爭ふが爲めに、却て益々俗權に依賴するの必要を生じ、民間に於て失ひたるの保護を皇帝に向て求めざるを得ざることゝなれり。此點より見る時は露西亞敎會の地位は、其頃の英國敎會が新敎徒及異說派等に對したると畧同一にして、斯くて大管長の勢力は次第に消へ失せ、遂に彼得大帝の爲めに全く廢止せらるゝに至れり。

彼得が之を全廢したるは固より無理ならぬ次第にして、元來大管長制度は保守主義を代表し、總て新改革の妨害たるべきものなり。且彼得は大管長フィラレットの曾孫にして、其の如何に皇帝ミカエルの名に因て實權を振ひしやを知悉せり。又夫のナイコンが其父アレキシスを如何に惱ましたるやを知れり。故に彼が夙に大管長制度に一大打擊を加へんとの志を懷きたるは、敢て怪むに足らざるなり。加之彼れの此改革は敢て其の新發明に非ず。當時西歐諸國は何れも敎會を輕視して、俗權は恣に宗務に干涉したり。即ち彼得は其旅行中に見聞したる所を輸入したるまでにして、且一人に大權力を委ねずして之を國躰に與ふるの制は、敢て唯

だ教會に對してのみ試みられたるに非ざるなり。元來此制は當時の西歐諸國特に佛蘭西に行はれたる所にして彼は實に之を學で夫の所謂コレージヲ制(院又は會の意)を起し、萬事に於て權力の分割を圖りたり。即ち大管長を廢したるは唯だ此計畫を教會に及ぼしたるまでにして「ホーリーシノッド」(Holy Synod 神聖法教師會議の意、但通常は宗務院と譯す)は實に始め數週の間は「エクレシアスチカル、コレージ」(Ecclesiastical College)宗務院の意)と稱せられしなり。萬事を劃一なる規則形式の下に整然たらしめんとしたる彼が、宗務をも國務と同一模型の中に投じて、教會の精神及慣例の如何を顧みざりしは敢て驚くに足らざるなり。

要するに彼得の大主意は己れと相頡頏するの相手を倒して、之を自家權内の者と爲すに存したるは、其僧正セオファナス、プロコポヴィッチをして起草せしめたる「宗務條例」に徴するも明かなり。即ち彼は其中に鹽俗二權力の兩立と云ふことを明かに否認し、「事理に通ぜざる人民は二者の區別を明かにせず、教會管長の虚威虚嚴に眩惑して之を一個の君主の如くに思ひ、少なくも皇帝と同等なる者と爲せり」とて之を非難し、更に又「人民は何事に付けても教會管長を皇帝よりも重んじ、甚しきは後者の不利を犯して前者に加勢し、以て神に仕ふる道なりと思へる者あり」と説き、飽迄も教會を自己の支配に歸せしめて、一國家内に二君あるが如きの觀を呈せしめざらんとの意を示せり。

斯くて彼は大管長を廢し、自己選擇の議員より成れる宗務院を以て之に代へたるが、猶之のみを以て甘んぜずして、彼は宗務條例中に僧正等が虚威を衒ひ盛容を粧ふを戒め、其名譽光榮は到底皇帝に劣れることを訓示せり。其の用意の如何以て知るべきなり。

然れども此改革を行ふに當ては、彼は其平素の流儀にも似合はず、極めて細心に極めて婉曲に之を行ひ、成るべく人目を驚かし民心を騒がすことを避くるに努めたり。即ち彼は先づ其臣民をして大管長なる者を有せざるも別に差支なきことを知らしめん爲め、假りに之を空位に附してステファンヤヴォルスキーなる者に臨時の代理たらしめ、之を「エキザルク」と稱したり。而して其後二十年大管長なる名の漸く歴史上の記憶となり、又高位の僧侶は殆ど皆新顔となり、且教會の重職は總べて西歐の主義氣風を有する小露西亞人の有となりたる頃を見澄まし、茲に始めて

其眞意思を發表せり。而かも猶其の細心なるや、辭を卑くして僧正等の贊同を求め、且其宗務院の外觀を裝ふて成るべく人目を欺かん爲め、新院の職務權限を規定するの法例は僧正及長老の協贊を經べきものと爲したり。加之彼は又東方教會の大管長に向て之が認可を請へり。當時無勢力の淵に沈める彼れ大管長は固より一言の異議を挾む謂はれなく、茲に愈々宗務院は露西亞教會大管長の相續者として公然世に認めらるゝに至れり。而して彼得大帝の創設したる行政上のコレージ制は、アレキサンドル一世の時大臣制度に改められたるも、宗務上のコレージ制即ち宗務院は依然繼續して今日に至れり。若し夫れ宗教上の觀察點より之を見る時は彼得は正しく新教派の感化を呼吸せるものにして、普通の僧侶と僧正とに同等の地位を宗務院内に與へたるが如き、既に其新教的なるを伺ふに足るべし。蓋彼は年若くして外來の新教徒を受け、後長じして西歐に歷遊して新空氣に觸れ、從て其宗教心は確かに多少の變化を受け居たるなり。其の斷然新教を輸入せざりしは、流石の大帝も聊か躊躇する所ありたればなるべし。

扨て教會の事を處理するに宗務院の制度を以てするは正教會の取り得る最後の方法なるが如し。今日何れの國と雖正教派に屬する者は、唯だ名と形に於てこそ多少の差はあれ、其の實際の本質に至ては皆宗務院に似たる團躰の會議に因て事を行ふに非ざることなし。實に宗務院の會議制は甚だ便利なる制度にして、自由國にも專制國にも、王國にも共和國にも、凡て多少の斟酌を加ふれば到る處として適せざるはなきなり。

露西亞の宗務院は政府と社會との双方に跨りて關係を有せり。其議員は普通の官吏と同じく皇帝の任命に係り、其院は唯だ皇帝の代理と爲て宗務を取扱ふと云ふに過ぎず。要するに宗務院の宗務に於けるは猶樞密院の國務に於けると同一にして、即ち皇帝手中の一機關たるものなり。されば國家は勝手氣儘に教會を支配すべきやと云ふに、事實は必ずしも然らず。是れ畢竟國家の權力を以てするも、國民の思想風俗及正教國間の慣例を蔑如に附するが如きは、到底爲し難き所なればなり。

論じて此に至て吾人は美妙なる一問題に到達せり。即ち露西亞の皇帝は果して其教會に對して法王に同じき關係を有するや否やの問題なり。外國人中には往

々斯かる考を懐く者なきに非ずと雖、元來東方正教會の首長たる者は基督一人にして、其他は何人と雖眞の首長には非ざるなり。されば皇帝は縱令至大の權力を有するとも、之は唯だ教會の事務に關するのみにして、其教義に至ては皇帝と雖容喙の權利なきと卑賤なる一信徒と選ぶとなし。否、宗務院其者と雖教義教則には關係するとなく、若し時に之を議するとありとせば、是れ唯だ其の調査會として之を研究するのみにして、其の最後の判決は教會全躰の會議に於て之を下し、皇帝は之に儀式上の裁可を與ふるなり。

教會内の重職を指名するの權利は主權者の特權に屬すると、露西亞に於ても西歐と異るとなし。然し此場合に於てすら其權利は皇帝と宗務院との分有する所となれり。人の傳ふる所に據れば、宗務院の創設せられたる時或高僧が皇帝に向ひ、今後は別に大管長を設けられざるべきやと問ひたるに、彼得は之に對し『朕は當に大管長たるべし』と答へたりと云ふ。此話の眞僞は何れにせよ、兎に角露西亞の皇帝は果して露西亞教會の首長たりやと云ふに、必ずしも然らざるが如し。即ち教會の主要なる番人保護者として皇帝を呼ぶは正教國の常にして、其權能は概ね之を保護監守するに止まれるなり。夫の彼得の言の如きはキャサリンがヴォルテアに贈りたる書中に於て、自から「希臘教會の首長」と稱へたると同じく、到底文字通りに解釋す可らざるものと知るべし。且露西亞皇帝が果して教會の首長たるの實を有するとするも、是れ唯だ事實上に於て然りと云ふのみにして、決して法律上然るには非ざること、大に英獨等の教會と異る所なり。英國に於ては女王は事實上並に法律上に於て英國教會（アングリカンチャーチ）の首長にして、大陸の新教國も概ね亦然り。然れども露西亞の皇帝は此點に於ては甚だ寡慾にして、又神學者間にも之を唱ふる者あらざるなり。

されば露西亞の皇帝は敢て自から法王を學び、或は大管長を氣取るが如きことを爲さゝるのみならず、元來皇帝は教會僧職の階段中に於て、何等の地位資格を有せざるなり。其の教會の事に關係するは唯だ專制君主として之に臨むのみにして敢て僧侶の長としてには非ざるなり。即ち教職の地位より云へば彼は全く教會に縁なき者なり。

然れども茲に大に注意するの必要あるは、露西亞皇帝は縱令教職上の性質を有せ

ざるも之を多數人民の眼より見れば非常に宗教的性質を有すること是なり。即ち彼等は皇帝は神の命に依り神に代て耶蘇教徒を保護指揮するものと信じ、此世に雙びなき神聖尊嚴なる人として之れを尊崇せり。而して其の忠義心も自から之より生れ來るなり。原註。千八百八十七年三月アレキサンドル三世に危害を加へんとしたる者ありたる時ドン河畔のコサック人の或村團より帝に上りたる表は能く此感情を露はせり。其中に曰く『神聖の法則に據れば、主權者は神に依て任命せられ、又神聖にせらるゝなり。主權者は即ち神なり。人の身躰を指揮する人類を支配し且其の備へあるが如く、人民を代理せし正路に就しむるは即ち神なり。何となれは主權者は神よりの上に立つ者他に一人もなけれはなり。主權者は此世に於ける神の代理なり。君公の心は神の心なり。上に述ふるか如きは正典の教ふる所にして、又我祖宗の遺訓なり。臣等陛下の赤子にして忠順の民なるドン河畔のコサック人は、陛下に對する醇厚に從て、常に陛下の爲めに財産を抛ち生命を棄て、以て我祖宗の垂れたる規範に從はんことを欲するものなり。』彼等か一死以て皇帝の爲めに盡すを辭せざるも自から偶然に非ざるを見るべきなり。

要するに露西亞教會は國立の教會にして、國家との關係頗る深し。而して其の深きほど其の國家に從屬する度合の深きも固よりなり。然れども同時に又國家は教會に對して相當の敬意を表し、以て民心を和ぐるの必要あるに因り、國家の權力は敢て無限に教會を蹂躙するが如き事あることなし。即ち其干渉する所は教會の人と事とに關するのみにして、其教義若しくは慣例すらも超然俗權の支配外に立てり。されば宗教は皇帝の權力以外に立てるものにして、且教會の事務すらも妄りに之に干渉して人民の感情を害するが如きは、其敢て爲さゝる所なり。是れ人民の信仰否迷信の爲めに自から專制權の壓屈するを制するものにして、他國に於ても見るを得るの事實なり。蓋宗教は專制主義を教ふるの場合に於ても、猶專制君主の一制肘たるなり。

第七章

教會內部の組織。宗務院。其組織及其事務取扱。其正員及補助員。宗務院總監及其文書局。宗教上の出版檢閲。僧正。僧正管轄宗區の廣さ。宗區會。離婚事件の取扱。宗區會書記の勢力。僧正の地方會議

吾人は之より教會內部の組織を研究せんに、第一宗務院は俗事の側より之を見れ

は露西亞に於ける會議組織の先驅にして、宗教上より之を見れば先きの大管長に代りて其權利を行へる者なり。而して彼得は之を設くるに當り、議員の人撰は全く自己の掌中に握りながら、之に諸種の僧侶を加へて一種の代議會を起すの意ありたるが如し。先づ初めには僧正(ヒエロモンク)は少數を占め、其下に長老(archimandrites)即ち僧庵或は巨刹の長)と俗僧議員とありたり。今日にては正教國の慣例に從て僧正に重きを置き、之をして多數を占めしめり。議員の數には制限なく、皇帝皆之を任命すと雖も、其理由及び任命期は必ずしも同一ならず。之を大別すれば議員は正員及び補助員の二種より成り、正員は常任にして補助員は一時の就任に止まる。又正員議員はキーフ、莫斯科及彼得堡三都の中央大僧正(メトロポリタン)之を率ふ、就中ノヴゴロッド及聖彼得堡の「中央大僧正」は之を「第一の議員」と稱し、概して之に議長の椅子を與ふ。又夫の別に獨立せるグルーシァ(即ちジョーシァ)の監督(Exarch)も習慣に依り宗務院の議員たり。其他の議員は特別の任期間任命せらる、即ち四五名の大僧正、僧正及長老等なり。其下に妻帶の僧侶二名あり、其内の一名は通常皇帝に懺悔式を授けたる僧侶にして、他の一名は軍隊の大布施僧(grand almoner)なり。而して此二名の妻帶僧が宗務院に議員たるは頗る必要にして、其の純僧侶派に對して別種の傾向を代表するの功は決して少なからず。尤も此二名の俗僧が能く他の七八名の無妻僧と相對抗するを得るは、唯だ世上の輿論及政府の應援を得ることあるに由るなり。

宗務院は彼得堡に在り。莫斯科にはグルーシァと同じく唯だ其地方委員の存するのみ。而して地方の僧正にて議員たる者は其受持宗區内の所用も多く且宗務院には更番に出席するの常なるに由り、結局常に首府に居住せる者即ち彼得堡の中央大僧正と皇帝の懺悔僧とは、同僚間に最も勢力を有せり。而して事を議するに當り、或は高等文官をして其議に參せしむることあり、或は又全國の僧侶より意見を徵することもあり。

宗務院と相離ざる者は皇帝の代理人にして、即ち宗務院總督(High Procurator)と稱する者是れなり。此總督は常に俗人にして俗權を代表し、彼得大帝の訓示中には之を「皇帝の眼」と稱せり。而して其職責は教會の事務が能く敕令と違反するとなきやを監視するに在り。露西亞には嘗てアレキサンドル一世の時暫時宗教大臣を

置きたるとあるも、之を除くの外斯かる制は存ぜざるに因り、總督は即ち之に代り、大臣會議にも出席し、直接に皇帝に對して責任を負へり。されば總督は皇帝と宗務院との間に介在して、政府提出の案を其議に附し、或は其の決議したる所を皇帝に齎らして、裁可を請ふ如き、一に皆其手に依て行はる。即ち宗務院の一言一行皆總督の與かり關はらざることなく、又其の違法の決議を爲したる場合には、之を破棄するの權あるなり。總督は又教會僧侶並に正教全般の事に關して毎年一回報告書を皇帝に提出するものとす。

彼得大帝は僧侶をも軍隊的に支配せんことを欲して、總督は常に武人たるべしとの意見を有したり。ニコラス帝の時にもプロタソフ伯と稱する武官は長く此職を占めたり。當時は大抵の高等文官に任ずるに武人を以てしたる程の有樣なれば武人が僧侶の會に長たるも敢て深く驚くに足らざるべし。然し今日は時勢一變して復た此の如き變態を見ることなし。

プロタソフを始め其他往時の總督が最も心を用ひたるは敢て僧侶の改良又は教會の弊を洗ふ等の事に非ずして、唯だ改宗の一事に存じたり。即ち正教を奉ぜざる者は成るべく之を改宗せしめて露西亞教會の支配に引入れ、以て露國の統一及膨脹を助けんことは其主なる目的なりしなり。されば此改宗の事業を行ふに當り、敢て僧侶をして學問若しくは信仰の力に依らしめんとはせずして、唯だ要ある毎に國家の助力を求めしめたり。從て教會は純粋なる宗教的事業には就かずして、却て政府の手足となり、僧侶は又變じて政治的役者の一隊となれり。而して教會が斯かる有樣となるは時勢の如何及當路の人の如何に因て大に異ることあるは固よりなり。

宗務院の管轄に屬する事務は種々に分れり。其中檢閲及裁判の如きものは主もに院の領分に屬し、學校及財務の如きことは主もに總督に因て取扱はる。而して僧侶及教會に關する事件は萬事文書に依て取扱はるゝに因り、種々複雜なる部局の設置自から必要となれり。是れ實に露西亞教會の一特色にして、亦其病根たり。例へば宗務院及總督は各自別々に文書調査局を有せり。而して此局の役人は僧侶の子にして僧職に就く能はず若は就くを欲せざる者より成り、繁文縟禮主義の張本たる者なり。且宗務院の議員は時々變動し、長く其職に在て事務に習熟した

る者少きに因り、自ら此小吏輩は分外の勢力を振へり。蓋宗務院は毎週僅に二三回開會するのみなるに、一年間其机頭に現はるゝ事件は平均一萬に達せり。故に其中開會の間に處理せらるゝを得るは一千を超ゆる能はず、從て其他の事件は之を「普通事件」と稱し、各種の部局に於て調査判決するなり。而して如何なる事件を此「普通事件」中に加ふべきやを決するは總督若は總督配下の文書課々長なり。即ち宗務院の事務は多く課局の屬僚に因て行はるゝ者にして、議員は唯だ儀式的に之に記名するに過ぎず。然れども是れ敢て宗務院に止まるに非ずして、全教會大小の機關は凡て皆此種の等差ある課局の機械的運轉を爲せるに外ならざるなり。宗務院が特に自から取扱ふ事件は、教會の規律慣例に關する件、學林の教授、民間迷信の調査、宗教上の儀式、及宗教に關する出版物の檢閲等なり。此宗教的檢閲は現今露西亞の外には行はるゝ所なし。往時羅馬法王は一切の出版物に嚴密なる檢閲を施せしが、露西亞にては科學、哲學、經濟學等世間的出版物に對しては別に之を檢閲するの官吏あり、宗務院は專ら宗教に關する者を檢閲するなり。

原註。ブラッフォン彼得堡には「出版案内」と題し此二種の檢閲掛の禁止又は第許可したる書籍の目錄を報告する毎月二回發行の雜誌あり、一寸其中に見當りたる所にて、禁書中にはストロース。アサ子ース

コケレル。レナン。パーパート、スペンサー等あり。又譯書中には檢閲官の指圖又は發行者の注意に因り省略削除の上出版せらるゝもの少なからず

要するにアレキサンドル二世は千八百六十五年の敕令を以て大に出版法を改正したるも、猶宗教に關するものに至ては著述も飜譯も新版も乃至抜萃も凡て依然としてニコラス帝の千八百二十八年に發布したる法令を其儘實行せり。されば新聞雜誌の類も苟も隊を宗教の事に容れんと欲せば、先づ此宗教的檢閲の許可を待たざる可らざるに因り、彼等成るべく之を避くるの方針を取れり。是れ蓋露西亞の出版物に宗教に關する者少なく、彼等記者をして宗教に冷淡なるが如き外觀を帶びしむる所以なるべし。

宗務院の檢閲官及其の地方委員は無妻無住寺の庵僧(Monk)より成れり。故に寺を有し且妻を有する普通の僧侶は、其の希望を陳べ又は不平を訴ふるに於て不自由を感ずること、寧ろ俗人よりも甚しからんとす。されば小説若しくは物語類に依て暗に意見を述べ、或は外國にて書を著して遙かに苦言を爲すもあり。要するに此檢閲制の爲めに宗教界の改良を妨ぐることは決して少なからざるなり。蓋し千七百四十年に彼得大帝が之を創設したる其大主意は、教會内の異派分派を防

ぐに存したるも、此目的は少しも達せられずして、却て分派紛然として樹立するに至りたるは已むを得ずと謂ふべし。

宗務院の存するが爲めに露西亞教會は整然として能く統一せられ、中央集權の行屆けること殆ど天下無比なりと謂ふを得べし。地方の僧正は常に中央權力と離れ難き關係と爲れるに因り、其狀宛も地方長官の中央政府に於けると同じきものあり。即ち僧正は何れも宗務院の指名したる三名の候補者中より、皇帝之を任命す。大抵三名中筆頭のもの當選の榮を負ふ。而して宗區即ち僧正管轄區は概ね行政上の區劃即ち州と相當れり。宗區の數は全帝國に六十あり。而して其中歐部露西亞に屬する者は殆んど五十なり。（原註。千八百八十七年の調査に據れば、宗區は歐部露西亞に四十八、トランスコーカシヤに四、西比利亞に六、ストルキスタンに一宗區あり、此外。アリユーシヤン諸島及アラスカは別になせり。）此等の宗區は甚だ廣くして、中には佛蘭西或は伊太利にも優る者あり。之を平均すれば佛國宗區の十五乃至二十倍なり。此點より云へば露西亞教會は大に希臘と異れり。蓋希臘に於ては各巨刹は皆僧正を有せるなり。扨て六十の宗區は三級に分かれ、其中三は中央大僧正管轄區にして、十九は大僧正管轄區たり。然し此區別は唯だ位階の高下にして、實際の權限は異なるに非ず。但大僧正は一二名の副僧正之を輔佐せり。又全國中宗務上の獨立を有する者はクルーシヲ一州のみにして、其他は何れの僧正も皆宗務院の支配の下に在り。

大僧正區及中央大僧正區を管轄する者は、必ずしも其區に當るの稱號を有するの僧に非ず。數年其職に在りたる後、政府より其相當稱號を與へらるゝこと往々にして之あり。而して僧正より大僧正に、大僧正より中央大僧正に「昇進」せしめ、以て功勞に酬ふるの習ひなるに因り、此稱號の區別は官等位階の區別と其性質異なることなし。而して皇帝は時どしては中央大僧正に與ふるに以前大管長の有したる榮譽を以てすることあり。夫の莫斯科の中央大僧正フィラレット並にノヴゴロッド及聖彼得堡の中央大僧正イシドルの如き即ち是れなり。

稱號の制の爲めに僧正は既に中央權力の下に從屬するの姿と爲れるに、更に給料の制の爲めに益々此關係を強くせり。尤も國庫より之に支給する金額は僅に僧侶の收入の一小部分を爲せるに過ぎず。即ち一定の給料以外に宗務院より給與する「補助金」なる者あり、又寺領の土地及家屋より生ずる收入、並に信徒の謝金及奉

納金等あり。此等の收入は可なりの金額とはなるも、勿論多きに過ぐる程には非ず。而して僧正特に其高位の者は、社會上大に好地位を占めり。又其好地位を占むるも敢て不當に非ずと云ふ其次第は、元來宗務院及政府が彼等を任命するに當ては頗る其撰擇に注意し、博學高德の僧を得るに努むるに因り、自から其地位を辱かしむるが如き者は少なし。例へば莫斯科及彼得堡の中央大僧正の如きは概ね皆學德共に衆に擢で、之を巴里ヴィエンナ或はカンタベリーの大僧正に比するも敢て遜色あるを見ざるなり。土耳其にては僧職の賣買盛に行はれ、階一階高位に昇るには必ず金錢の力に依るの風ありと雖も、露西亞教會に此弊を見ざるは誠に喜ぶべし。

露西亞の僧正は其外觀尊大にして奢侈の風を帶ぶるが如きも、其身を奉ずるや頗る峻嚴なり。即ち彼等は宗規に從て常に寺內に住居し、其宗區內を巡錫する場合の外は殆ど寺を去ることなし。且教會の高位に在るも猶嚴密なる戒行を守りて怠ることなし。例へば公けの饗宴に臨み皇帝に陪食を仰付けらるゝ等の時には、唯だ魚類と野菜とを食して他の肉類には一切手を觸れず。但地方巡錫中には俗人にして牛肉とソップの料理を彼等に饗する者ありと云ふ。

僧正は宗務院の指揮を受くるは勿論なりと雖、又「宗區會」(Diocesan Consistory)なる者ありて之を補佐せり。即ち宗區會の各宗區に於ける關係は宗務院の全帝國に於けると同一なり。而して其議員は僧正之を指名し、宗務院之を任命す。又其決議は僧正の批準を經て始めて有効なる者とす。宗區會は區內一切の事務を司どり、宗教裁判をも行ふ。而して其至高の大審院たる者は即ち宗務院なり。

宗區會の行ふ裁判事項は、宗規に關する事及結婚離婚に關する事の二種に分れり。此宗教裁判所は他の耶蘇教國間には既に其跡を絕てるものにして、實に露西亞特有の制度たり。(其組織等に關しては第二卷第四編第二章を參照せよ)。而して其裁判は古風なる法式に從て之を行ふが故に、緩漫、繁文、賄賂等の弊風は自から之に附隨せり。特に結婚離婚の訴訟に於ては最も其の甚しきを見る。勿論僧侶は注意して之を防ぐに努むと雖、宗區會の事に與かれる俗人輩は皆卑劣の徒なるに因り、到底其空氣を清くすること能はざるなり。されば事の實際に於て、法律上の離婚を行ふは全く富民の贅澤にして貧民は之を行ふに由なし。是れ當に宗區會の

取扱ふ離婚事件數の非常に少なき所以なるべし。（原註。總督の報告に據れば、千八百八十年の宗務院數九百二十件あり、之を其理由に因して區別すれば、重婚に基く者三十二、無能力に基く者十七、姦淫に基く者百廿一、家出して音沙汰なきに基く者四百八十二、徵役或は追放の宣告を受けたるに基く者二百五十九、法律上禁ぜられたる近親内の結婚なりしに基く者九なり。即ち露西亞教會の是認せる離婚の理由は敢て姦淫のみに非ざるを見るべし。因に記す家出の期限は七年以上なる時離婚を許さるゝものさす。）

農民は多くの點に於て普通の法律以外に立てるものなるが離婚に關しても彼等は此費用多き手續を履むを免ぜられ、簡單に村會或は農民裁判所に起訴するなり。各宗區會には、俗人の書記あり、其區會に對する職務は總督の宗務院に於けると酷似せり。或は區會取調局を指揮し、或は通信を指圖し、或は文書の立案に與かり、其の關係する所頗る廣し。而して之を任命するは宗務院なりと雖、先づ之を指名するは總督にして、總督は實に其の直系長官なり。即ち僧正及宗區會の報告は宗務院に宛てゝ發送せらるゝも、區會書記は直接に之を總督に差出すなり。次に此書記は俗人なるも、通常沙門の出なること教界大抵の役人と同じ。蓋し此宗務行政の大機關に於て僧家に無緣なる役人は、唯だ總督と其の手下の主もなる補佐とに過ぎざるなり。而して書記及區會取調局は實際事務の取扱及裁判上に於て至大の勢力を有するに因り、自から之に不正を働く餘地を與へ、遂に教會内に行政上の腐敗を輸入するに至れり。實に書記が離婚訴訟の才取と爲りて其間に不義の利を貪ぼり、甚しきは故らに羅織して姦淫罪の成立を助くるが如きとすらあり。されば或は監督を嚴にし或は給料を增す等の方法を以て、此弊風を矯正せんとしたるとなきに非ざるも、其の浸潤する所深く且廣きが故に、著しき改良を見る能はざるは遺憾なりと謂ふべし。

宗務院は各宗區に對し内務大臣の各州に於けるが如き地位に在り。即ち僧正及宗區會は教會の廢置、資金の使用、僧侶の免職等、凡て大小の事を一々宗務院に伺ひて、其正式の批准を待たさる可らず。又僧正は八日間以上其宗區に不在ならんとする時は、先づ宗務院に其旨を屆けて許可を受けざる可らず。又僧正は毎年其宗區内の一般の事情、宗教學校の景況、教會にて聖式を行ひたる者の數、及新に改宗したる者の數等に關し、報告書を差出すべき筈なり。

斯も中央集權の行屆けるは露國版圖の廣漠にして嚴に中央に權力を集むるの必要あるに因り、且又露西亞教會には獨身僧と妻帶僧との二種ありて、其間の不和軋

轢を防ぐ爲め、公平有力なる第三者を要するの特別事情の存するに基けるなり。此原因中の後者は人の多く注意せざる所なりと雖も、其實與かりて大に力あるものと知るべし。

教會の勢力を增進せんが爲め熱心に種々の方策を立てたるの人少なからず。政府も嘗てアクサコフ及カトコフ等の盡力に依り、僧正をして地方會議を組織せしめたるとあり。是れ他國には、多く例を見ざるの特典なり。勿論地方會議は宗務院の許可を經て始めて開會し討議し又決議を發表するを得る者なるも、又其の議する所は僧侶の利害若しくは教會內部の改良に關するよりも寧ろ布教の方法に關すること多しと雖も、猶此の種の會議が教會の地位を進むるに於て敢て無用に非ざるは固よりなり。然れども今日再び地方會議の制を興さゝるも、若し一般の道德にして進まんには、幾多改良の實を擧ぐること決して難きに非ず。今日最も憂とすべきは唯だ露國全躰の文化が未だ大に進まず、從て改良に副ふべき時機と爲り居らざるに在り。要するに改革は先づ之を社會の方面より始め、政治的生活の刷新を以て其の第一着手と爲さゝる可らざるなり。

第八章

黑僧。僧庵及庵僧。僧侶に二種類あり。庵僧勢力を占む。露西亞僧庵の性質。其の歷史上の地位は頗る重し。庵僧及尼の數は比較的少なし。如何なる人が庵僧となるや。僧庵は國家の一制度なり。其種類。其財產及財源。其事業。尼寺。尼

露西亞の僧侶は啻に一個の團躰たるのみならず、又一個の階級にして、實に晩近までは明かに一種族(ケイスト)を成せしなり。今日に於ても僧侶は世襲にして現に夫の露西亞國民を組織せる四階級中の一と爲れり。

僧侶は又二種に分れり、即ち妻帶して寺に住居する俗僧と、獨身にて僧庵に住する淸僧是れなり。普通に前者を「白僧」(White clergy)と云ひ、後者を「黑僧」(Black clergy)と云ふ。此名稱は敢て衣服の色より來りたるに非ず。獨身僧は黑衣を着するも妻帶僧は薄黑き服を嬰へり。而して彼等は共に鬚髯及頭髮を長くし、獨身僧の特に異

なる所は其の黑き被衣を頭上より長く背後に垂るゝに在り。

總て東方教會に於ては古來獨身僧に重きを置けるに因り、其勢力の大なると同時に、妻帶僧の嫉妬は自から深くして、常に不和軋轢の源と爲れり。特に寺僧（ゾヴィースト）たるには妻帶せざる可らず、又庵僧（ニシヤ）たるには獨身ならざる可らざるの束縛ありて、容易に其身分を變ずること能はざるに因り、益々相互の融和を缺くに至らしめり。且彼等は勢力の消長及び物質上の得失に就き其利害を異にするのみならず、元來黑僧は舊習を重んじ統轄を愛するの傾向を有するに、白僧は新奇を喜び自由を好むの傾向あり、是れ其の根本的に相反對せる所なり。而して黑僧は教會内の地位學問及歷史上の信用を恃みとし、白僧は數の多きと社會上の地位の高きとを以て力と爲し、双方相讓らざるの勢ありと雖、兎に角今日に於ては前者高地位を占有せるに因り、吾人は先づ黑僧より研究すべきなり。

僧庵は古來露西亞に廣く行はれ、身を之に寄せて戒行を修むるもの頗る多し。而して僧庵的生活は活潑尙武の風を特色とすると默想禁慾を主とするの二樣あるも其中に於て、東方教會の庵僧は後者を選びたり。是れ疑もなく東洋的精神に最も適合する所なり。されば正教派僧庵の設けられたるは敢て生活の戰の爲めに團隊を結ぶの必要ありしに基くに非ず、又世を救ひ人を濟度するの熱心より出でたるにも非ず。退隱を喜び浮世の風波を避くるの風は正に往時僧庵の發達を助けたる大原因なり。即ち彼等の目的は唯だ戒行を修め祈禱默想を凝らし、以て救を得るに在り。世に出でゝ書を著はし業を興し、慈善に布教に盡力するが如きは、其の期する所に非ずして、唯だ獨り僧庵に籠城して罪業の消滅と自己の解脫とを圖るを以て甘んじたり。

ニコラス帝の時露西亞教會内部の視察を試みたるパーメルに向ひ「トロイツァ」の庵僧は語て曰く、『庵僧の本務は學問に非ず勞役に非ず、唯だ禮拜の務を行ひ、自己の解脫を圖り、浮世の爲めに懺悔を祈るに在り』と。又禁慾苦行は耶蘇教の骨髓にして、露西亞教會が此點に於て羅典教會と異なるは、即ち其の優さる所以なるとを說きたりと云ふ。又「セントセルヂアス」の庵僧中には、夫の東方僧庵の二欠點たる無學と不潔とを以て却て僧庵生活の長所と思へる者あるが如し。例へばパーメルが數日僧庵に滯留の後、蟲類の不潔にして堪へ難き由を語りたるに彼等は平然と

して、是れ却て一苦行にして忍耐力を養ふの道なりと答へたり。要するに遯世苦行は彼等の最も重んずる所にして、或は暗黑なる巖窟中に數年身を潛めて行を修する者あり。露西亞にては僧庵の大なる者は之を「ラヴラ」と云ひ、小なる者は之を「スキット」若くは「プスチニヤ」と稱することなるが、此名や實に荒地又は遯世所を意味せり。一名稱以て其性質を伺ふべきなり。

斯かる傾向を有する僧庵なる以上は、其の能く活潑に世に働くの大庵僧を出さゝりしは固より怪むに足らず。元來彼等の奉じて以て典據と爲せる僧庵律は、古へセントベーシルの作りたる其儘の者にして、夫の信條の事に於けると同じく、此點に於ても彼等は唯だ希臘傳來の者を株守して新に其の不足を補はんともせず。故に全國の僧庵頗る單調にして變化異色に富まず。同時に又其規則は甚だ散漫にして全國の僧庵を統一するに足らざるに因り、打て之を勢力ある一團と爲すに由なし。從て文に武に大活動を演するが如き英傑を其門より出だし、以て社會文明の上に活劇を演じたること、到底西歐僧庵の比に非ざるなり。

然れども是れ決して彼等が露西亞に及ぼしたる影響を以て西歐のに劣れりと云ふには非ざるなり。彼等が露西亞國民の組成と其文化の進歩とを助けたるの功は、宛も「セント、コロムバナス」及「セント、ベネヂット」の庵僧が西歐舊教國に於けるに異ならず。即ち其の文明と耶蘇教との開拓者となりたるは、西歐の同胞がゴール及曰耳曼に於けるに同じきなり。彼等は蠻族の間に布教すると同時に或は森を開き或は野を耕し、以て露西亞の殖民をして其跡を追ふて北と東との未開地に進み入らしめたり。斯くて僧庵の所在地は自から發達して邑となり市となり、其の門前に大市場の開かるゝことも多きに至れり。又ビサンスの學問は先つ第一に僧庵に輸入せらるゝの常なりしに因り、僧庵が學問の淵藪と爲りたるは言ふまでもなし。要するに天下若し庵僧の力に依て成りたるの國ありとせば、吾人は露西亞は正に是れなりと言ふを憚らざるなり。

露西亞の僧庵は一朝天下事あるの時、例へば韃靼人、リスエーニヤ人又は波蘭人等の侵入したる場合に、能く國民の統一を維持するの力となり、又時として敵を防ぐの城ともなれり。實に往時の僧庵は一種の城砦にして、今も猶其殘礎の存するものあり。特に夫の有名なる「トロイツァ」の大僧庵は紀元千六百〇八九年の際波蘭

人と對戰したるの古跡にして、人の之を訪ふ者あれば、庵僧は歴々其地を指示して當年の狀を語るべし。又キーフのペチェルスク僧庵も之と並び稱せらるゝの大僧庵にして、其地位ニープル河の右岸に在り、古來の巨刹にして巡禮者の詣づる者頗る多し。此外有名なる者敢て少なからず。而して巨刹の有るが爲めに其市其地方は神聖と爲り、人民の尊信も自から高きを加ふるの常なるに因り、流石の彼得大帝も其の新に設けたる彼得堡に、ヴラヂミルより古聖の遺骨を持ち來り、以て一大伽藍を營みて上記の二大僧庵と匹敵せしめり。其の經世の一要具たるや以て知るべきなり。

大僧庵を除く時は今日大抵の僧庵は頗る寂寥にして、宛も番兵の殘壘を守るが如き趣あり。而して僧庵の數はキーフ、莫斯科、トヴェル、ヴラヂミル、プスコフ及び兩ノヴゴロッド等の舊都府の近傍に最も多くして、黑土帶及び南部平原地方等の新開地には甚だ稀れなり。然し新に殖民地を開く時は之に僧庵を設置するは露西亞庵僧の常にして、例へばクリミヤにても、コーカサスにても、彼等は數百年間空屋同樣となり居たる僧庵を再興し、又西比利亞及中央亞細亞に於ては二三の僧庵を新設せり。而して政府も又之を以て殖民膨脹の爲めに必要なりと爲し、之に特別の保護を與へり。（原註。トルキスタンにて設けられたる者にして、又アレキサンドル三世の時に土地及び漁場を給與せられたり。）各僧正管轄區即ち宗區には少くも一個の僧庵あり、其庵主は其地位上よりして當然宗區會の議員たるものとす、今日全國の僧庵は五百五十内外にして、之に住居する庵僧は殆と一萬一千人、尼は一萬八千人合計二萬九千人程なり。（原註。千八百八十六年十二月の宗務院總督の報告に據れば、全國男子の僧庵は三百八十にして之に住する者一萬〇八百七十九人、又女子のは百七十一にして尼の數は壹萬七千九百〇七人、總計庵數五百五十一にして人數は二萬八千七百八十六人なり。）露西亞の如き大國にしては此數は敢て驚くに足らざるものにして、之を西班牙及伊多利に於ける晩近迄の有樣に比すれば、固より同日の談に非ず。然れども「トロイツァ」若くは「ペチェルスク」の僧庵の如く、今も猶ほ數百の庵僧を有して寺門の繁昌を極むるは、他國に其比を見る能はざる所にして、實にキーフ州の「ペチェルスク僧庵」は六百名の僧を有し、又同州ブロロヴオの尼寺は殆と五百名の尼を有せり。因に記す、露西亞に於ては、庵數より云へば男子の方多きも、人數は尼の方多きこと、革命前の佛蘭西と同じきは奇と謂ふべし。

上來記し來りたるは正式の庵僧なるが、此外に正式に登錄せられざる者も少なからず。即ち外國の僧庵特にアンス山に住居する者にして、同山有名の僧庵パンテレイモンには四五百名の露西亞僧あり。其他三四の僧庵にも雲水の身を寄せて宗務院の支配外に優々自適の生活を爲せる者頗る多し。

扨て僧庵は露西亞に於ても次第に衰微に傾けるが、其原因は今日の文明が夫の僧庵の禁慾主義と相容れざるにも存すべく、又當世社會の趨勢は人をして遯世的生活を去て活舞臺に現はれしめんとするにも因るべしと雖も、之に加ふるに夫の分派の紛起と宗務院の制度とは益々僧庵を衰へしめたり。即ち分派の起ると共に熱心家は僧庵を去て之に就く者多く、又宗務院は種々の干渉を加へて僧庵の力を殺ぐに努めたり。例へば彼得以下の諸帝は出來るだけの束縛を僧庵に加へしが、其跡は法律の文面を見るも猶明かなりと云ふ其次第は、第一男子は三十才女子は四十才以上の年齢に達するに非ざれば純粹の僧庵若くは尼と爲るを得ざる制規にして、其意蓋し遯世前に先づ國家及社會に對する此世の義務を果たすべしと云ふに在るなり。又愈々庵僧となりたる者は其身分に屬する特權若しくは一切の不動産及遺産相續等の權利を棄てざる可らず。嘗てハビロンは妻に死に分れたるの寺僧及び非役となりたる兵士の外は一切庵僧と爲るを許さいりしとあり。而かも是れすらも宗務院の裁可を待て始めて許さるゝの定めなりしなり。

彼得の干渉は敢て庵僧の數と財産とに打擊を與へたるのみならず、更に又無形の事にも及びたり。即ち「宗規條例」に依て彼は聖書を研究することを勸めながらも、若し書を著し或は書物の拔書を爲す者ある時は、之に肉刑を加ふべしとして之を嚴禁せり。斯くて庵僧は庵主より特別の許可を得るに非ざれば其室にインキ若しくは紙を備ふるを禁ぜられたり。蓋該條例の說明に從へば、無意味不必要の者を書き散らすは僧庵の平安を妨害すと云ふに在り。而して各僧庵には唯だ一個のインキ壺を備付け、之を鏈にて食堂内の卓上に結び付け、一々許可を受けたる後に使用することゝ爲せり。斯かる改正の彼得に因て行はれんとは實に奇怪にして、其の庵僧の智德を增進する所以に非ざるは言ふまでもなし。然し之が爲めに彼等の利器を奪ひて無勢力と爲らしめたるは明かなり。

一方に於ては斯くも冷遇せられたる庵僧が、却て教會内の重職に當るの特權を有

し、僧庵は教會に向て僧正を供給するの獨占權を有せんとは、聊か奇なるが如しと雖も、然し此特典は實際庵僧全體の有する所に非ずして、唯だ俗權に因緣深き少數者に止まれるを思ふ時は、何人も其次第を解するに苦しまざるべきなり。

年々僧庵に入り來る者は二三百の數に達せるが、其中先づ半數は僧家の人にして、餘は商工農の階級に屬するものなり。又嘗ては世に時めきたる人特に舊武官にして身を墨染の袖に寢して世を忍ぶ者もなきに非ずと雖も、此種の人は極めて少なし。但老兵士にして唯だ「安氣に暮らす」が爲めに身を僧庵に寄する者は敢て少なしとせず。而して僧庵には博學と無學との二極端相合し、智愚天淵の差ある人物混交し、其目的も單に世の俗塵を去て平和に殘年を送らんとする者多しと雖も、又教會の高位重職に上るの徑捷として僧庵に入る者も少なからざるなり。

抑も露西亞宗教學校の生徒は俗界と教會とに就て選擇を爲したる其上に、更に妻帶の寺僧と爲て家族團欒の樂を求むべきか、若は獨身の庵僧と爲て教界の名職を求むべきか、二者其一を選はざる可らざるなり。而して一度意を決して庵僧たるを誓ふ時は、其後の進歩は甚だ容易にして、先づ普通の人は三十歳以上ならざれば此宣誓をなすを許されざるも學林生徒は二十五歳にて之を爲すを得、次に豫備修業の證明も免ぜらるゝなり。而して愈々學林を卒業する時は直ちに、或僧庵の學監或は教授と爲り、尋で庵主に昇進し、更に三十歳となれば僧正となるを得べし。

斯く道順は簡單なるに因り、中には閑居默座の僧庵的生活を爲すことなくして、無事に高位に上ぼる者あり。畢竟此輩をも庵僧と云ふは唯だ其獨身なるに因るなり。而して此の所謂「學林僧」と普通の庵僧との關係は、甚だ疎遠にして、僧正其人も名は庵僧なるも其實僧庵的生活に同情を寄するものは頗る稀れなり。

若し夫れ紛々たる普通平凡の僧庵に至ては前途何等の大希望あるに非ず。唯戒行を修じ教會に出で小六ケ敷禮式を行ひ、以て一生を終ふるものにして、朝々暮々其の爲す所は千篇一律、唯だ機械的に同一事を繰返へすのみ、又何等心身を勞する程の事を爲さゞるなり。夫の徒弟僧即ち豫備修業中の雛僧も、專ら老僧に奉仕するを以て務と爲し、敢て深く教義を練り眞理を探るが如きの大修養大訓練を爲さゞるなり。

僧庵の組織は近年までは純粹に共同生活の躰裁を爲せる者甚だ稀れなりしなり。

即ち庵僧は皆同一家屋の中に住し、且集りて祈禱を行ひ食を共にすと雖、銘々財産を別にして收支は其心に隨ふて個々別々に之を行ひたり。然れども今や宗務院は之を改めて共同生活の組織と爲し、且嚴密なる規律を守らしめんとせり。蓋露西亞の僧庵は民間の一私業に非ずして、全く國家の一制度なるに因り、宗務院即ち政府が之を統轄支配せんとするは固より當然の事と謂ふべきなり。

實に露西亞の教會は頗る俗權の干渉を蒙れるなるが、僧庵も亦敢て之に讓らずして、夫の西歐の僧庵の如き自治自由を有せざるなり。近頃宗務院は僧庵をして嚴密なる規律を守らしむると同時に之に自由を與へ、庵主自選の權利をも舊に復せしめんと唱ふと雖も、現在の教會及國家の組織に於て、其の果して行はるべきや否やは敢て明言し易からざるなり。

露西亞の僧庵は法律上二種に分れり。即ち國家の輔助を受くる者と、所謂「餘分」の僧庵と稱せらるゝ者となり。而して前者は特に緊要にして且數も多く、其養ひ得る人數は各僧庵の格に從て制限あり。最高の格に屬する者はキーフ洲の「ペチェルスク」莫斯科の北の「トロイツア」、彼得堡に近き「セント、アレキサンドル、ネヴスキー」及ヴォリニヤ州「ポチャエフ」の僧庵の四にして、中央大僧正は各々之に庵主たり。

此第一級の僧庵を「ラヴラ」(lavra)と云ふ。其の次は「スタヴロピジヤ」(stavropigia)と稱するものにして、其數七八あり。此二種は格外特別の僧庵にして、其以下の普通僧庵は三級に分かれり。而して僧侶の數は「ラヴラ」は殆ど百名の制限なり、然し徒弟及修業中の俗人は別なるに因り、實數は其二三倍に上ぼると知るべし。「スタヴロピジヤ」及第一級の僧庵は三十三名の制限にして、第二第三級は順次其數少なし。而して近來は更に其數を少なくして第一第二第三級は順次十八十三及び十を以て最多數と定められたり。蓋其目的は僧庵の費用を省きて其共同財産を慈善教育等の事業に投ぜんとするに在るなり。

世人往々露西亞僧庵の財産饒かなることを說くとなるも其財産たるや金銀及寶石類の奉納物の謂ひに過ぎず。而して、此等貴重なる細工物は絢爛目を驚かし、之を金額に見積もる時は實に非常のものなるべしと雖も、彼等庵僧は唯だ其番人たるのみにして、依然寶庫中の貧民たるなり。往時に於ては僧庵は巨大なる土地を所有したりと雖も、アイヴァン三世が先づノヴゴロッド地方の教會及僧庵の所有地を

沒收したるを始めとし、次でアイヴァン四世の時には千五百七十三年の會議にて富裕なる僧庵の新に土地を得ることを禁じ、又千五百八十年の會議にて此禁令を一般の僧庵に適用することゝせり。爾後アレキシス帝と云ひ、彼得大帝と云ひ、又彼得三世と云ひ、何れも皆同一方針の政策を取り終にキャサリン二世は間接に手段を廻らして、寺院の土地を其手に收むることゝせり。斯くて千七百六十四年に新に帝領地中に加はりたる土地は人口百萬(露國人口の計算法に從ひ婦人は一切加へざるものと知るべし)を含みしが、其中三分の二は僧庵に屬したるものなり。例へば「トロイツァ」のみにて十二萬人即ち十二萬の男農を有し、「ソロヴェツク」は殆ど白海(ホワイトシー)の西岸全躰を所有し、其中には多くの製鹽場漁場及五十艘の船隊を含みたり。されば此改正の結果、僧庵は唯だ僕農の伴はざる僅かの土地と、牧場水車場及び魚を捕ふるの池と薪を拾ふの山林とを有するを得るに過ぎざる事となれり。

斯く土地を沒收したる其代りには、國家は僧庵に保護金を與ふることゝなれり。露國歳計項目中の「ラヴラ及僧庵補助費」と題する者即ち是れなり。然れども此項目の金額は千八百七十五年に四十四萬ルーブルにして、千八百八十二年には減じて四十萬二千ルーブルとなれり。而して之を全國三百以上の僧庵に分配することなるに因り、平均一ヶ寺の得る所は僅かに一千ルーブル程にして、即ち其所屬の一教會を維持するにも足らざる程なり。實に此補助金を受くる僧庵中五百ルーブル以下なるもの三十内外あり、又僅に二十ルーブルを得るに過ぎざる者もなきに非ず。斯かる僅少の金額を以て到底寺を支ふると能はざるは固よりなり。然し十八世紀に於て土地を沒收せられたる彼等は、十九世紀に至り寺の費用を節し、且民間篤志者の淨財を集めて、多少蓄而目を回復したるの觀あり。

且夫れ一方に於ては僧庵が政府の許可を待たずして土地の奉納を受け或は之を購買することを禁ずると同時に政府が自から帝領地中より之に土地を寄進することあり。即ち千八百三十六年より千八百六十一年に至る其間に、政府は畑及牧場二萬五千エーカー及山林四萬四千エーカーを分與したり。又アレキサンドル二世の末年に於ける黑僧の所有地は殆んど四十三萬エーカーに達したり。思ふに其後更らに增加したることならん。然し露西亞の土地は廣き割合に收獲は頗る少なく、特に僧庵の多く設置せられある北部に於ては、收入の割合西部地方の二十

分の一にも足らざることを記せざる可からざるなり。

然し兎に角土地は僧庵財産中の小部分にして、別に資本を有利に運轉する者敢て少なしとせず。嘗て白海岸のソロヴェツク僧庵はスコピン銀行の破産の爲に六十萬ルーブルの損失を蒙りたりと云ふ。斯く銀行に金を預入るゝ外に、或は借家より收益を得、或は寺領の土地に產したる者を賣却し、或は商人と相結んで商業を營むものも無きに非ざるなり。加之信徒の納むる金は何よりの收入にして、第一巡禮者が一々蠟燭を求むるの代金は「非常の額なるべし。蓋巡禮者が近年鐵道の開通並に夫の僕農解放の爲めに大に增加したるは明かなる事實にして、二十年以前にキーフは年々二十萬の拜詣者ありとて誇りたるも、今や其のペチェルスク寺に參詣するものは四五倍の增加を來し、千八百八十六年には殆んど百萬人に達したりと云ふ。而して此百萬の人は少なくも銘々一丁の蠟燭を求め、一片の貨幣を投じて去るべきものなり。此外十字形或は畫像(アイコン)の賣揚代も大僧庵の一大收入なり。又信徒の爲めに種々の聖式を行ふて之れが爲めに得るの謝金も決して少なからず。否僧庵の收入は敢て巡禮者の納むる者に止まらずして、更らに其の祭れる神

像を毎年區內に擔ぎ廻はり、以て賽錢を集むるの風あり。即ち庵僧は嚴めしく行列を整へて夫の「奇術の神」と稱せらるゝ聖女の神像を村より村に携へ、村民は群を爲して之を擔ぎ、夜は無代にて民家に泊せしむ。是れ實に庵僧大得意の時なり。而して上に記したる收入は一部分を中央大僧正に納め、餘は其の寺の所得となる。寺は又此等の所得を浪費せずして、多くは學校病院孤兒院又は養育院の如き慈善事業に之を投ぜり。現今僧庵附屬の病院六十以上あり。

然れども彼等は此等の慈善事業を興すと雖、唯だ興すと云ふのみにして敢て自から直接に之を管理經營することなし。即ち彼等は其宗區內の白僧に其管理を委ね、敢て亦深く關係せず。是れ畢竟庵僧は飽迄も俗界と遠ざかり世事に關はらざるを以て其本分と爲すの舊思想より來れるなり。されば結局庵僧の仕事と云ふは、唯た古物神像及び寶藏物の類を保管し、又布施を集むるに止まるものと知るべきなり。

尼寺の數は男子の僧庵より少なしと雖も、尼の數は概して庵僧よりも多し。官府の統計に據る時は一見其數少なきが如きも、其實露西亞の婦人は四十歲に達せざ

れば純粋の尼と爲ること能はざるに因り、尼寺に住しながらも四十未滿の者は統計中に加はり居らざるなり。蓋四十歳に達せざれば尼たるの誓を爲すを許さゝるは彼得大帝以來の規定にして、實に婦人の弱點に對する一好案なるが、然し年若き婦人の尼寺に住むは敢て之を禁ぜざるに因り、所謂尼弟子或は信女と稱して正式の尼と共に生活するもの頗る多し。此等は尼寺に住するも任意に之を去て結婚するも差支なきなり。而して尼寺に世を忍ぶ婦人の數は次第に增加の勢あり。千八百十五年には全國尼寺の數九十一にして、之に住する正式の尼は一千七百人なりしに、千八百七十年には寺の數百四十八となり、尼及尼弟子は一萬一千人に上ぼれり。次で千八百八十六年には人數一萬七千となり、寺は百七十一に增加せり。以て其傾向を伺ふべきなり。

上に記したるは尼寺の正規の居住者にして長き黑衣を被れるが、此外に矢張寺に住して獨身及精進等の戒行を守りながらも、敢て何等の誓を爲すこともなく、又金錢の出入は別に之を行へる一種の婦人數千あり。此等の婦人は全く家族の係累を離るゝが爲めに斯く世を忍ぶものにして、夫の市上に布施を請へる尼は即ち此種の自由尼なり。正式の尼は常に尼寺内に籠居せり。但自由尼と雖、外出するには許可を受けざる可らざるなり。

庵僧の半數以上は僧家の出なりと雖も、尼にして同門の出なるは八分の一にも達せず。貴族及地位ある人の女にして尼たる者の數は、僧家より出でたる者に讓らざる程なり。而して其理由は極めて簡單にして、唯だ男子に取ては僧庵は出世の門なるも、女子に取ては尼寺は隱退の處たるに過ぎざるに因るなり。斯くて尼は概ね貧しき町家の出なるが、中には身分ある婦人にして浮世の悲痛幽恨を墨染の袖に忍ぶ者もなきに非ず。

尼寺は大抵自から働らき且布施を請ふて其の維持を爲せり。蓋尼は庵僧の如くに其の世話すべき敎會を有せざるに因り、僧よりも餘暇多く、從て種々の細工物を作りて之を賣捌き其生計を營めり。斯くて尼寺にして織物又は縫箔の製造を以て名ある者も敢て少なからず。

尼寺の慈善事業は夫の僧庵の場合と同じく頗る微々にして、一生を慈善の爲めに獻ぐると云ふが如きは多く見る能はざる所なりと雖も、近來此新傾向は次第に催

ふし來り、附屬病院を設けて尼一手にて之を看護せる者もなきに非ず。

要するに彼等僧尼の遯世的氣風が、大に其の活潑なる運動を妨ぐるは固よりなるべきも、又露西亞教會の面倒なる法規慣例等が、耶蘇教徒の慈善事業を窮屈となし、以て夫の西歐に於けるが如き盛大を致さしめざるの事情も、大に察せざる可らざる所なるが如し。實に何事も上司の指揮を待て始めて行ふの仕組なるに因り、事を營むに頗る不自由なるなり。若し此事徹りせば、露人は元來慈善の心に富むが故に、其の事業は更に觀るに足るものありしならん。思ふに將來に於ては僧庵の面目も次第に改まるに至ることならん。

第九章

白僧。白僧は一の種族となれり。世襲僧。持參金としての教會。教職の細別。僧侶の教育。中學林及大學林。此等の學校の特色。教師。學校内の空氣。學科。白僧の物質上の境遇。

多數は無給料。補助費增加の傾向。正教會經費豫算表。教會の財產。財源。謝金。之を集るの困難。僧侶の貪慾。祭日に信徒の家を歷訪する事

教界内に世襲の團躰を結び一種の種族を成せし者は「白僧」即ち妻帶の寺僧にして、是れぞ正に宗教的階級と稱して適當なる者なり。而して此特種の組織は夫の僕農制度及び一般の社會制度より生じたるものにして、先づ第一に農夫は土地と離るゝと能はざるが爲め、其主人を欺くに非れば身を桑門に入るゝ能はず。是れ即ち桑門の人のみ僧侶となるに至りたる所以なり。而して僧侶の子弟は學林にて教育せられ、之を卒業すれば容易に僧職に就くを得べく、又白僧は慣例に依り是非結婚せざる可らざるに因り、其子女は自から青年寺僧の妻となりて亦他家に嫁がず、果ては桑門以外の俗家に嫁するには特別の許可を要することとなれり。斯くて露西亞の寺僧は明かに一種族（ナースト）をなすに至りしが、其身の不自由なる代りには所謂「特典者」中（第一卷第五編第一章參照）に加へられて兵役肉刑及人頭稅を免ぜられたり。然れども是れ元來僕農制度と大に關係ある者なるに因り、千八百六十四年アレキ

サンドル二世が愈々僕農解放を斷行するや、寺僧の狀態も大に變ずるに至れり。即ち同皇帝は寺僧の束縛を解き、敎會には何人も入るを得ることゝ爲すと同時に、寺僧の子弟は又如何なる業に就くも差支なきことゝ爲せり。唯だ夫れ法律は之を許すも習慣は未だ俄かに改まらざるに因り、寺僧は依然として一種別派の團躰を爲せるは蓋已むを得ざるなり。

抑も幾百年來の習慣は容易に去るべきものに非ず。露西亞僧侶の身分は世襲なりしに因り、從て僧職をも世襲と爲し、彼等は之を自己の子に傳へんと欲したり。而して寺領を其子に讓るに如何なる方法に依るやと云ふに、法律上差支なき身分となれる男の子に之を傳ふるは固より譯もなき事にして、又女子なる時は之に婿を迎ふるなり。即ち僧正は後繼者を選ぶに當り、自己の死後又は退隱後に其女と結婚するの條件を以てすること概ね然り。而して斯かる慣習の行はるゝ其理由は、第一僧正の死したる時若くは退隱したる時は、其家族を養ふの義務は敎會若くば國家に存することなるが、何れも直接に此面倒を見んよりも、寧ろ後繼者なる新住職に之を負はしむるを便とする事、第二には寺の財產附屬物中には前住職の所有なるものも少なからざるに因り、新住職は一々其辨償を爲さゞる可らず、然るに其女と婚して家族中の人となれば、其始末極めて輕便なる事是れなり。されば學林卒業生は一敎會の住職と爲て宿昔青雲の志を達するには先づ結婚せざる可からざるに其結婚は上に記したる如く前住職の女と行ふこと頗る利益なるに因り、彼等の寺を求むるは又妻を求むることを意味することゝなれり。而して其選擇の際當人の容貌性質等よりも寧ろ其の持參金たる敎會の寺領如何を考察すること深きの常なるは、何處も同じ人情の自然なるべし。

右に記したる習慣の餘りに盛んに行はるゝため、千八百六十七年には法律を設けて之を制せんとしたり。然れども多年の習慣は固より之が爲めに廢たるべくもあらず。而して世襲なるは啻に住持の地位のみに非ずして、其以下敎會內の諸職即ち副牧師、唱歌師、鐘撞等に至るまで、殆んど皆然らざるなし。

露西亞の白僧は其數殆んと五十萬あり。一見甚だ多きが如きも此中純粹に僧侶として職務を行ふものは比較的少なくして、夫の黑僧即ち庵僧中に種々の別あるが如し。第一僧正即ち住持(ブラーストト)は俗に之を聖なる人(Consecrates Person)と稱し、普通の寺

領地には一人、其の大なる處には二人あり。其數千八百八十七年には三萬五千を越へざりしなり。次に副牧師或は執事と云ふは牧師即ち住持を助け、且時として は其代理として式を行ふものにして、其總數は七千を超へず。尤も二十五年以前に其數之に倍したるも次第に減じて此に至りたるなり。而して斯く減少したるは禮拜を疎略にすると云ふよりも、寧ろ人を省きて經費を節約するの主意に出でたるものと知るべし。扨て上に記したる者の外に唱歌師、鐘撞其他種々の務を取るの寺男あり。其數は近年非常に減少し、全體を擧るも四萬人に達せざるべし。

住持即牧師、副牧師及其他教會内の職員は、何れも皆今日に至るまで互に分立して別々の段級を爲し、牧師も副牧師も終身其地位を以て終始したり。即ち甲より乙に移ると云ふが如きことは極めて稀れにして、且結婚するにも常に同級間に於て之を行い、縱令軒を並ぶるも他級の人と緣を結ぶは努めて之を避け、又同級の人にても成るべく同地位の者を選びたり。

僧侶を教育する宗教學校は小學校中學林(セミナリー)及大學林(アカデミー)の三種に分れり。卑しき教職に就ける者は即ち小學の出身者にして、牧師は概ね宗區中學林の卒業生なり。而して黑僧及白僧中の主きなる人物は大學林を經たる者なり。大學林は其數四あり。其中三校は聖彼得堡、莫斯科及キーフの中央大僧正の直轄にして他の一はカザンに在り。此等の大學林に於ては千八百四十年頃に至るまで羅典語に依て教授したるも、今は然らず。又往時は其教育は全く庵僧の手に依て行はれ、今も猶カザン以外の大學林は「アレキサンドルチヴスキー」「トロイツア及「ペチェルスク」の三大僧庵(ラヴラ)に附屬せりと雖も、近年は俗僧次第に之に代り、或は俗人すら之に加はるに至れり。但し俗人とは云へ概ね桑門の出なるは言ふまでもなし。而して學生中少なくも四分の三は國家宗區若くは僧庵の給與生なり。而かも其中大半は僧侶志願に非ずして、中學林の教師たらんと欲する者なり。

宗教學校は教會と同じく宗務院總監の直轄にして、極近頃にては僧正の指名した る大中學林の校長及講師を任命するの權利は宗務院之を握りたり。其の之を地方の僧侶に任かしたるは僅かにアレキサンドル二世の晩年以來の事に屬するなり。今日に於ては學校監督の責ある委員の選擧をも僧侶自から之を行へり。校長講師及生徒等凡て宗教學校を充たせる者は殆ど全く僧侶の子女なり。勿論

之を卒へて他の方面に身を立つる者もなきに非ずと雖も、之に入り來る者は殆ど僧侶の子弟に限り、純然たる僧侶學校の體裁を爲せり。即ち宗教學校の門戸は廣く開放されあるも、事實に於ては孤立して唯だ僧侶種族の本城と爲れり。蓋僧侶は俗人とは教育法を異にするの必要あるに因り、世間普通の學校に於て俗人と混同することを喜ばず、從て普通の學校に子女を送くるを得るの便利あるにも拘らず、彼等は依然其の特種の學校を閉づることを爲さゝるなり。

然らば宗教學校は他の世間普通の學校よりも思想感情に於て異なる所あるやと云ふに必ずしも然らず。宗教は敢て深く生徒を感化するに足らずして、其門より不信者の出づること敢て少なからず。勿論斯かる事は敢て外國にも珍らしからずと雖も、露西亞に於ては特に其の甚しきを見るなり。而して其の然る所以は畢竟學林生活の極めて長くして且つ苦痛なるに在り。蓋從來學林に於ては鞭撻及肉刑を以て唯一の罰則と爲しゝが、其廢止後の今日に於ても學林は依然之を行へりと云ふ。粗衣粗食種々の難行に苦み、宗教と云へば唯だ面白くもなき戒行とのみ思へる彼等にして、終に宗教を忌み、僧職を忌み社會及教會の謀反人となるに至るも亦敢て怪むに足らずと謂ふべし。而して高等の大學林も其情態は之と同樣にして、生徒中に放蕩無賴の者を出だすも珍らしからず。嘗て或僧侶の子は書を著はして自己の經歷したる宗教學校の內情を暴露し、以て名を成したることあり。其の有樣此の如くなれば、宗教學校は一時甚だ不評判となり、値に警察の力を借て僧侶の子弟を之に入らしめたることありと云ふ。而して講師は薄給にして僧侶の冷遇を受け、且地位の憐れにして不平鬱勃たるは敢て生徒に讓らず。講師生徒共に其の情態此の如くとせば、宗教學校が一朝變じて革命主義の養成所となることあるも、敢て驚くに足らざるなり。

今日に於てもトルストイ伯及ポビドノスツェフ氏等の諸種の改革ありたるにも拘らず、學林の風紀は未だ大に改まらずして、其亂暴不規律なるは世間大中の學校と異なることなし。例へば千八百八十五年莫斯科の中學林生徒は暴動を企て、其の中央大僧正は餘儀なく警察の助力を求めたることあり。又其の二三年前ヴォロネッシの學林生は校長に不平を懷き、校長の自修室に通ぜる蒸滊管中に爆發物を投じ、以て其身に危害を加へんとしたることあり。而して是れ敢て新發明なる

には非ずして、其の二年前即ち千八百七十九年には舍監を逐ひ拂ふが爲めに、同一の手段を取りたることあり。後又千八百八十七年三月爆裂彈を以てアレキサンドル三世を倒さんとしたる其陰謀者中には、大學林の生徒も加はり居たり。宗教學校が如何に急激なる思想を孵化せしむるや以て知るべきなり。

アレキサンドル二世の晩年までは、中學林の卒業生は他の中學校卒業生と同等の資格を以て、世間の大學校に入るを許されたるも、虛無黨の運動激烈なるに及び、此特權は剝がれたり。而して其の理由は果して中學林生徒の學力の劣等なるに因るとするも、亦眞實は革命主義の蔓延を防ぐの主意なりとするも、要するに之が爲めに益々僧侶と他の階級との間に障壁を高くしたるは疑なきなり。

然れども宗教學校の學科は世間のと頗る類似し、中學林と中學校は唯だ上級に於て古典學に加ふるに神學を以てすると否との差あるのみ。先づ語學に於ては羅典語は「教會用スラ、ヴ語」と同じく必修科にして希臘語も少しく加はれり。加之佛語又は獨語中其一を選で修めざる可らず。而して其他の學科に至ては幾何、代數、理化、博物、農學並に醫學もあり。加ふるに歷史哲學及神學の諸科備はりて實に其課程は見事なり。唯だ學科の餘りに複雜にして、之を學ぶ時間の不足なるは何よりの困難なり。特に近年に至るまで露國宗教學校の一大缺點と云ふは、教授法の不完全にして用書の陳腐なると、批評的及科學的精神の缺乏に存しゝが、此缺點は今日は大に改まりて、其程度も最早不完全ならず。蓋庵僧は教授を以て以て其の終身の事業と爲さず、唯だ他の顯職に昇るの梯として暫時之に從事せるのみなるに因り、學風從て振ふに由なかりしも、今日俗人僧即ち妻帶せる僧侶が庵僧に代て學校内に入り込むに及び、大に其面目を改むるに至りたるなり。

扨て宗教學校の缺點は縱令否む能はざるにもせよ、其教育の仙人的ならずして、世間普通の諸學科をも教授せるは確かに一長所なり。(尤も或人は却て之を以て露國宗教教育の一短所と云ふやも測り難し)。而して其課程通りに教授の實を擧げば、露西亞の僧侶は恐らく世界第一の良教育ある僧侶たるべし。現に今日の實際より云ふも、彼等は外國のに比して多く遜色あるを見ず、特に之を東方諸國に比する時は吾人は其の明かに優れるを信ずるなり。畢竟露國僧侶の一大短所は、其貧乏にして獨立の維持をなす能はざるに在り。抑も寺領地を管轄する僧侶は少し

も俸給を受けず、若し之を受くるとせば極めて不十分なり。即ち彼等の中國家より俸給を受くる者は僅かに三分の一にして、此特典ある者も到底其れのみにて生活する能はず。異宗信徒の多き地方に於ては、政略上特別の保護を正教派の僧に與ふることあるも、其場合に於てすら彼等の受くる所は三百ルーブルを出でざるに因り、其生計の度は遙かに異宗派の僧侶に劣れり。此異宗の僧侶に對しては國家は之を疑ひ之に束縛を加ふるの便宜を得んと欲するに因り、矢張之に給料を與へり。即ち正教派の僧は國教を奉ずるが爲めに却て貧乏なる生涯を營まざるを得ざるの有樣となれるなり。されば此一事實より見るも教會と國家とを分離せしむるには唯だ國庫の保護を徹去すれは可なりとなすの非常なる誤見たるや明かなるべし。露西亞教會が俗權の干渉を蒙れるは敢て其の金錢上に於て保護を受くるが故なるに非ず。僧侶の政府に對する關係は頗る深しと雖も、其の多數は今日と雖も猶ほ國庫より一厘錢の保護を蒙らざるなり。

夫れ人民は富裕にして自由の精神も廣く行渡り、特に異宗異派相並で競爭せる處に於ては、全く信者の寄附に依て生計を維持するは僧侶の爲めに可なるべしと雖も露西亞の如く人民皆貧しくして萬事政府の助力を仰ぐの習慣ある處に於ては、事情亦自ら異ならざるを得ず。即ち私人の保護に依て維持を圖る時は、僧侶は却て一般信徒の輕蔑を招き卑屈憫然なる地位に陷るに至るなり。往時僕農制度の存したる時には僧侶は、貴族地主の保護に因て生計を維持し、從て之に對し頗る卑屈なる境遇に在りしが、解放後の今日は唯だ保護者の種類こそ變りたれ、此情態は未だ容易に改まらざるなり。

實に宗規の點に於ては國家の干渉を受け、財政上に於ては信徒の力に依賴し、斯くて二重の束縛を蒙れるは、僧侶の爲めに頗る不利益にして、寧ろ國庫より相當の俸給を給與して、貧乏なる信者に依賴するの必要なからしむると得策なるべし。而して第一の困難は國庫の財政能く之を許すや否の問題なるが從來正教派僧侶の受くる保護額は次第に著しく增加せり。即其額は六十年前に比する時は今日は十倍以上と爲り、千八百三十三年に百萬ルーブル以下なりしものが、千八百八十七年には殆ど一千一百萬となれり。尤も其中市及地方の僧侶に與へられたるは半額程なり。（註。試に宗務院及正教會維持費として同千八百八十七年度の豫算案に擧げたる者を示せば左の如し。）

中央部	六二八
中央會議、宗教裁判所、大僧正會及僧正會	二四六、七八九ルーブル
僧庵	一、四三七、四九三
市及地方僧侶	四〇二、四七二
宗教學校補助	六、三九二、〇二二
在外國の正教布教所	一、七四八、〇六〇
修繕費	一八八、一二二
雜費	二六五、五四一
合計	三〇七、六四三
	一〇、九八八、一四二

又同年度に於ける異宗派への補助は、別に內務省管內の項目として、其額百七十五萬八千ルーブルに達せり。要するに正教派僧侶の受くる金額は僅にして、且三萬五千の寺領地中國庫の保護に與かる者は一萬八千を出でず。幸にも信徒よりの寄進は國庫の補助よりも多きは彼等の爲めに喜ぶべし。謝金奉納等一切の寄進金額は毎年平均一千二百萬ルーブルあり。此外宗務院は一種の積立金とも云ふべき者を有し、其額三千萬ルーブルに達せり。而して之より生ずる收入は正教會の經費中に加へらるゝなり。

俸給として國庫より支辨する金額は一種の國債と見做すを得べし。是れ政府が教會より其財產を沒收したる其代りとして之を與ふる者なればなり。蓋往時に於ては土地及之に伴へる農夫は一種の通貨の姿を爲し、正金を有せざる貴族等は僧侶の勞に酬ふるに常に之を以てしたり。故に其の自然の結果として教會は露西亞第一の地主となるに至りしが、十八世紀に至り殆ど全く政府の爲めに之を沒收せられたると嘗て前にも記したるが如し。

然れども黑僧幷に白僧も多少の土地は之を所有し、又大抵の村團は僧侶に多少の土地を與へて之を使用せしめり。唯だ夫れ其の極めて少なくして到底獨立の維持を圖る能はざるを苦しむのみ。されば要するに僧侶の主なる財源は土地に非ずして謝金寄附等の收入に在り。而して此收入は隨分に少なからざるに因り、若し悉く之を僧侶の手に收めしめんには敢て不足なかるべしと雖、事實は然らずして其中或は宗區の有に歸し、或は宗務院の所得となる者もなきに非ざるなり。例へば夫の蠟燭は各參詣者の必ず常に買ひ求むる所にして、其賣行は非常に多く、且往時は其製造を私人の自由に委ねたるも、今日にては寺院に於て自から之を製造販賣せる者少なからず、從て之より生ずる利益は頗る大なるものあり。然れども此利益は悉く僧侶の所得とはならずして、大半は宗務院及宗教學校に收めらるゝ

なり。

又信徒の爲めに聖式を行ふて其の禮金を受くるは僧侶の品格を高くする所以に非ずとの理由を以て、先づ懺悔式及聖餐式(コムミニヨン)の際に禮金を受くるを禁じたり。即ち一千八百八十七年宗務院は懺悔者が懺悔後に窃に金を僧侶の手に渡し、或は其の傍の臺上に物を殘し置くことを禁じ、又聖餐式後温き葡萄酒を飲む際に盤上に金を投ずるの習慣を禁じ、其代りには教會内に賽錢箱を備附けしむるとせり。然るに之が爲めに僧侶の品位は幾分か高められたるべしと雖も、其實收入は著しく減少し、皆々迷惑の思を爲せるに因り、其の能く廣く行はるべきや否やは頗る疑なき能はざるなり。されは其他の聖式の謝金を禁ずるが如き、敢て政府の爲さゝる所なりと雖も、而も人民は貧乏にして能く相當の謝禮を爲さゝるに因り、彼得大帝以來は其額を豫め談合決定せしめんとしたると度々あり。然ども其結果は甚だ面白からずして、或は結婚式を行ふ爲に入り來りたる男女が、謝金の相談纏まらざる爲めに再び立ち去るが如きとあり、或は謝金を收むるを避けん爲めに窃に死人を埋葬するとあり。蓋僧侶も農夫も共に貧乏なる爲め、斯かる淺間敷事とはなれるなり。而して斯かる有樣なるに因り、或は吝嗇なる農夫に復讎する爲めに、其の洗禮を與ふる子に可笑き名を附したりと云ふ奇談もあり。或農夫が他寺に赴きて結婚式を行はんとて其村の僧に同意を求め、推し問答を爲したりと云ふ奇談もあり。僧の曰く、『他寺に赴くと云ふは差支なし、然し汝は其爲めに生じる拙僧の損失如何を一考したりや。第一に汝の結婚式を行ふとすれば、茲に數ルーブルを收め得るなり。次に子供を生むべし、假りに之を七人とせよ、即ち七回の洗禮式なり、而して子供の中には死する者あるべし、假りに之を三人とせよ、即ち三回の葬式なり。又生長したる子供はやがて結婚すべし、即ち四回の結婚式なり』。斯く算へ立つるや農夫は之を遮り、『和尚樣、貴下の殘年既に幾何もなし、思ふに此等の事の生ぜざる中に、貴下は去て此の世に在らざるべし』と曰ふや、僧は之に對し、『如何にも然り、人間は皆死せざる可らず、故に拙僧は僅か十ルーブルにて汝の結婚式を濟ませ申すべし』と答へたりと云ふ。

斯くて僧侶の貪慾は坊間種々の物語の材料となり、冷罵諷刺を極むるの俗話も少なからず。勿論之に據て直に僧侶を判斷批評すると能はずと雖も、又斯かる事は

世界何處にも在りと雖も、露西亞のは特に痛切深酷なるを見る。試にアファナシーフの收錄したる者の中より一例を擧げんに、嘗て或僧あり、貧女の葬式に臨むとを拒みたり。因つて其亭主は已むを得ず先づ自から墓を堀りたるに、偶々財貨を堀り出せり。即ち一片の金貨を僧に贈りたるに、僧は俄に恐悅の微笑を湛へ、快く葬式を行ひ且つ其饗宴にも臨みて普通の人の三倍も飲食したり。然れども斯かる貧乏人が此の如き盛宴を張るは奇怪なりとなし、之を詰り問ふて其實を知るや、慾深き此僧は悉く其財貨を奪ひ取らんと決心し、妻と謀りて山羊の皮を被り、身を怪物に粉して農夫を恐嚇したり。然るに詭計果して目的を達し、首尾能く其財貨を奪ひ得たるも、偖て之を持ち歸るや、子羊の皮は其身に生へ附きて取り去るに由なかりしと云ふ。是れ一場のお伽噺に過ずと雖も、貪慾が僧侶の異名となれるは疑もなき事實にして、終に俗に「坊主の目附きの人」と云ふは一切目に見る物を慾望するの意味となれり。

僧正は配下の僧侶が斯かる弊風に陷るを矯正せんと欲し、隨分鋭き訓誡を與ふるとあり。試に予が事實と信する所の一例を記せんに、嘗てドミトリがチユラの大僧正たりし時、貧女あり其の許に來り、二ルーブルを借らんとを願ひ出でたり。乘々慈善の令名ある此大僧正は生憎金を所持せざりしかば、何故に二ルーブルを要するやを問ひたるに、女の曰く、『妾の夫死亡致したれば其が爲めに葬式を營みたきも、和尚樣は二ルーブル以下にては應じ難しと仰せらるゝなり』と。是に於てドミトリ『予は今日金を貸すとは出來ざるも、明日罷出でゝ亡夫の葬式を營み遣はすべし』とて女を返へし、偖て翌日愈々約を履で其式を了へたる後、其僧を顧み二ルーブルを與へ、且告げて曰く、『此金を收めよ、貴下の境遇は予と同じからず、貴下は唯だ謝禮に依て生計を營むものなり』と。實に然り、不幸なる僧侶輩が金錢を貪るの風あるは、亦自から憐むべきの事情に基けるなり。

僧侶は謝禮を以て主なる收入と爲せるに因り、寺領地を相續するに當ては先づ其地に於て收め得らるゝの謝禮幾何なるやは、其第一に注意する所なり。數年前ヴオリニヤ宗區の或青年僧がロヴノに於ける寺領地に任命せられたるに、同人は其收入少なき由を聞て書を大僧正に寄せ、更に良寺領地を得んとを願ひたり。大僧正パラヂアスは其請を容れたるも、其請願書の端に左の句を書き添へたり。曰く、

『請願者は收入多き寺領地を得んと欲せり。之を得るには彼は須く能く働きて其資格あるとを示さゝる可らず。夫れ物質上の事柄に心を奪はるゝは宗教家の使命を行ふに不適當なり。故に請願者は僧職以外の職業を求めて立身の道を作ると得策なるべし。蓋彼は僧職に適するとは見受けられず』と。（此添書は一千八百八十五年世に公けにせられ諸種の新聞にも轉載せられたり。）然れども斯かる說諭は左したる効能もなく、滔々たる僧侶は皆相率ゐて收入の多からんとを是れ求め、甚しきに至ては金錢の爲めに法を犯して秘密違法の結婚を行はしむるとあり。又邊僻の地方特に西比利亞に於ては、僧侶にして種々の商賣を營む者もあり。

而して聖式を行ふ毎に金錢を貪るに因り、人民は之を厭ふて自然改宗を避け、或は又正教派を去て異派に轉ずる者あるに至れり。即ち農民中には聖餐式の如きは之を全廢して可なるべしと云ふ者少なからず、從て其手數を省略し或は之を行はざる異派は、之に乘じて起るに至れり。晩今の異派開山中最も著名なる夫のスタエフの如きは正に是れなり。

聖式を行ふて其の謝禮を貪るは餘り感服し難き事なりと雖も、僧侶は其の妻子を養ひ且配下の副牧師其の他をも養はざる可からざるに因れり、是れ到底已むを得ざるものあるなり。而して謝禮金を分配するに就ては僧侶は其の半額副牧師は其の殘餘の三分の二唱歌師は其一を取るの定めなり。而して此の收入のみにては固より不十分なるべしと雖も、僧侶は教會內正式の儀式の外に種々祈禱の類を行ふて人民より謝禮を受け、以て補足と爲せり。即ち田舍の人民は多くの迷信を有し、四季それ〳〵の祭を行ひ、或は豊作を祈り或は疫病除の祈禱を爲す等、僧侶を煩はすの機會敢て少なからず。而して其都度彼等は現金或は作物を以て謝禮をなすなり。されば僧侶は住々貧窮の餘、教會の品位を損するをも顧みず、却て自己の懐を肥やす爲めに此等の迷信を助長するとあり。例へば夫の安產の祈禱の如き其一例なり。安產の祈禱とは、產婦の爲めに農夫は僧侶の許に至り、其の毛皮の帽子を倒まにして差出せば、僧侶は之れに祈禱を唱へ入るゝなり。而して祈禱を唱へ終るや、農夫は之を堅く閉ぢ、產婦の許に驅け附け、之を其頭上に振り開くなり。此奇習は彼得大帝の宗規條例に因て禁ぜられたるも、猶ほ今日に於ても或地方には流行せり。僧侶が自己の財源を枯らすを欲せざるは蓋奇とするに足らざるな

り。

然し頑迷なる農民等は暫く別とするも、宗教的儀式は一般に行渡りて戸々皆折ある毎に之を行はざるはなし。即ち一週年祭と云ひ、到着或は出立と云ひ、或は作業の始め若くは終局の場合と云ひ、常に僧侶を招きて祭を營めり。是れ僧侶が案外の馳走を受け、且餘分の收入を得る好機會なり。加之僧侶は招聘せらるゝを待たずして自から信徒の家に出掛くるとあり。夫のクリスマス、ツエルフスナイト及イースター祭の場合の如きは、僧侶は自から信徒の家を歴訪し、室隅の神像畫に對して口早に祈禱を唱へ、家人をして十字架にキッスせしめ、金をカクシに入れ、直に去て隣りの家に赴くなり。是亦僧侶に取り收入多き好季節たり。然れども此歴訪は頗る僧侶の品位を損するの源となると云ふ其次第は、敢て強て金錢を請ふが故にと云ふには非ず、抑も此等の祭りの折には如何なる貧家と雖も、必ずヴォドカ(Vodka、火酒の類)を用意し之を僧に呈するの習慣にして、若し之を辭して飲まざる時は其家の主人は之を以て非常なる凌辱を加へられたりとなし、頗る後々の不爲となるに因り、僧は餘儀なくも火酒一杯を毎戸に傾けざるを得ず。從て夕景とも

なる頃には醉歩蹣跚の醜態を呈するに至るなり。而して其足元の覺束なきを見るや、之を扶けて家より家に伴ひ、其日の勸めを終へしむる親切人は敢て少なからず。予は嘗て畫家ベロフが十字架を手にせる僧の醉歩蹣跚として行く其の傍らに、泥醉せる副牧師の法衣を土に汚せる有樣を畫きたるを見たるとあり。而して彼等人民は其の自ら強ひて醉はしめることを顧みずして、只管に僧侶を非難嘲笑するなり。故に之に處するには僧侶は唯だ酒に強くして容易に醉はざるに在り。婚禮の饗宴の折にも僧は自己の健康を祝する人々に對しては、必ず杯を傾けざるを得ざるに因り、到底大飲酒家に非ざれば能く其地位を辱しめざると能はず。一般の習慣此の如しとせば、田舍の僧侶が大飲大食の名を得るに至りたるも亦敢て偶然に非ずと謂ふべし。

遮莫田舍の僧侶を以て自己の聖職を忘却するものとなすは大なる誤なり。縱令其の行ふ勤行は機械的に流るゝの弊あるにもせよ、彼等は眞面目に忠實に之を行ひ、其風貌の粗野にして其思想の狹隘なるにも拘らず、別に賞すべく愛すべき所あり。故に農民等は博學華奢の若僧よりも寧ろ古風の老僧を尊信し、老僧は又病人

に聖餐式を與へ或は臨終の人の懺悔を聽くが爲めには、露西亞の寒天困難非常なるの場合にも猶ほ風雪を冒して其義務を行ふを辭せざるなり。吾人は其の多少の缺點の爲めに其美質を看過すると能はざるなり。

第十章

白僧(其の續き)。其社會上の地位。其孤立。其卑屈。上役僧の處置振り。寺僧の家族。其妻。其子。僧門に生たる子弟の傾向。僧侶の地位改良の計畫。寺及僧の數を減ずるの案。其缺點。僧侶と教育事業。教會學校。說教は近頃まで廣く行はれざりし事。黑僧と白僧の別は撤去せらるべきや

露西亞の社會に於ける僧侶の地位如何を思ふ時は、自ら其の人民に深く尊敬せられず、從て其の無勢力なる所以も明かなり。蓋露西亞人は基督と僧侶とを明かに區別し、前に對しては非常に尊敬を表するも、後者に對しては必ずしも然らずして、宛も皇帝の爲めに稅を取立つる俗吏輩に對するが如きの狀あり。即ち其宗教心の盛なるは事實なるも、僧侶を父(ファザー)と尊稱するも事實なるも、僧侶を教會と同一視せずして之を嘲笑の具に供して顧みざるとあり。是れ農夫或は商人間の有樣なるが、更に上流社會に於ける其地位如何を見るに、同じく無勢力にして夫の所謂「世間」に顏出しすると頗る稀なり。田舍にては貴族地主が時々之を自邸に招くとあるも、是れ唯だ祭又は儀式の行はる場合のみにして、固より其間に親愛友誼の存するに非ず。されば何人も僧の爲めに上席を用意し置くなど注意するとなく、其の社交上の地位は實に憐むべきものあり。斯くて僧侶(特に田舍の)は一方に於ては教育風習及思想を異にするの上流人士と遠ざかれると同時に、又下流農民輩とは餘りに懸隔し、結局上下兩界の間に立て全く索居孤立の趣あり。是に於て其世界は狹隘となり、唯だ僅に書籍を友とするを得るのみなるに、其書籍たるや又古風山林的の神學書類なるに因り、益〻時勢に後れ世と遠ざかるに至るなり。(註。尤も今日は教會に關する新聞雜誌にして讀むべきもの色々あり。)

斯かる社會的孤立の原因となり又同時に結果たる者は、僧侶と他の階級との間に

結婚の行はれざるとなり。實に僧侶が同族間に於てのみ緣組を結び、敢て世間と相關渉するとを爲さゝるは、正に彼等をして孤立の地位に陷らしむる第一の原因にして、又其孤立するが爲めに他人との緣組も自然行はれ難きなり。此點より云へば其社會に無緣なるは夫の庵僧即ち獨身僧と異なるとなし。而して世と交るとなければ從て其風貌も極めて不器用となり、一舉一動世人の嗤笑を買ひ、或は僧侶は緣起惡しとて家を立出づる折に之に出會へば引返して出發を思止まるとあり。社會には離れ人には輕蔑せられながら、田舍僧侶は其實何人にも倚賴せざる可らざる境遇に在り。即ち施主にして又耕作の手傳たる農夫も、自己の任免を左右するの力ある豪農又は貴族地主も、さては僧正も宗教裁判官も監督僧も、其他一切の官吏役員に至るまで、皆其の賴らざるを得ざるものなり。而して僧正其他教會內の要職を占むる者は皆黑僧にして、田舍の僧侶を輕蔑すること甚しく、白僧輩は戰々競々として之を畏怖するの有樣なり。

僕農解放及肉刑廢止後の今日に於ては、其狀態大に改まりたるも、往時に於ては僧侶は肉刑を加へられ、上役僧の之を見ること宛も地主の僕農に對するが如くなりしなり。キヤサリン二世が法律を寬大にして僧侶を「特權者」中に加へたる其後に於てすら、猶ほ田舍地方に於ては僧侶に肉刑を課することを廢せざりしなり。蓋其習慣の來る所頗る遠く、或は僧侶を野郎と呼び、其衣を脫せしめて嚴く之を鞭つが如きは敢て珍らしからざる沙汰なりしなり。又僧に兵役の義務を免することなりたる其後も敢て其趣意に順着せず、其職を免じて之を普通の人となし、以て直に徵發したるとあり。今日に於ては斯る亂暴は最早行はれざるも、猶ほ僧正は之に入牢を命ずるを得、又「寺苦行」と稱へて之を僧庵に幽するの權利あり。されば忍耐默從は寺僧の第一に心得べき德義にして、其の斯る卑屈憫然なる境遇にありながら未だ全く墮落するに至らざりしは寧ろ奇特と稱すべきなり。

露西亞の白僧を苦しむるの重荷は結婚なり家族なり。寺僧の妻帶は政治上及宗教上に於て利益なきに非ずと雖も、經濟上に於ては彼等を苦むる第一の桎梏なり。抑も露西亞の僧侶は夫のシリア、レバノン山邊のマロナイト派の僧の如く、平日は耕作に從事して日曜日に教會に勤むると云ふにも非ず、又英米の僧の如く、富裕なる信徒の納むる俸給に依て饒かに生活し、社會に名譽ある地位を占むるにも非ず。

要するに彼等は半清半俗、自活し且つ他に依るの有樣にして、其家政の困難は實に想像以外なり。アレキサンドル二世の時或僧侶が匿名にて其内幕を公けにしたるを見るに、妻子一切の生計費並に子女の教育費を合し七八人の家族にて六百ルーブルを要するに、斯ては收支償はざるに因り、更に砂糖茶咖啡又は肉小麥粉等の贅澤品を廢し、さては牛を牧ふを止め且子女の食料及教育費を節約したるも、猶ほ四百七ルーブルを要したりと云ふ。爾來物價は次第に騰貴せるに、而かも今日一年四百ルーブルの收入を得るに苦むの僧侶は敢て少なからざるなり。佛蘭西の貧僧も其收入の少なきと之に驕らずと雖も、彼等は家族の係累を有せざるなり。其境遇此の如くなれば、其反動として家族の狀態も下賤となり、教職に在るの品位を辱しむるに至たれり。先つ第一に其の妻(之をpopadiaと云ふ)と云ふは元來寺には大切なる人にして、其夫の職を得たるも往々之と結婚したるの結果なるに因り、且又僧侶は再婚すると能はざるに因り、頗る之を寵愛する筈のものとなり、「ポパーヂ」の如くに幸福と云ふ醜も生ずるに至れり。然れども其の幸福たるや見る影もなきものたるや言ふまでもなく、夫は外に出でゝ折々馳走を受け娯樂を爲すとあるも、妻は唯だ内に止まりて之に與かると能はず。又僧侶の妻は全村一人も交際する者とてはなく、全く戸内に索居の別天地を爲し、僅に近所の寺の妻君と來往するのみなり。尤も市中に於ては敢て必ずしも然らずと知るべし。而して僧侶の妻が斯く孤立の有樣と爲れる一原因は其の無學なるに在り。實に彼等は無教育無作法にして到底交際社會に入るに適せず、且夫を助けて慈善教育等の事業に關係するが如きは、敢て其の爲し得ざる所なり。されば夫なる僧も妻の無學なる爲めに肩幅を狹ばめ、交際の區域も自ら廣まると能はず。佛蘭西の如き國に於ては素性下賤なる者も一度僧侶の職に就けば、爲めに大に其品位を高むと雖も、露西亞の妻帶僧は正に之に反し、僧なるが爲めに却て其地位を卑くするの觀あり。要するに僧侶の地位を進めんと欲せば、先づ其妻の改善を圖らざる可らざるなり。

次に僧侶の子女は如何にと云ふに、彼等は今や就業の自由を有するに因り、沙門を去て他の方面に立身の道を求むる者少なからず。蓋彼等は僧侶生活の面白からざるを重々承知し、中學林又は大學林卒業後は身を教會の外に脱するを喜ぶなり。然れども俄に農夫又は職人となるには適せず、さりとて力役以外の職業に就かん

とすれば、貧乏と無縁故と社會從來の習慣とは、三重に彼等を妨げて立身を困難ならしむ。されど猶教師となり醫者となり、或は記者となり、代言人となり、又稀には軍人と爲り、實業家と爲り、以て黽勉業に就ける者頗る多し。且夫れ新教國に於ては僧侶の家より學者を出すと最も多きは人の能く知る所なるが、露西亞に於ても同樣の傾向あり。彼得堡及莫斯科の有名なる學者文客にして僧侶の子弟たる者敢て少なからざるなり。

彼等若し教會以外の新職に就く時は、其身分も自ら變じ、其の屬する新階級に登錄せらるゝとなるが、然し如何なる職業に就き如何なる階級に入るも、僧侶の子弟は一見して直に其素性を識別するを得べく、若し其風貌に何等の異なる所なしとせば姓名に因て之を知るを得べし。蓋彼等は概ね教會の祭或は墓式に因める宗教臭き名を有すればなり。而して學林出身の此等青年は如何なる氣風を世に傳ふるやと云ふに、案外にも其の携へ來る所は自由革命の精神なり。是れ其家庭及教育に徴して頗る奇なるが如きも、其實却て其の結果たりと云ふ其次第は、抑も彼等が種々の若痛困難の間に育ち、世人の輕悔の中に長じ、衷心鬱勃として不平反抗の氣に堪へざるものあり。既にして社會に出でゝ業を求むれば、障礙道を擁し、舊習脚を妨ぐ。即ち其の滿心の不平は益刺激挑撥せられ、共和的社會主義的精神は盛に起り來るに至るなり。されば彼等は概して社會の現組織を喜ばざるが如く、又宗教界の現組織を喜ばず、一歩教會學校の門を出づるや、直に此の刻薄無慈悲の繊毋たる教會其者に對して宣戰を布告せんとす。而して其の舊信古例に對する反動の激烈なるや、往々非常なる極端に奔らんとせり。嘗て西歐に於て十八世紀の極端過激なる哲學者及革命家は、僧侶の學校より出でたりしが、今日露西亞に於ても無神論者及び社會主義者は、却て宗教學校の門より生ぜり。即ち虚無黨破壞黨の中に於て僧門の子女は著しき地位を占め、夫の現組織破壞の夢想に耽れる先天的不平家革命家の大部分を成せり。下級官吏社會に革命思想の鬱勃たるものあるは、畢竟此等僧門の子弟にして其の社會に入れる者の多きに因るなり。

僧侶の境遇を改良するは教會並に國家の爲めに得策なると勿論なるに因り、政府も夙に其の必要を悟り、アレキサンドル一世より同三世に至るまで常に此問題を講究せざるとなし。特にアレキサンドル二世は僕農解放に關して用ゐたると相

傳たる方法に依り、既に千八百六十二年に之が爲めに宗務院議員及高等官吏より成れる委員を設けたり。而して此調査は其後絶へず繼續せられ、敢て注文通りの利益は生ぜざりしも、又必ずしも徒勞なりしには非ざるなり。

偖て改良の方法は、國庫或は人民の負擔を加ふるとなくして、僧侶の收入を增さしめんとの趣旨にて、寺及僧侶の數を減ずるとに決したり。即ち宗務院はアレキサンドル三世の初年に至るまで、此方針を以て進みたりしが、然し此改正法は露西亞に適せずと云ふ次第は、土地の極めて廣漠なる爲に非常なる不便を生ずるに在り。抑もアレキサンドル二世の時寺領地の數を減ずるに決したる其際には、全國の正教派教會は三萬九千以下(數千の小禮拜堂は別)にして、且其中市内又は市の近傍に在りたる者多かりしなり。然るにアレキサンドル三世即位の時には既に三千以上の教會は廢止せられ、爾後再建せられたる者もありと雖も、猶ほ一千八百八十七年の全國の寺領地數は三萬三千以下なりしなり。斯くては露西亞の如き廣漠なる國に於て、參詣者の不便如何許りなるべきやを知るべきなり。政府の議定したる標準に據れば、各寺領地に千人(婦人を算入せず)とし、一人毎に一ルーブルの割合と算定して、結局各寺千ルーブルの收入と定めたり。然れども一哩平方に六十人は人口稠密の部なりと云ふの國に於て二千人の人口ある寺領地は頗る廣きものならざるべからず。特に東北の地方は尙更なるへし。而して其の結果として來往の不便は參詣者の數を減じ從て又教會の收入をも減却し、却て當初の目的とは反するの結果を生ずる其一方に於て、禮拜法を省略し或は全然僧侶を要せずと云ふが如き異派の紛起を促せり。

次に僧侶の數を減するとは、固より實行せらるべくも非ず。現に全國の正教派僧侶の教は三萬五千以下にして、土地の廣さより云ふも人口の數より云ふも、決して多きに過ぐるに非ず。されば政府が減ぜんと欲したるは唱歌師及堂司の類にして、元來此輩は其數極めて多く、非常に教會の厄介物たる其上に、無學不道德にして大に教會の面目を害する者なるに因り、出來得べくんば悉く之を一掃し去て、其の代りに俗人を雇入るゝを得策とするなり。是れ羅典教會の先きに實行したる所にして、露西亞教會も徐々に此策を取らんとせり。

されど數を減ずるも僧侶の境遇を改良し難きと明かとなりたるに因り、或は教會

費を地方議會若くは村團の負擔としては如何との案を立つる者あり。然し財政既に窮迫なる其上に斯る負擔を加ふるは却て苦情の種なるべし。又僧侶の選擧若くは指名權を其寺領地の信徒に與へよと云ふ者あるも、宗務院は固より之を承諾せざるなり。蓋信徒をして僧侶を選擧せしむる時は、二者の間の關係を親密にするの利益あるべし。而して此目的は既に寺領地評議員會の制度に因て多少は達せられつゝありと雖も、彼等は敢て熱心に立入りて教會の世話を爲さゞるが故に其の效果は觀るに足るものあるなし。

又政府は教會をして初等教育の事業を行はしめり。是れ一は教會の人を利用し且僧侶等に餘分の收得あらしめ、以て其有形無形の利益を圖らんとの趣意に出でたるものにして、此教會附屬の學校數はアレキサンドル二世の時に二萬の多に達したり(少くも帳面上に於て)。後一時は熱心冷却して閉校する者もあるに至りしが、ポビドノスツェフ氏の宗務院總監となるに及ひ、再び盛に之を復興せり。教會學校の教師は寺僧並に教會内の諸員之に當るも、又他より之を雇入るゝを得べし。但寺僧の監督を受くべきものにして、成るべくは宗教學校の卒業生を採用するもとす。而して各宗區には之を監督するの評議會あるも、詮ずる所宗務院之を管轄支配するなり。即ち學科課程を定むるも宗務院にして、第一には聖書研究所禮讃美歌の科を置き、次に讀み書き並に初等數學あり。學科は僅に此のみにして、二級制の學校に於ては別に國史及教會史の初歩を加へ授けり。但二級制の學校と云ふは極めて稀なり。教會學校の生徒は必ず教會に參詣する義務あり。又小學校に別科を設け、年長者に必要なる實用の學科を教ふるを得るも、此を設くるには必ず特別の許可を受けざるべからず。又書籍庫を備附くるを得、但書籍の選擇は宗務院の指揮を受くべきものとす。

教會學校の設置は近年の事なるに因り、未だ其の結果如何を知る能はざるも、其の人民の文化を進め且つ異派に對する防衛となり、又異人種の雜居せる所に於ては、露國化の方便となるの功は敢て空しからざるべし。而して一千八百八十四年六月此種の學校設置を奬勵する法令の發布せられたる其當時には、全國僅に三千校の存するのみなりしも、六ヶ月後には新に增設せられたる者殆ど二千に達し、爾後益〻增加の勢あり。勿論紙上の報告は深く信據するに足らずして、現に宗務院總監

ポビドノスツエフ氏が公けにしたる一千八百八十三年の報告に據れば、全國の教會學校の數は一萬八千の多きに達せるも、生徒の數は僅に十萬にして、一校五六名の平均に過ぎず。即ち學校と云ふも有名無實なる者の多きを示すものにして、一千八百八十四年後の今日に於ても、敢て斯かる事の絶無を保する能はざるなり。此外地方議會(ゼムストヴオス)の設立せる學校は學科中に宗教に關する者を有するも、全く教會の外に獨立せり。但し夫の讀み書をのみ教ふる小村落の學校は、矢張教會の指揮を受くるものとす。此種の學校の教師は農夫老兵士又は退職せる小役人の類にして報酬と云ふも僅に賄の手當をなす位の事なり。

學校の事業に關係するにもせよ、僧侶は其本職たる説教は決して之を忽にする可らず、是れ實に民を教ふるの大方便なるが、奇怪にも露西亞の僧侶は全く之を放棄し、唯だ祭式を行ひ拔萃を讀みて能事了ると爲せり。此一事は夙に外國人を驚したる所にして、十八世紀の始キヤテン、マルグレも莫斯科の教會に就き記して曰く『彼等は決して説教を行はず、彼等の爲す所は唯だ聖日に聖書中の或章を讀むに過ぎず』と。而して其原因は敢て僧侶の無學若くは、專制政治の精神にのみ存するには非ずして、正教會其者の氣風は自ら然らしめたるなり。抑も新教國に於ては自由討究の精神盛にして、個人の解釋を許すが所に、各自其意見を説教し、之を以て其主もなる仕事と爲せるも、正教國に於ては個人が自由に説明を下し、或は獨創の意見を唱ふるが如きことを喜ばず。夫の美術に於て唯舊來の摸型を複寫復製するの外、少しも新案を入るゝを許さゝると同一の筆法を之にも應用し宛かも僧侶をして自己の説明を加へしむる時は、却て眞を誤るの恐ありと爲したるが如し。且つ露西亞人は元來區々たる人間の意見を加へざる純粋の神の教を聽かんことを希望し、從て説教を排斥するの傾きあるに因り、必ずしも教會をのみ非難すると能はざるなり。斯くて活ける説教は全く排斥せられ、空しく死せる拔萃の類を式と式との間に讀むに止りしが其拔萃なる者も字義多は會衆に分かり難くして、要するに空念佛に過ぎず。されば露西亞人は數百年來宗教的教育とも稱すべき者は少しも之を受けず、教義教理は全く之を夢中に過ごし、祈禱の文言をすら知らざる者頗る多き有樣なり。事情既に此の如く、宗教の花園は一に荒蕪に委して顧みられざりしとせば、異派分派の雜草紛然として生ひ茂るに至りたるも、敢て怪むに足ら

ざるなり。彼得大帝の時に至り始めて説教の法を輸入するに至りしが、猶ほ同帝よりアレキサンドル三世に至るまで、之を行ふは全く高等なる教會に止まりたり。蓋し僧正及大僧正は自由に説教するを得るも、下等の僧侶に至ては一々檢閲を受くるの免倒あり。即ちニコラス一世の設けたる規則に據れば、彼等は其説教の案文を草して豫め上役僧若くは教務檢閲掛の認可を受けざる可からず。文筆に拙なる彼等の事なれば、其の如何に免倒なるやは察するに餘りあり。今日に於ては此束縛は解かれ僧侶の舌は自由となれり。

且近年説教の盛なるに至りたるは、虚無黨の運動激烈にして之を防ぐの必要大なるが爲にして、即ち政府は政治上の目的の爲めに教會を利用し、教會は又皇帝の爲めに盡すを以て神に事ふるの道と信ぜるなり。是れ露西亞には普通の事にして國家と教會を常に手を携へて進めるは今日に始りたるに非ざるなり。而して此等の事情の爲めに説教は廣く行はれ、僧侶も愈其具武器を得るに至りたれば其面目も亦次第に改まるとならん。

之を要するに白僧の境遇は次第に改良の域に向ひたるに相違なきが、更に一歩を進め、黑僧の獨占せる教會内の要職に彼等をして就かしむるを得るに至るべきや如何之を爲すには寺僧をして結婚せしめざるか、若くは僧正をして結婚せしめ、以て二者の間の牆壁を徹去するより外に手段なし。然るに白僧の妻帶と云ひ黑僧の獨身と云ひ遠く幾百年來の習慣にして、廣く希臘教國間に行はれ、且つ現に聖經中の語を引て其の證典と爲せる程なるに因り、今俄に之を改むるが如きは到底行はるべくもあらず。然れども黑僧獨占の區域は次第に狹隘となり、白僧にして名譽ある地位に就く者も稍其例を見るに至りたれば、敢て甚しく白僧の爲めに悲むを要せざるなり。されど彼等の境遇如何に改良せられ、物質上の窮迫如何に救治せらるとするも、之をして卑屈の境涯を脱して其の高尚なる具地位に上らしむるには、唯だ教會及人民の自由を擴張して、之に精神的自由を與ふるの外に策あるなし。夫れ物質は末なり精神は本なり。本を治めずんば末を救ふも亦何とかせん。吾人は露西亞が異宗異派をして相並んで自由競爭を爲さしむるの日に非ずんば僧侶の具改良は到底行はれざるべしと信ずるなり。

第三編　「ラスコル」(別派)及諸宗派

第一章

「ラスコル」即別派の起原及性質。其宗教上の原因。儀式を重んずる事。祈禱書の修正は革命を招けり。祈禱禮拜に關する主なる爭點。「舊式家」即「舊信家」。彼等は「東方教會」の主義を唯だ極度に及ぼしたるなり。彼等がスラヴ語の祈禱書を固守したるは暗に外風輸入に反對したるなり

露西亞には種々の曖昧なる宗派ありて下層の社會を充たせり。上には莊嚴なる正教會(オーソドックスチャーチ)の建物高く天に聳ふと雖ども、降りて地下數尺の處に到れば、無數の暗窟横りて俗間迷信の本城となれり。即ち吾人は今正に此窟中に降り其の探險を行はんと欲するものなるが、是れ敢て此等無學頑迷なる宗派を重要視するが爲めには非ず、唯だ其の純粹に露國的にして、露西亞國民の眞相を知るに無二第一の材料なれば

なり。蓋夫し法律制度文學及び交際社會の有樣を見、以て觀察し得る所のものは、唯だ露西亞の外形に過ぎずと雖、若し更に俗間の諸宗派が研究する時は吾人は其の裡面の眞髓を伺ふを得るなり。

抑も「ラスコル」(別派の義は)ピザンスの耶蘇教が露西亞下層の人民に因て形を變ぜられたる者に外ならず、と雖、飽迄も露國的特色を有して天下之に似たる者なく、且露國内に於ても之を奉ずるは露西亞人中の露西亞人たる夫のモスコヴィア人即ち大露西亞人に限れり。而して其の起りたるは學校の中に非ず、僧侶の間に非ず、唯だ農民の小屋と商人の帳場とは即ち其の生育所たり。是れぞ即ち吾人に取て其の研究の最も興味ある所以なり。

「ラスコル」とは宗派の名に非ず、又諸宗派の總稱にも非ず、唯だ教義若くは異說の紛然として集まれる者にして、其中には互に矛盾する者も少なからず、其の相一致するの點と云ふは僅に起原の同しきと國教なる正教會に反對するとの二あるのみ。此點に於ては「ラスコル」は新教派(プロテスタント)と相似たりと雖、後者は自由討究を愛するの精神より來れるに、前者は無學と尊信の心とより生ぜり。且西歐に於ては形式を輕ん

ずるの心より、宗教上の不和を生ぜるも露西亞に於ては非常に之を重んずるが爲めに異派の發生を促せり。是れ此の二個の運動の互に方向を異にする所以なるが、嘗一主義を振り棄てゝ獨立の別派を起す。以上は再び他の過を學ぶ能はざるは新教派も「ラスコル」も同一なるに因り、茲に其の自然の結果として分離に次ぐに分離を以てし、諸派紛然として停止する所なきに至れり。

然れども諸分派の起るに至りたる其源は皆何れも祈禱書の修正より來れり。異派にして此修正以前に起り、從て之に關係なき者もなきに非ずと雖、其數は極めて稀にして且「ラスコル」の現はれたる時には殆ど消滅に向ひたり。而して露西亞人が非常に形式に拘泥し、文句の末を爭ふの事實は、敢て今更らの事に非ずして、ノヴゴロッドの或る年代記者は既に十五世紀に於て左の如く云へり、『何々の年或馬鹿天狗が神よ救ひ給へと云はずして、おゝ神よ救ひ給へと云ひ始めたり』と。是れぞ「ラスコル」を生み出せる種子にして、露西亞に異派の紛然たるは其の基つく所深しと謂ふべし。蓋彼等の思ふ所に據れば禮拜祈禱の文言は一種の咒文にして、一字一句の相違も其魔力を失はしむるものなり。即ち本卷第一編第三章に於て說きたるが如く、彼等の目には僧侶は一種の魔術師にして、儀式は一種の魔法なり。是れ彼等が形式の末を爭ふ所以にして、且大露西亞人の主なる特色が儀式を重んずるに在るとは嘗て前にも說きたる所なり。而して是れ其天性に出づるとは云へ又耶蘇教を輸入するに當り、無學なる彼等は其理論神學を顧みずして、唯だ禮拜の形式のみを學びたるの事實も、幾分か其原因と爲れるに相違なきなり。

モスコヴィア人が非常に儀式を重んじ字句を爭ふの結果をして益々非ならしめたるものは、其の大に轉訛して種々なる誤を生じ居たる事なり。或は誤て讀み或は誤て寫し、或は地方的習慣を儀式中に混入し、斯くて紛然として字句の解し難きや、其の難解は即ち其の奥妙不可思議なる所以として却て有難味を感するに至れり。されど其の本文と異れるの事實は極めて明かなりしに因り、既に十六世の始莫斯科の大公ヴァシリ四世は、希臘の魔僧マキシムをアソス山より招きて修正を企てしめたり。然れども宗會は此修正者を異端と宣告し、之を僻地の僧庵に幽せり。後十六世紀に至り印刷術の輸入と共に種々の祈禱書の出版せらるゝや、誤謬は益々明白と爲り、終に十七世紀の半ば大管長ナイコンが政教兩界に跨りて非常

なる勢力を占め皇帝アレキシスを左右するを得るに及び、奮然として此改革を斷せり。即ち彼は全國各地より古希臘語及スラヴ語の諸寫本を集め、ヒザンス及アンス山より僧を招きて之を希臘の原本と比較調査せしめ、以て誤謬を正して新祈禱書を印刷し、宗會をして之を採用可決せしめ、全國の民は必ず之を用ゐざるを得ざるとせり。然るに之に對する人民の驚愕は非常にして、時代は既に彼得大帝の父たるアレキシスの時となれるも、其反對は先きのマキシムの場合と異ならざりしなり。唯だ上流の僧侶は大管長に左袒して之を助けたるも、下流の僧侶及一般の人民は飽迄之に從はずして、舊祈禱書を用ゐ、以て二百年以上を經たるの今日に至れり。是れ實に夫の別派即ち「ラスコル」の生ずるに至りたる起原なり。尋で改正祈禱書の發表後十年に大管長ナイコンは貴族等の嫉妬を受けて宗會より排斥せられ、其地位を失ふや、守舊黨は之を以て新祈禱書を否認するものゝ如くに思ひ、大に得意を催したり。然れども是れ全く他の原因より來りたるものなるに因り、宗會は依然として修正書に反對する者を破門して其方針を繼續したり。宗教界は常に些細なる爭の爲めに紛擾を來すの常とは云へ、此の如きは恐らく其例なかるべし。十字架の形、十字形の行ひ方、頭の東或は西への向け方、信條の讀方ッーサスなる名の綴り方、十字架に記入する文字、さては「レアルユラ」なる語を唱ふるは二回にすべきや三回にすべきや、又聖餐式に用ゆるパンの數は幾片にすべきや、是れ實にナイコン以來露西亞教會を裂きて幾多の別派を生ぜしめたる問題なるなり。正教派の人は十字形を作すに三本の指を用ふるも、別派の人は二本を用ゐ、又ナイコン以來教會にては「アレルユラ」の唱言を二回誦するも、別派の人は三回唱へ、且之には三位一躰を象どると云ひ、或は基督の二重の性質を示すと云ひ、色々小六ケ敷理由を附し、此等小相違の爲めに異を立て派を分てるなり。

されば形式を重んずるは「別派」の本色にして、彼等の爲めには耶蘇教は儀式より成り、禮拜即ち宗教なるなり。斯く信仰の形と質とを混同するの事實は、彼等が自ら「舊式家」或は「舊信家」と稱し、二者を同一視せるに徵するも明かなり。而して些細なる形式の爲めに分離を來し、或は舊習古例に拘泥するは必ずしも其新發明に非ずして、元來希臘教派の羅典と分離したるも、其源は儀式の爭にして、又希臘教會が古例に重きを置て之を眞理の批判者と爲したるは人の知る所なり。然らは即ち露

西亞別派の徒は唯だビザンスの師を學んで其主義を極點に及ぼしたるに過ぎず。自然の成行亦敢て奇とするに足らずと謂ふべし。

且夫れ彼等所謂「舊信家」は敢へ無意味に形を守るに非ざるなり。彼等に取ては形式は即記號にして、些細の事に至る迄總て寓意的に非ざるなく、禮拜と信條と儀式と教理と、其間一點の區別なし。即ち儀式は宗教の外皮に非ずして肉なり血なり。之なくんば信條は死せる朽骸なり。故に彼等が形式を神聖視するは同時に又其意味其精神をも重んずるものにして、粗硬なる物質主義形式主義の其下に、一種未熟淺薄なる觀念主義理想主義の潜むものあるを見るべきなり。

然れども舊信家が儀式を重んずるは敢て唯だ其の寓意的なるが爲めのみに非ずして、又其の先祖傳來の爲し來れる所なるに因れり。古物を尊敬するは人情の自然にして特に宗教上に於ては其の甚しきの常なるに因り、彼等が唯だ祖先の仕來りなりとの理由を以て之を固守するも怪むに足らず。且モスコヴィアの民は古來宗教上に於ては儀式を第一とし、宗教家とは即ち儀式を守るに篤きの人と云ふの有樣なりしに因り、其子孫たる彼等が此の如きは固より當然なり。

東方正教の特色が其の國家的性質を帶ぶるに在る事は嘗て之を說きしが「ラスコル」即ち別派も純然たるスラヴ的產物にして實に其國民的特色を守るが爲めに別に分離するに至りたるなり。此點より云へば「ラスコル」は正教と同精神より來れる者と稱して可なり。即ち彼等はスラヴ語の禮拜書を以て希臘語の原本よりも正しとし、其の祖先以來行ひ來れる慣例を以て外風に感染せる官許教會の儀式よりも尊しとし、一切他人他國のものゝは之を採用せずして飽迄も國風を守らんとしたり。されば「ラスコル」が正教會に反對したるは正に外風の輸入に反對したるものにして、ナイコンの改革は固ずも將に來らんとせし彼得の大革命の先驅たりしなり。實にナイコン及アレキシス皇帝は西歐の神學よりも寧ろ其の文化及び精神を暗々裡に學びつゝありしなり。

第二章

「別派」の起原及性質。其政治上の原因。「別派」は彼得大帝及以下

諸帝の改革に對する反動なり。「別派」は保守黨の反對なり。彼得の改革は「末世」の徵候。彼得は惡魔。惡魔の世。ナイコン及彼得大帝以後の新慣例の排斥。著髯問題。「ラスコル」と僕農制度及役人の專制に對する不平

「別派の發端は祈禱書の修正に對するモスコヴィア形式主義の反抗に在りと雖、更に又彼得大帝の改革の爲めに益其の氣焔を高むるに至れり。ナイコンの修正反對者は彼得の改革の反對者と相會して愈火の手を盛ならしめたり。即ち彼得は知らず識らず「別派」の第二の發起人となりたるなり。抑も彼得の改革は實に非常なる激變にして、古來の習慣傳說迷信等は一切蹂躪して顧みず、啻に政治上の制度文物のみならず、敎會に干涉し家庭に侵入し、公事と等しく私事にも立入りて、萬事萬端悉く之を改めんと企てたり。或は正月元日は九月一日なりしを廢して一月一日と爲し、或は年を算ふるに世界創造の時よりしたりしを基督の誕生よりと改め、或は男子の衣服を變じ、或は其の髯を剃らしめ、或は女子の面被を徹せしめり。深く古來の習慣を重んずるの彼等にして、俄かに斯かる激變に逢ふ其の驚愕果して如何ぞや。實に半夜激震の地軸を動かし來りたると異ならざりしなり。而して彼得の改革中には宗敎的性質を帶ぶる者も少なからざりしに因り、又其の時代は未だ政敎の混交を脫せざる頃なりしに因り、彼等舊信家は彼得を以てナイコンの志を繼げるものと爲し、甚しきは彼はナイコンの私生兒なりとの訛傳をも生ずるに至れり。其の「分派」の運動を激成したるも亦宜なりと謂ふべし。

且夫れ法三章流の單純なる政治を喜ぶ彼等は、新政府が繁雜なる規則を設け、中央の集權を固くし、百官の制度を煩はしくし、以て私事家庭の微に至る迄干涉するを見ては、不平の念に堪へず、又敎會に從ふべき國家が却て敎會を蹂躪するを見ては慷慨の情抑ふるに由なく、而して之を憎み之に反抗するの心は、變じて道德的主義となり宗敎的觀念と爲り、宛も世は變じて惡魔の天下と爲りたるが如くに思はれたり。否是れ比喩には非ずして、眞實彼等は彼得を以て惡魔(ヒーダン)の權現と爲し、「非基督(アンチクライスト)」の來世と爲し、世は愈「世界の終」と爲りたりと信じたり。而して彼得が正妻ユードキシヤを離別して素性怪しき外國婦人と關係したる如き、或は其子アレキシスを殺したりとの風聞と云ひ、或は其風貌の奇異なるとと云ひ、總べて無學なる彼等を

して其の惡魔たるを信ぜしむるの材料と爲り其の能く軍に大捷を博し奇功を收むるや是れ惡魔の冥助あるに因ると思ひたり。斯くて彼に關して奇怪なる風聞をすら窃に傳ふるに至りしが、或者は曰く、彼得は邪僧ナイコンの私生兒なりと、又或者は曰く、眞の彼得は其の父祖の如く信心なる良公子なりしも、偶々海上にて其跡を失ひ、或る猶太人之に代へられたるなりと。又曰く此僞帝の位に即くや皇后を僧庵に幽し皇太子を殺し、獨逸生れの怪しき女と結婚し、露西亞に外國人を流れ込ましめたりと。斯かる風聞は益〻舊信家をして「非基督」の來世を信ぜしむるに足るものなり。

「非基督」の來世一度決定すれば、之に伴ふて豫言者の豫言に適中すべき事實を眼前の事實中より求むると固より容易なり。即ち彼等の觀察に因れば默示錄中に記るさるゝ事は一々符節を合すが如くに存せざるなし。其說は固より牽强附會に過ぎずと雖も、彼等は斯く解し斯く信じ、甚しきは露西亞(Rossia)なる國名を故らに「ラッサ」(Russa)と綴り、聖書中の「アッサ」(Assur アッシリヤの舊名)と同じき者と爲し、之に向て古代豫言者がニネヴェ及バビロンに就て述べたるの咒詛を加へんとせり。

斯くて世は惡魔の天下と爲れりとて、ナイコン及彼得以後に生じたる者は事の有形無形に論なく物の大小輕重を問はず、之を否認し之を排斥し、或は茶煙草咖啡砂糖等は惡魔の用ふる者なりとて其の使用を禁じ、或は鋪石の道路は「非基督」の作なりとて之を通行するを制し、或に馬鈴薯は惡蛇がイーヴを惑はしたるの林檎なりとて之を食ふを禁ぜり。

此の如く「舊信家」は頑冥なる思想の中に籠城して文明を破門し去り、彼得が一方に於て種々の改正令を發すれば彼等は新十誡を設けて之に對抗せり。例へば「髯を剃る勿れ、喫煙する勿れ、砂糖を食ふ勿れ」と云ふが如し。而して之には聖書中の字句を引て理由と爲し、其の信心家の須く守るべき所以を辨ぜり。「舊信家」の該に曰く『喫煙するものは「聖靈」(ホーリーゴースト)を掃ふなり、咖啡を飲む者は電火に擊たるべし、又茶を飲むものは救を受くるとなかるべし』と。然し神學上の說明は縱令附せらるゝにせよ要、するに其反對の眞原因は唯だ其の新奇にして祖先の慣習に違ふと云ふに在るは固よりなり。

黨派の相對して爭ふ場合には、互に標榜する所以の旗幟なかるべからず。即ち露

西亞に於ては髯は正に舊信家の標號と爲れり。彼等は思へらく、鬚髯は神の人に與へ給へる所にして、之を剃るは異端の習慣なり。聖經に『神に似せて人を作れり』とは即ち是なるに、若し之を除き去らば是れ天與の形を害して自ら不具となるものなり。基督を見よ、古代の諸聖を見よ、皆髯を蓄ふるに非ずや。即ち之を剃り落すは古聖の例に違ひ、且神意に戻るものなりと。斯くて蓄髯を重んずるの極、之が爲めに殉教者を出すに至れり。即ち千八百七十四年アレキサンドル二世の時彼得堡に於て或新兵は髯を剃るとを拒んで數年の入牢を命ぜられたることあり。されば政府も大に處置に窮し、遂に一部の隊例へばコサック兵には髯を蓄ふるとを許せり。又彼得は蓄髯稅を課するの案を起し、特に頑固なる舊信家には二倍の稅を課するととしたるも、勿論其功を奏すべくもあらず、時を經るに從ひて髯に關する諸法律は空文に歸するに至れり。

要するに「舊信家」は外風の侵入に反對する露西亞保守主義を代表するものにして、「別派」は新舊の思想文明の衝突の結果ならずんばあらず。元來彼等は舊物を愛し過去を尊び、理想を古代に置て後人は日に先人に劣ると思ふに因り、明かに其主義は進歩と相容れず。彼等は常に頭を後ろに回らし、舊時に復るを以て改革と爲せるなり。故に一事一物の微と雖も新奇なるものは凡て之を排斥せずんば已まず。其の彼得の改革に對し、笑ふべき事に迄反對したるも敢て亦奇とするに足らざるなり。

而して一の羈絆を脫するは又他の羈絆を脫する所以にして、此に獨立分離するは又彼に獨立分離するの源たり。故に異派の徒は概して自由主義共和主義にして、往々社會主義及共產主義に陷るとあり是れ蓋し人情自然の傾向なるべし。特に二種の事情が此傾向を助長したりと云ふは、夫の「僕農制度と役人專制の政治となり。「別派」は僕農制よりも半世紀程後に起りたるものにして、固より同時に現はれたるに非ずと雖も、其の能く民間に盛なるに至りたるは、多數人民が奴隸の如き不自由の境涯に在りたるに因ること頗る大なり。蓋地主に束縛せられ官吏に壓制せられ悒々として氣鬱し心屈するや、彼等は僅に「別派」を以て避難所と無し、其の隱家の中に多少の慰安を發見するを得たるなり。否啻に道德上の隱家たるのみならず、實際脫走の兵士及農夫等が身を匿めて其の羽翼の下に世を忍ぶことともなき

に非ざりしなり。是れ北に於てはノヴゴロッドの自由農民及南に於ては廣野地方のコサック人等、凡て露人中最も不羈自由なる人民間に「舊信家」の數の最も多き所以にして、宗教上と政治又は社會上とに於ける二種の抵抗が相合して益〻其力を強くせるなり。蓋此二種の點に於ての抵抗は、共に舊露西亞の國粹より來り、其根は同じくスラヴ氣質の中に横はれるものにして、之を喩へば「舊信家」は宗教上のコサック人とも稱するを得べく、即ち夫のドン河畔の不羈粗豪なる騎兵の性情を、露西亞の精神界に傳へんとする者なり。

第三章

「別派」の進化。極めて論理的なる發達。「舊式家」は僧侶を有せず。僧侶なければ聖式を行ふに由なし。「ラスコル」二派に分かる。有僧派及無僧派。極端家の到達せる結論。無僧無結婚。聖式廢棄に就ての辨明。末世の到來。惡魔の世。身を殺して惡魔の世を離脱せんとする者あり。自殺及「火の洗禮」に依て救を求むる事。基督の再來。ナポレオンを新救世主と思ふ者ある事

抑も宗教は極めて論理的にして、且神學的思想は常に演繹的に推論して底止する所なきものなり。其の外形の漠然として捕捉し難きが如きは、即ち其の如何なる妨害をも潛り拔けて終に達すべき所に達せざれば止まざる所以なり。況んや緻密なる推理を好むは大露西亞人の特性にして、演繹に次ぐに演繹を以てするは其の常なるに因り、敢て議論を極端に說き及ぼして驚くことなし。是れ實に分派の紛々たる所以にして、其論理には奇異不條理のもの珍らしからざるにもせよ、之れが爲めに「別派」の發達は自ら整然として皆其揆を一にし、種々混雜せる其中に、一糸之を貫きて亂れざるものあり。即ち外より之を見れば極めて不秩序不整頓なるも、其中別に整然たる統一の存するあり。

「舊式家」は先づ劈頭第一に二派に分かれざるを得ざるに至れり。始め彼等が國立の正教々會より分離するや、其當時舊所禱書を固守する僧正は僅かに一名のみなりしに、ナイコンは之を獄に幽して後繼者を得ざるまゝに死せしめたり。之が爲

め「別派」は式を行ふべき僧侶を一人も有せざることゝ爲り、從て僧侶を用ゐずして儀式の廢たるゝを顧みざるか若くは一旦振り棄てたる官許教會の任命せる僧侶を迎ふるか、二者其の一に出ずるの外なき事となれり。是れ何れにするも當初の志とは大に矛盾すべき事なるが遂に此點に關して彼等は有僧派(Popoftsy)及無僧派(Bezpopoftsy)の二隊に分れ、有僧派は官許教會の脱走者を拾ひ來て之に聖式を行はしめ、漸く十九世紀の半ば頃に至り始めて全然獨立して自派の僧侶を作るを得るに至れり、其次第は後に説くことあるべし。

次に無僧派は一旦僧侶を用ゐざることに決したる其結果として、種々重要なる聖式をも棄てざるを得ざるとゝ爲れり。即ち僧侶就任の聖餐式の亡ぶると同時に、僧侶の行ふべき諸聖餐式も亡ぶることゝなり、夫の七大聖式の中洗禮の外は悉く廢絶に歸せり。されば無僧派の徒は十字形を作す指の折り形、又は「アレルヤヤ」の唱へ方等の些細なる儀式の爭の爲めに、圖らずも重要なる儀式を棄て、耶蘇教的生活の主眼とも云ふべき者を失へり。舊式を株守せんと欲して却て非常なる新奇を開けり。是れ實に矛盾の甚しきものなりと雖も、亦無僧と決したる以上は論理上當然到るべきの結果なり。

然れども彼等の中斯かる有樣を以て甘んずること能はざる者は、銘々勝手に怪しげなる儀式を起し、或は模擬的聖餐式を行ひ、以て僅に其心を慰めり。而して是れ元來畫一の規律あるに非ざれば、之が爲めに益〻分派の複雜を來せるは已むを得ずと謂ふべし。若し夫れ更に大膽なる輩に至ては、論理が赴くが儘に極端に走り、一切の儀式を去て少しも驚かず、唯だ俗人の行ひ得る洗禮式の外は悉く聖式を打棄て、天と地とを結ぶべき連絡は其の斷絶したる儘に放棄して顧みることなく、果ては結婚の式をも行はざるに至れり。蓋男女の緣を結ばしむるものは僧侶のみなるに因り、僧侶なければ從て又結婚もなきなり。

無僧主義の結果は無結婚となれるが、若し愈結婚を行はずんば是れ家族なく社會なきなり。是れ到底人情の忍び得る所に非ず。是に於てか結婚は無僧派を苦むる一大難問となり、種々樣々の解釋者を生ぜり。即ち實際家は結婚は社會上必要なる慣例なりとして之を行はんとし、又論理家は獨身制を一般に强行せんと主張せり。又或者は戀愛の自由を説きて男女間の關係を自由放漫に附せんとせり。

彼等の多數は敢て斯かる極端に走らずと雖も、猶結婚を禁じ之を禁ずると共に亂暴なる主義に陷れり。蓋彼等の目より之を見れば、淫行は一時の弱點にして、聖訓に反するの結婚よりも其罪輕きなり。斯くて道德法を轉倒して結婚よりも畜妾を是認し、蓄妾よりも放逸主義を取れり、曰く「美女と暮すよりも獸と住むが善く、一人の女と公然同棲するよりも多くの婦人と秘密の關係を結ぶに如かず」と。是れ實に舊式を守らんとしたる信心家の到達する結末なり。二三の古例を支へんと欲して却て耶蘇敎を離れ人間の道德を去り、又國家及近世文明と戰はんとして却て社會の根本主義を破るとは、事物の成行も亦驚くに堪へたりと謂ふべし。

然れども斯かる結論は何人も驚かざるを得ざるに因り、茲に神學上より其理由を説明するの必要あり。而して其説明とは即ち先に述べたる「惡魔の世」(アンチクライスト)と爲れりとの一事にして、げに惡魔は天下を支配して「世界の終」は愈近けりとせば、今更女子と結婚して生々の道を圖るの必要もなく、僧侶も家族も凡て無用に歸するなり。而して「世界の終」近けりとは彼得大帝の以前より言傳へられ、爾來既に殆んど二世紀を經過せるも、猶舊信家の子孫は之を信じて待ち構へ居れり、思へらく「惡魔の世」とは數代に跨れる時代にして必ずしも一小短期に非ずと。然し茲に注意すべきは同じく「惡魔の世」とは信じながらも、之を無形なる精神的のものと爲すと、眞實有形なる具躰的のものと爲すとの二派あり。無學頑冥なる輩は即ち現に惡魔は上に君臨し宗務院は惡魔の會と思へるなり。而して一念此に到る時は、現社會は實に忌むべく怖るべき修羅にして、遠く世を避けて山林に隱遁するか若くは更らに一歩を進め一死苦難を脫するに如かざることゝなるべし。されば或は罪もなき幼兒を手づから殺し、以て其の苦難を救ひ得たりとなすの所謂「子殺し」なる者あり。或は兩親親類及友人の壽命を故らに縮むるの所謂「窒息者」或は「打殺し手」なる者あり。怖るべきは實に迷信なりと謂ふべし、昔し十五世紀程以前亞非利加に於ては、此の罪深き浮世を脫却する爲に、或は水に投じ或は劍に伏し、或は火中に投じて自殺を謀り、甚しきは全家全村悉く集て火中の犧牲と爲りたることあり。今露西亞の敎狂家は圖らずも此亞非利加人の二の舞を爲せるなり。試に一例を擧ぐれば

アレキサンドル二世の時コードキンと稱する農夫は二十名程の人を勸誘してペルムの森林中に退き、自ら餓死を謀りたりと云ふ。即ち彼は彼等をして其森林中

に窟室を造らしめ、一同白シャツを被りて之に閉じ籠り、小兒は之を無理に留置したり。然るに其中に二名の女は遂に耐へ得ずして逃げ去りたれば、彼等は其計畫の發覺して再び惡魔の治下に連れ返へされんことを恐れ、互に相刺して死したり。悲絶とや云はん、慘絶とや云はん。

亞非利加の自殺者は餓死は甚だ緩慢にして且半途變心の恐あるに因り、成るべく火に投ずるの方法を用ゐたり。即ち家族一團と爲て積み上げたる麥稈及枯枝の中に坐し、説法者外より之に火を點ずるなり。此法は十八世紀の大迫害の時に能く行はれたる所なり。而して露西亞人中にも又此法を用ふる者少なからず、ウラル山中及西比利亞國境に於て、此方法にて死した耶蘇教徒は幾千を以て算ふべしと云ふ。

此の如き事は十九世紀には行はれずと雖も、猶時としてはアレキサンドル三世の時に至りてすら、其の例なきに非ず。例へば千八百八十三年ジューコフと稱する農民は讃美歌を唱へながら自ら燒死したり。又「火の洗禮」と同じく「血の洗禮」も有効なりとして斧にて殺すことあり。即ち千八百四十七年ベルム州の或る農夫は其の全家族を一擊に斬り殺して之を天國に送らんとしたるに、偶々斧の手より落ちたる爲め、彼は法廷に自首したり。又ヴラヂミル州の或農夫は二人の男兒を殺したりとて罪に問はれたるに彼は之を辨明して其罪を救はんと欲したるなりと答へ、且牢中に於て自ら食を斷ちて其後を追ひたりと云ふ。

露西亞には「別派」の詩人が歌に作りて民間に行はれしめる『アレルヤヤ女の物語』なるものあり、自ら斯かる習俗を養ふの力あるに因り、試に其の大要を記せんに、或冬の日アレルヤヤ女は手に男の子を抱きて爐前に坐し居たるに、忽ち幼ジーサス入り來り、敵の追擊烈しければ身を潛ましめ給へと求めたり。女は隱すべき場所のなきに窮し居たるにジーサスの曰く『汝の子を爐中に投じて予を其の代りに抱け』と。是に於て同女は其命に從ひ、頓て敵の來りたる時爐を指して彼等を欺き、無事に其局は終りたるも、其の去るや悲哀の情抑へ難く、覺へず號泣せり。然るに『爐中を見よ』とジーサスの諭すに因り、頭を擧ぐれば不思議や火爐は變じて冷しき花園と爲り、愛兒は天使と歌を謠ひつゝ嘻戯し居たり。即ち愛兒の肉を火に投ずることを信者に敎へよと告げ置きてジーサスは去り行けり。是れ實に奇怪なる物語

なりと雖、蒙昧なる人民は之を信仰し、甞て或女農は幼女を火に投じて、『予はアレルヤヤ女を學ぶなり、喜べや愛兒は天國に昇りたり』と叫べり、又千八百七十年或農夫は卓上に七才の男兒を縛して之を斬り、其肉を料理して犧牲に供へたり。其他信心の爲めに無殘なる罪を犯すの例は法廷の事件中に現はるゝ、となきに非ず。偖て彼等は「惡魔」の來世を信ずると同時に、又基督の再來遠きに非ざるを信ぜり。是れ自然の順序なり。即ち迷信深き彼等は救世主の再來を唱へ、或は自ら之を以て擬ず者もあり。或は諸所を徘徊して救世主を搜索する者あり。現にニコラス帝の時西比利亞の或る宗派の徒は自ら「基督探求者(クライストシーカー)」と稱し、救世主は確かに此世に再來したりと唱へ、山野を跋涉して之を探索したることあり。又或地方に於ては、基督再來して諸稅廢止せられたりとの理由を以て、納稅を拒みたる者あり。或は又「裁判日」の喇叭の聲今にも響くやと待ち構へつゝ、終夜祈禱を唱へたるの村落もあり。

救世主には色々の人を以て之を擬することあるも、中にはナポレオン一世を以て救世主の再來と爲す者あり。蓋露西亞帝國を以て「惡魔」の王國と認むる以上は、之を討伐するの那翁を以て救世主と爲すは、無理ならぬ想像なり。されば之を信ずる宗派の者は窃かにナポレオンの畫像を藏して之を禮拜せりと云ふ。其像の賣行の露西亞に於て最も大なるは蓋之れが爲めなり。而して彼は一敗セント、ヘレナの流竄の身と爲りたるも、彼等は其死を信ぜず、ナポレオンは其島を逃れて西比利亞のバイカル湖畔に潛伏し、他日再び現はれ出でゝ惡魔の世を退治すべしと思へり。

上來記したる如き迷信は實に一笑に附するの外なきものにして、其の頑冥は唯だ驚くに堪へたりと雖も、是れ畢竟文化猶幼稚にして萬事宗教的氣風を脫せざるに因るものにして、且亞米利加合衆國の如き文明國に於てすら、之に似たるの事實を發見することなきに非ず。吾人は敢て深く彼等を責むること能はざるなり。加之世人は往々彼等の外觀を見て、卑屈冷淡、蠢爾として能く爲すあるに足らざるの民なりと速了するものあるも、此の「別派」の運動を見る時は、吾人は其の如何に心を拄げず所信を屈せず、深く強く其の操守を維持して一種の特色特性を爲せるやを認めざるを得ざるなり。而して此の堅忍不拔の精力は他日之を利導して他の目

的に用ゐんには、果して如何なる大結果を生すべきや、未だ容易に測る可らざるものあり。吾人決して其未來を輕視すること能はざるなり。

第四章

「別派」信徒の數。之を知るの困難。假粧せる別派信徒。俗間に勢力ある事。「別派」の配置。大露西亞人間に最も多し。開拓者としての「舊信家」。「別派」の勢力あるは信徒の多きか爲めのみに非ず。「舊信家」の道德上の長所。其の財力に富む事。其原因。

彼等の教育

所謂「別派」に屬する者は幾人ありやとは第一に起る問題なるが、此點に於ては正確なる統計を得難きに因り、何人も之を明知するに由なし。政府の報告に依れば其數百五十萬に達せざるが如きも、是れ大に事實とは異るものにして、或人は之を五六倍せば稍實際に近からんと云ひ、又或人は千五百萬を下らざるべしと云へり。

蓋表面人目を避けて秘密に「別派」に屬するもの多きに由り、到底之を確知することは能はざるも、教會にて聖式を受くる者と受けざる者とを調査することあるに因り、之を見る時は稍參考となるべし。而して此調査の結果分派に屬する者は九百萬乃至一千萬人なるべしと云ふ。但是れは千八百六十年頃の事なるに因り、今日には於ては其數更に增加せるべし。且表面教會に於て聖式を受けながら、衰心異派に屬して別に窃に自流の式を行へる者あり。是れ所謂穩和派(non-resistants反對せざる人の義)と稱せらるゝ者にして、其數も少なからざるべけれは、結局異派の信徒は先づ一千二百萬乃至一千五百萬より少なからざるものと見て可なるべし。而して其中半數は夫の「有僧派」に屬し他の一半は「無僧派」及其他に屬すべし。但總人數の明かならざるが如く、派の數も確知し難しと知るべし。

然れども「別派」の勢力あるは敢て數の多少に因るに非ざるなり。其力は實に其の民間に深き同情を有するに在り。即ち官許教會を脫せざる者も其心中に於ては「舊信家」を尊敬し、却て正教派の信者よりも眞正なる耶蘇教徒なりと思ふ者あり。是れ全く別派が純粹に人民間の風俗思想の產物にして、之を權化せるに外ならざ

るに由るなり。されば名は官許教會に屬しながら、窃に心を分派に寄せ、暗々裡に其の味方となる者世に少からず。故に若し信仰の自由を許して何人も公然「別派」に入るとを得るに至らば、官許教會は或は其信徒の一半を失ふやも測り難きなり。別派信徒の配置は如何にと云ふに、莫斯科は勿論其の中心にして、地方の農民即ちノヴゴロッドの舊殖民者及ウラルの坑夫西比利亞の移民幷に東北のコサック人間に最も盛なり。是れ明かに其の露西亞人中の精粹たる大露西亞人に屬するとを示すものなり。或は小露西亞、白露西亞、波蘭又はリヴォニヤ等に於ても其信徒を發見すと雖も、元を質せば皆大露西亞の移民たるものなり。而して有僧無僧の二派とも能く並ひ行はると雖も、概して中央及東南地方に於ては有僧派多きを占め、無僧派は北部地方に多數の信徒を有せり。而して此等舊信家が邊僻の地方に蔓延せるは、畢竟其地方には舊習古俗の存するもの多く、且中央政府に遠ざかりて結社の便利大なるに因るなり。且今一つの事情と云ふは、土地の非常に廣くして教會の數の不足なることなり。例へばアークエンジェル州の如きは其の廣袤佛蘭西と伊多利とを合したるに同じく、又ヴォログダ及ペルム州の如きは英蘭土或は匈我利と相等し。斯く北部諸州は非常に廣くして而も少數の人口之に散在し、教會は遠く相離るゝに因り、之に往復すること頗る不便なり。是に於て假りに小禮拜所を設けて村民等自ら僧侶に代り聖式を行ふの必要あり。是れ別派の發生を助くる者にして、又北部に無僧派の多き所以なり。

「別派」の信徒が莫斯科を中心として北部及東南地方に蔓延せるを見る時は、自ら其の露國殖民事業の開拓者となりたるの事實を悟ること容易なるべし。實に彼等の夫の英國のピュリタン派と同じく、鄉土を去て遠く北方の森林又は東南の廣野中に自由の生活を求め、或は波蘭及ペルチック沿岸諸州にも移住し、其の任意に出てたると強制せられたるとを問はず、皆知らず識らず新領土の開拓者となり、露國膨脹の幇助者と爲りたり。是亦注意すべき價値あるものなり。

別派の勢力あるは數の多少に因らずして民間に同情を寄する者の多きに因るとは上にも之を說き、しかも實に「別派」は廣く下層社會に行渡り、其の信徒と云ふは凡て農夫職人及商人の類にして、貴族は一人もなし(コサック人間に貴族にして舊信家なる者數家あり、是れ唯一の例外なるべし)。而して露西亞に於ては彼得大帝の改

革以來上下の社會は全く思想感情を異にする別種の國民を爲せるに因り、「別派」は露西亞帝國の一半を割て自家の版圖とすと云ふも敢て過言に非ず。是れ實に其勢力の蟠る所なり。

且「舊信家」は勢力の二要素を有せり。即ち道德と富と是れなり。蓋「舊信家」は謹直誠實にして且最も勤儉なりとは人々の稱ふる所なるが、實に家業に勤勉にして且身を持するに謹直なるは其の特色なり。稅を納むるにも「舊信家」は最も怠慢ならずと云へり。而して斯く道德上に於て其の長する所あるは、或は其教規に於て或る娛樂奢侈の類を禁じ、從て不德に陷るの弊少なからしむるに因るべしと雖も、更に又教規に無關係なる二原因あり。一は露西亞特有にして一は何處にも通ずる者なり。即ち第一は「別派」は元來民間良心の反抗の結果なるに因り、之に屬する者は最も心得能く、且つ最も其社會の思想道德と一致するの思想を懷ける者なりしこと是れなり。第二は其の官許教會と相並で不如意の地位に立てることと是れなり。益多數得意は腐敗の源にして、少數失意は熱心を生み、且つ道德堅固ならしむるとは、世界人情の常とするところなり。次に又其富に於て長ずるは、或は教規の爲めに喫煙せず、且酒を飲むこと稀なるに因り、從て費用を節するを得るに因るべしと雖も、更に又其の社會上不如意の地位に在て、國家の公事に與かるに由なきが爲めに、自ら心を私營の事業に轉じ、即ち商業を專らとするに至りたるに基くこと、敢て鮮なきに非るべし。是れ猶太人と云ひ、アルメニヤ人と云ひ、パーシー人と云ひ、歷々其の證左を示す所なり。唯だ露西亞の「別派」は其の歷史猶短く、且其の信徒の區域極めて廣くして、未だ俄かに猶太人等を論ずると同一の論法を之に用ふると能はざるも、兎に角大露西亞人の實學實利的性質が、境遇の不如意の爲めに益刺激皷舞せられたるや疑なきなり。斯くて彼等は大に羽翼を實業界に伸し、現に實業取引の中心たる莫斯科府の壯大なる邸宅及大製造所等にして、舊信家に屬する者少なからず。又ペルム州及ウラル地方の鑛山業にも彼等は大に關係せり。特にニッジニ、ゴロッド州のセミオノフ地方の如きは、全く「舊信家」の獨占に歸し、其地方に於て職業を得んと欲する職人及農夫等は先づ「別派」に改宗するの必要を感ずる程なり。而して此の如き地方は其の他にも無きに非るなり。要するに彼等は多年迫害の中に生活したる結果として頗る團結の精神に富み、相依り相助けて宛も

一種の組合の如き姿を爲せり。是れ其事業の成功する所以にして、其の貯へ得たる財力は正に彼等をして有力ならしむるの大武器たり。而して「舊信家」が斯く實業界に有力なるを見、事業經營の便利を得るが爲めに、「舊信」の假面を被て其の群中に投じ來る山師連もなきに非ず。又眞實「舊信」を懷くの故を以て此派に屬したる人の中にも、今は唯だ商業上の便利を失はざるが爲めに、依然として舊式を守れる者なきに非ず。即ち「舊信」の意氣旺盛なる献身的時代は去て實利的時代とは爲れるなり。

然れども「舊信家」は財を積むの法を知ると共に、又之を散するの法をも知れり。或は學校を設け或は慈善事業を助くるの點に於て、彼等は敢て正教派の商人に讓らざるなり。特に奇なるは西歐の輸入物に全然反對したる古露西亞人の子孫たる彼等が今や却て西歐美術の愛玩者と爲り、之を以て滿室を粧飾せる事なり。是れ予が曾て莫斯科の富豪舊信家の邸に於ても實見したる所にして、蓋富の度の進むと共に近世の文明的生活に近くに至るは自然の勢なるべし。されば子は父より も、孫は子よりも、次第〳〵に「別派」の舊風を去て西歐の文明流に移り、既に莫斯科舊信家の子弟にして煙草を喫ひ髯を剃り舞踏を學ひ或は劇場に出入する者あり。而して有形の變化は無形の變化の源と爲り、先つ「別派」の社會上の境遇を救ひたるの富力は、更に又其の智識上の進歩を促すなるべし。果して然らば一時彼等をして強からしむるの原因となりたる財力は、却て其の薄弱を來すの種となり、別派の教理及主義を倒すに至るべし。夫れ人は無代價にして富を得る能はず、「別派」は當に富の爲めに活力を減し、若くは枯死せざるを得ざるべきなり。

勿論斯かる結果の生ずるは遠き未來の事なるべし。教育の進歩は富の進歩に後るゝこと頗る大なればなり。されば「別派」の人は正教派の人よりも無學なりと云ふには非ず。初等教育は實に彼等の重んじたる所にして、讀み書きは其の能く修めたる所なり。然れども遺憾にも其書たるやビザンス傳來の古經にして、且其語たるや古スラヴの死語たり。古語の古書、是れ到底進歩の資たるべきものに非ず。彼等の智識が猶未た蒙昧の狀態を脱せざるは蓋亦已むを得ざるなり。又近來學校の制度く布かれて、教育の普及は刮目して見るに足る者あるが如きも、其實學校教育特に初等の教育は極めて淺薄なるの常なるに因り、却て誤を傳ふるの

恐あり。即ち之あるが爲めに社會主義的夢想と革命的異論を矯正すること能はざるが如く、又俗間の怪げなる宗教的空想を治することもなきなり。而も猶彼等にして其子弟を世の中學及大學等に送りて修學せしめんには、自ら其智識を開發するに至るべきも飽迄古スラヴ語を愛して羅典語並に古典の學を好まざる彼等は敢て之を爲さゞるに因り、依然として眞教育眞智識の門外漢たるを免れざるなり。（註。千八百八十七年の調査に於て聖彼得堡大學の學生二千五百二十三人の中、別派に屬する者は僅に四名なりしと云ふ。）

第五章

「別派」中の主なる派の組織。有僧派。「別派」の諸團躰は先づ始め遯世的殖民を爲したる事。「莫斯科墓地」が大本山と爲りたる次第。「舊信家」が獨立の僧職制を得んと欲したる事。「ビエロクリニッア」の新大僧正及其の任命せる僧正。其分裂別派信徒を國教に復歸せしめんとする政府の盡力。舊式を行ふ事を彼等に許せり。連合の妨害物

露西亞の「別派」は敢て整然たる團躰組織を爲さずして、宛も流動躰に似たる有樣を呈せしが、然し露西亞人は元來共同團躰の精神に富み、自から首長を選で其下に自治の生活を營むの風あると、嘗て村團制を說くの章に於ても示したる如くなるに因り、大抵の派は能く團結して相集まれり。而して其派の數は前世紀にドミトリなる僧正の算へたる所に據れば、二百ありと云ふ。其後或は亡び或は興り、宛も水面の泡沫が一起一滅常ならざるに異ならずと雖も、思ふに今日の現數も亦敢てドミトリの所算と大差なかるべし。然し茲に注意すべきは派と二は必ずしも異れる主義禮拜法を代表するに非ざることなり。別に適當の文字なき故に暫く派（セクト）なる字を用ふと雖も、彼等が「別派」中の諸團躰を呼ぶ其原語は分離の意味を少しも含まずして、却て聯合協同社團等の意味あり、(sogtassie 之を直譯すれば一致の義なり、村團の原語も同じく此意味なるは嘗て說きたる所なり)。されば「舊信家」中の派なる者は一種の精神上の組合又は社團にして、必ずしも主義儀式を異にするが爲めに相分れて旗幟を別にすると云ふに非ず、唯だ同習同慣相集て相倚り相助くるもの

なり。而して是れやがて其の民間に勢力を有する所以なるは吾人の度々說きたるが如し。

「別派」の二大分派中「有僧派」は容易に教會組織を成し、正教派の教條内に止まりて多くの分派に分かるゝことなきを得たり。然れども、僧侶を任命すべき僧正を有せざるに因り、餘儀なく官許教會の脫走僧を迎へさるを得ざりしなり。是れ彼等が「脫走僧の社團」なる異名を受けたる所以なり。而して此等の僧は官許教會より逐はれたるか若くは慾の爲めに「別派」に投じ來りたる者なるに因り、給料は可なりの額を與へられたるも稍輕蔑の意を以て待遇せられ、云はゞ一季半季の雇人と異らざりしなり。而して教會を管理指揮するは俗人即ち信徒中の長老にして、僧は少しも實權なし。此點は有僧派も無僧派も同一にして、少なくも僧侶派が自家の僧正を得るに至る迄然りしなり。

有僧無僧の別なく「別派」の第一の宗教的中心は遯世的殖民地(Skit)なりしなり。即ち彼等は森林の奥に或は露西亞國境外に世を避けて殖民するや、同類の信徒は躍を追ふて其の周圍に集り、自から新部落を開けり。例へば、有僧派の本城は多年波蘭領のヴェトカ(モヒレフ州)に在りしが、其僧庵には三千の庵僧居たりと云ふ。然るに露西亞兵は二回國境を越へ來て之に解散を命じ、且其の周圍に集り居たる農民を連れ歸るや、スタロ、ヂユーブは直に之に代て第二のヴェトカと爲れり。而して此等の遯世的殖民は能く開墾し能く生產の發達を助くるに因り、政府も終には之を寛大に取扱ひ、時としては保護をすら加へたり。然れども十九世紀には其取締十八世紀よりも嚴重と爲り、最も有名なる遯世的殖民地はニコラス一世の時に亡ぼされたり。此等の中には眞實一小市を爲せしものも少なからず、例へばコマロフの如きは男女二千人の住民を有したりと云ふ。而してケルヴェチッツ河畔の諸殖民地に對しては、ニコラスは晉に其廢止を命じたるのみならず、更に之を燒拂へり、實に千八百五十年頃の事なり。然れども其地より逐はれたる尼は敢て之に屈せずして、他の地方に庵を構へ、多數信女の仰ぐ所と爲れり。

今日に於ても露西亞特に其の北部及東部には此種の法律上許されざる遯世的殖民頗る多し。而して其の新設せらるゝ者常に絕えず、就中女子の爲めに起さるゝ者多し。女子の爲めに設けらるゝ家は之を「住家」と稱し、多數の尼及信女之に集へ

り。而して其の盛なるは蓋彼等が神聖なる生活を營まんと欲するに因るは固よりなるも、元來同胞相集りて勞働を共にし、選出の主長の下に共同の生活を爲すは、其の先天的に嗜好する所なり。此等の「住家」の女子は舊式に從て禮拜を行ふの外、讀み書きを學ぶは固より、縫箔針仕事を專業とせり。されば莫斯科の大商人にして其女を之に送りて教育を受けしむるとあり。「別派」の本營は「無僧」「有僧」とも今日は莫斯科に在り。彼等は同時に案外の事よりして政府の許可を受け、此目的を達するを得しが、其次第はキヤサリン二世の時莫斯科に疫病流行し、死人非常に多して人々宗教心を呼び起され居たる其際、兼々企業心に富める「別派」の徒は自費を以て同信徒の爲めに病院並に墓地を設けんことを請願したるに、政府は之を許可したり、實に千七百七十一年なり。許可を受くるや有僧派はロゴヲスキーに無僧派はプレチプラヴエンスキーに直に大建築を起せり、是れ實に爾來其の本營となりたる所なり。蓋彼等は一小設計を以て甘んずる者に非ざるに據り、莫斯科近郊にして從來荒地なりし處に大墓地を設け、壁を以て之を圍み、其中に病院僧庵教會等一切の設備を爲せり。政府も始めは期くとは豫期せざりしならんも、死者を悼み

病人を憐むの心は自ら寛大の處置を取らしむるの媒介と爲り、終に首尾能く之を成し遂げて、其の周圍には別派信徒の住まへる多くの人家工場等も現はるゝに至れり。且「莫斯科墓地」の創立者は政府より一種の權利狀を得、獨立の管理を許さるゝとせり。即ち是れ國家の認可を得て、帝國首府の門外に公々然看板を掲げたるものにして、「別派」の歴史に一新紀元を開けりと謂ふも敢て不可なきなり。

偖て此兩「墓地」の勢力は次第に強大と爲り、啻に宗教上に於て全國の總本山となりたるのみならず、更に彼等の實際的商業的天才は之を化して諸種の事業取引の中心と爲すに至れり。且各地の浪人脱走者等は潛に身を其中に投じ、以て自ら一種の暗窟を造り出せり。されば此の暗黑裡の別社會に對し非難の矢を放つ人もありたるも、先づキヤサリン二世及アレキサンドル一世の代は無事に經過したり。然るにニコラス一世の時に至り、取調の結果其基本財産は沒收せられ、建築物は差押へられ、政府派遣の吏員は其病院の管理を掌り、教會の法務は宗務院派遣の僧侶に因て行はるゝことゝなれり。即ち是れ創立後五十年にして其の彼等の運動に一大打擊を加へたるは固よりなり。而してロゴヲスキー即ち有僧派の「墓地」に於

ては、宗務院派遣の僧を、仰ぐを欲せざるに因り、結局有僧派の本山にありながら却て無僧派の寺に似たるが如き有様となれり。

有僧派は其の分離後二百年にして始めて自派の僧正を得、官許教會の外に純粋に獨立するを得たりしが、其の此に至りたる次第は頗る面白し。抑もアレキサンドル二世の帝位に上るや、當時の革命家は多數人民を味方に引入るゝの必要を感じ、之を爲すには「別派」と結托するの得策なるを悟り、如何にかして其の歓心を求めて共に手を握らんと欲したり。斯くて倫動に本營を有せる露西亞革命家及波蘭に脱走移住せる革命家は、各手を盡して「別派」の徒を手に入れんとし、先づ在倫動の革命家は特に「別派」の利益を圖るが爲の新聞を發行し、或は密使を本國に送り、或は倫動にて「舊新」の代表者を歓待し、其領袖中には彼等の歓心を買ふが爲めに、故爲らに其の面前に於ては喫煙するを避けたるもありと云ふ。然れども二派の主義は非常に相異れるに因り、其の爲めに何等の効果をも生ずる能はざりしが、在波蘭の革命家は更に大規模の方法に出でたり。即ち波蘭の移民は本國以外の地に「別派」の本山を起さしめ、以て之と連絡を圖らんと企てたり。而して「別派」中有僧派は其の主義より云ふも其の土耳古及墺地利に殖民を有するの事實より云ふも、此計畫に好都合なりしが、然し之を爲すには先づ第一に法王若くは大管長の如き首長を設けて、其の團体の統一を堅固にせざる可らず。蓋有僧派は多年一人の僧正をも有せず、且到底之を本國に於て得ると能はざるに因り、窃にシリヤ土耳古等の舊都市に於て舊信を本ずるの人はなきやと頻りに探求し居たり。而して探求の功容易に奏し難きに窮し、終に墺地利及土耳古に移住せる「別派」信者は先きのボスニヤの僧正にしてコンスタンチノープル大管長の爲めに免ぜられたるアムブロースなる希臘僧を迎ふるとに決したり。斯くてアムブロースは千八百四十六年異派の中央大僧正としてブコウイナの「別派」の一寺院「ピーロクリニツア」に坐を占めたり。一時「別派」の領袖等はヘルツエンと商議の際之を英國に移さんと思ひたるとあるもピーロクリニツアは地理並に人種上に於て頗る好地位なるに因り、新運動の中心たるには最も適せしなり。而して墺地利は之を保護せんとし、露西亞は之を倒さんとし、二國勢力の消長と共に此新大僧正は幾度か寺より逐はれ或は呼返へされ、又幽囚せられては再び放免せらるゝ等の變化を經たる後、遂には其地位動す可

らざるものとなれり。是に於て在埃在土の舊信家は一般に之を認めて首長と爲すや、露西亞の同信者も之を歡迎し(多少の異論者はありたるも)、ロゴヅスキー墓地の長老會は公然之を承認せり。

新中央大僧正の權威一度承認せらるゝや、舊信家は直ちに各種の僧職を制定したり。即ち此の名もなき出來上りの僧は曖昧なるブコヴィナの寺院より、ニコラス皇帝の支配國を幾多の宗區に分ち、其の僧正を任命し、宛も往時羅馬法王パイアス九世が英國に對して爲したるが如き事を爲せり。而して此等別派の僧正は時としては商人に身を扮し、同類の外は何人も之を知るを得ざらしめたり。尤も此秘密運動が「別派」の金力と警察の腐敗とに負ふ所大なるは固よりなり。而して「ピーロクリニッア」は愈々其大本山と爲りて、露西亞全國よりの淨財は之に集り、一朝にして羅馬府の加特力教徒に於けるが如きものとなれり。

露西亞の如き政府特にニコラスの如き皇帝の下の政府が、國境外一歩の所に於て、斯かる大勢力の起りたるを見て不快の念に堪へざりしは固よりなり。或人士は眞實之を以て露國の隱憂と爲し、一朝埃國と事あるの時大僧正自ら軍頭に立て東道の主たるに至らば、果して如何ぞやと說く者ありたり。然れとも其の杞憂に過ぎざるはクリミヤ戰爭の場合に證明せられたり。蓋煽動家の爲めに欺かれて、神聖なる露西亞の敵たる異人に味方するが如きは、舊信家の敢て爲さゝる所なり。

尋てアレキサンドル二世の帝位に上ぼるや、舊信家の輩は一般の國民と共に大に之を喜び、洋々たる希望を以て之を迎へ、ロゴヅスキー墓地の長老等は、窃に大僧正を露西亞に迎へ、即ち「ピエロクリニッア」の大僧正は身に假粧を施し、僞造の旅行券を用ゐ、窃に莫斯科に赴けり、時に千八百六十三年の始なり。是に於て全國の總會を莫斯科の門外に於て開きしが、之に列りたる商人庵僧及寺僧等は新宗制を議し、愈〻一個儼然たる制度を爲すに至らんとせしが、偶〻議論の大衝突を生せり。其次第は從來俗人にして教會を管理支配したりし者は、自派の僧侶の新設以來は、先きに之を官許教會より盜み來りし時一の如くに權力を振ふと能はざるを遺憾とし、窃に不平の念を懷ける其一方に於て、同總會が又僧侶の任命前之を指名するの權をロゴヅスキーの會議に握らんとを決するや、權力を分つに吝なる新大僧正は之に反對の意を表したり。是に於て議論紛出、大分裂と爲るの勢を示したるに、偶然に

も其時波蘭の一揆蜂起し(千八百六十三年)之が爲めに議論の爭は立消と爲れり。即ち當時全國の人心は非常に沸騰し、其の愛國心は高潮の極に達するや、舊信家も爲めに大に動かされ、其の愛國の至誠と國敵との無關係とを表示する爲め、莫斯科の商人は書を政府に上りて外國生れの大僧正を送り返へし且「ピーロクリニツア」との交通を一時遮斷すべしと宣言し、且之を實行せり。加之ロゴシスキーの人々は之を以て甘んぜず、更に檄を天下の同信徒に飛ばし、有僧派の舊信家は信條に於ては希露教會と全然一致し、同一の神と同一の基督を禮拜し、夫の無僧派の徒よりも遙に希露教會に近し」と宣言し、且革命家を宗教及故國の敵として非難し、官許教會と舊信家の教會とは其根本の信條一致せるに因り、共に手を携へて進むを得べしとの語を以て之を結べり。教會及國家を破門したる「別派」の子孫より斯かる宣言を開かんとは、實に意外に堪へざる所なりと雖も、抑亦時勢の進歩を示すものなり。而して無僧派に於ては此檄文を是認すると否認するとの二派を生じたり。概して別派中思想の進歩せる領袖等は狹隘なる解釋に拘泥せざりしも、多數の頑迷者流は依然として小問題の爲めに爭ひ、千八百六十八年に「ピーロクリニツア」に開かれたる會議も議論紛々遂に達識の士をして袖を拂ふて去らしむるに終れり。此時以後有僧派の舊信家は三派に分れたり。第一は墺地利制の僧職を全然排斥し、從前通り官許教會より盜みたるの僧を以て甘んずる者、第二は新宗制を是認し且右の千八百六十二年の檄文を奉する者、第三は新宗制は之を是認するも檄文は之を排斥する者なり。此中第二第三兩派の爭は最も烈くして、同一市中故らに軒を並べて相競爭せる所あり。而して有僧派の內訌は、無僧派の利益となり、往日は前者多數を占めしに今や次第に後者優勢と爲るに至りたるは蓋當然の勢なり。且ニコラス及アレキサンドル二世の時には舊信家は窮屈なる束縛の下に在り、僧侶は其信徒の集合に臨むに唯だ秘密に且假粧を帶びて始めて之を爲すを得るの有樣なりしに因り敢て喋々小議論を爭ふの餘暇なかりしも、アレキサンドル三世が稍寛大に之を取扱ふに及び、彼等僧侶輩は却て議論に時を消し、同僧內の競爭を盛ならしめり。

露西亞教會は舊信家中に分裂を生ぜるを見、此機に乘じて「別派」を倒し、其信徒を復歸せしめんと欲したるも、是れ到底多少の讓與を爲さゝる以上は實行し難きに因

り、先づ宗務院は千六百六十七年の宗會が「舊式家」に對して下したる破門の宣言を取消せり。加之宗務院は千八百八十六年に正教會は敢て一概に舊式を非難したるに非ずして唯だ其異端的解釋を含める限りに於て之を排斥したると、又同教會が防壓に努めたるは異端信徒の反逆即ち基督所設の宗制に對する悖戻に外ならざりしとを公然布告せり。是れ明かに「別派」の徒を導て正教會に復らしめんとの意に出でたるなり。蓋二派の間を融和して舊時の有樣に歸せしめんとは、多年來識者の計畫したる所にして、特に千八百年中央大管長プラトの盡力に因り、宗務院が舊式に依て法務を行ふの僧を任命するを許し(之を「連合教會」と云ふ)たる如きは、最も用意の深きを見るに足ると雖、既に久しく爭鬪に爭鬪を重ね來りたる「別派」は、自ら一種獨立の氣風を養成し、容易に旗を徹するを好まざるなり。加之政府目前の讓與は却て是れ人を欺くの好餌にして、他日如何なる處置に接するやも測り難しとの憂を懷かざるにも非ず。和解の行はるべくして行はれざる所以なり。

要するに和解の大妨害は彼等の自治獨立の天性が多年の分離の爲めに益〻養成發揮せられ、從來僧侶を選擧し居たる其習慣を廢して俄かに官吏同樣他人に任命せられたる僧侶を仰ぐが如きは、其の最も好まざる所なるに在り。實に今日に於ては分離當時の爭點即ち舊式に依て法務を行ふと云ふのみにては彼等は甘んぜざるなり。彼等は宗教上の自由獨立を得んと欲せるなり。されば彼等が今日現に唱道せる所は、靈俗二權の分離なり、教會の自治自由なり。夫の有僧派は現に僧侶制度を承認すと雖、敢て僧侶の手に萬事の支配を委ぬるを好まざるの一事は無僧派と異らざるなり。畢竟是れ古莫斯科傳來の特性にして、國民的平民的及共和的教會は舊信家の一般に理想とする所なり。されば別派と官許教會との連合を舊に復せんと欲せば、先づ後者を改良して之に自由の空氣を容れ、選擧の主義を採用せしめ、且併せて有形に無形に僧侶の標準を高くせざる可らず。蓋僧侶の標準の低きとは露西亞に於ても異派の發生を促すの一原因たるなり。

第六章

「無僧派」の組織及教義。教會組織を爲すの困難。其分派の多き

事。其保守にして且狹量なる事。遯世的殖民。無僧派は無政府的となるの恐あり。皇帝の爲めの祈禱。結婚。自由戀愛論。獨身論。セオドシャン派の說。男女の交は凡て不正。今日に於ても猶極端論を守れる宗派。「遍歷派」。世を棄つるは宗敎上の義務。此派の中の二種類即ち「巡禮者」及「施主」。他の極端なる宗派。「無言派」「否定派」及「非祈禱派」。「ラスコル」の最後の結論

無僧派に於ては敎會の組織を爲すと「別派」の諸分派中最も困難なり。是れ彼等は僧侶を用ゐざると共に正敎派の敎條以外に逸し去り、各個人銘々に新奇の考を逞ふするを得るの餘地を有すればなり。嘗てポスエは新敎諸派を評して「斷片の斷片」と稱せしが、無僧派の信徒は實に亦此の如きなり。而して分派は分派を生じて變化限りなきは其の本來の性質なるに因り、其の一定動かざるの時は即ち其の衰微の兆なりと知るべし。

無僧派は一名も敎職を有せざれども「長老」なる者ありて聖書を讀み洗禮を施し又時としては懺悔式を行へり。長老の爲す所は儘に之に止るが故に無僧派の法務は如何にも單純なりと雖も、然し禮拜の外容形式を排斥すると云ふには非ず。否彼等は非常に形式を重んじ或は「唱へ言」を誦し或は頭を俯する等の些細なる禮儀を行ふにも頗る密にして、斯々の場合には唱名幾百回すべしなどの規定すらあり。又彼等は煙草砂糖及或種類の肉(例へば兎の如し)を忌むの迷信を有すると有僧派よりも深し。

無僧派は今日に於ては合理主義(ラショナリズム)に走るの傾向ありと雖も、是れ近來の發達にして、多年彼等は舊例古式を貴ぶを以て其の特色とせり。而して其內輪の爭の如きも主として此形式論にして、例へは十字架に記する文字に就ても小六ケ敷議論ありたり。されば洗禮の行ひ方に關し種々の說ありて互に一致せず、又其他の聖式に付ては僧侶なきまゝに行はざるもあれば自流勝手の眞似事をなす者もある等、紛々として定まる所なきは敢て怪むに足らざるなり。

無僧派の徒の狹量保守的なると長く有僧派に異るとなかりしは、啻に其の禮拜の形式を爭ふが爲めなるのみならず、更に又「惡魔の世」一流の解釋法を以て萬事を觀察するに因れり。即ち彼等は自派以外の者特に「ナイコン派」の者と接するを以て

不淨なりとし、其の有力なる一派なる「セオドシアン派」は「不淨の輩」と飲食を共にするを肯ぜず。現に彼等が有僧派を忌むの一理由は、其の他の人民と同一の浴房に浴し同一の杯にて飲むと云ふに在りしなり。されば千七百五十一年「ヴェトカの宗會」に於て其の神學者の規定したる四十五箇條の規則なるものも、概ね皆不淨に接するを誡むるに非ざるはなし。又「セオドシアン派」の宗規中には市場にて買ひ求めたる食料品を用ふるには鍊め或儀式に依て之を淸むべしと定め、又赤色のシャツにて禮拜堂に入るを禁ぜり。今日にては稍合理主義に傾かんとせる彼等も、長く狹量偏屈なると此の如くなりしなり。

無僧派は寺院を有せざるも庵室を有せり。又男女とも遯世的殖民を爲して處々に中心點を作れると、夫の有僧派に就て述べたると同じ。而して元祖とも云ふべき最初の大殖民は北西の方オネガ湖畔に設けられたる者是れなり。其他其地方の大湖水と白海との間に跨て此派の殖民は散在し、何れも產業に勤勉なる自由共和部落を爲せり。其諸團隊の中「セオドシアン派」は部員の富裕なると敎規の嚴重なるとの爲めに最も勢力を占め、無僧派の牛耳を執れり。キヤサリン二世の時莫斯科に大疫病の流行したる際、其の市外に「プレオブラヲエンスキー墓地」を創設して無僧派の大本山と爲したるは實に此「セオドシアン派」にして、之を率ゐたるは莫斯科の商人コヴィリンなりしなり。コヴィリンは又墓地のを管理を獨立せしむるとを得たるも、次第に世人の嫌疑を受け、盜賊贋造者及亂行の魔窟と呼ばれ、攻擊の火の手は夫の有僧派の墓地「ロゴヲスキー」よりも烈しくなれり。斯くてニコラス帝の時に「ロゴヲスキー」同樣警察と官許僧侶との侵入を受け、病院內の別派信徒は遙に墓地內の敎會堂に於て宗務院任命の僧派が讃美歌を誦するを愁然として傳へ聞くに至れり。

無僧派は一方に於て僧侶及聖式を排斥する爲めに結婚の儀式亂れて不道德となり、又一方に於ては「惡魔の世」となれるを信ずる爲めに革命的無政府的となるの恐あり。是れ其の有僧派よりも社會の秩序及文明と容れ難き所以なり。試みに思へ、ナイコン及びアレキシス皇帝の時よりして露亞西は惡魔の支配に歸せりと信ずるの彼等に向ひ、如何なる從順忠節を望むを得べきや。天國の王の外には王あるなしと唱へ、惡魔の從僕の支配は斷じて之を受けずと主張するの彼等は、革命に

陷るの外なきに非ずや。即ち其主義の危險なる所以なりと雖も、然れども此の如き敎狂的激論は長く繼續すべきものに非ず。深夜耳を聳つるも天使の喇叭は遂に響かず、「裁判の日」も未だ容易に來るべくも思はれざるを見ては、彼等も自ら己に反り、「惡魔の世」なる語に新解釋を加ふるの必要に接せり。されば今日に於ては別派信徒にして皇帝を惡魔の權現と見做すものは極めて稀なり。

「別派」の敎規には危險なる分子を含むものあるに因り、政府は之をして皇帝に從ふの意を表せしむる爲め、儀式中に皇帝の爲めの祈禱を加ふると官許敎會の如くすべしと命じたり。蓋皇帝の爲めの祈禱は法務中大部分を占むるものにして、之を缺如に附するは露西亞人に取り實に奇怪至極の事たるなり。されど「別派」の徒は皇帝を呼ぶに「最も信心なる」又は「最も誠實なる皇帝」等のビザンチン流の定文句を以てするには反對せり。

此祈禱問題は十八世紀には無僧派の分裂を來すの一原因となりたり。即ち或者は之を行はんとし、或者は飽迄之に反對し、爲めに內輪の軋轢を生ぜり。然れども今日に於ては例の惡魔論を喋々する者も少なく、從て皇室に對して忠愛の情を表

すると有僧派の舊信家に劣らざるなり。

次に結婚論は又重大の問題なるが、無僧派中或者は獨身を主張し、或者は結婚は社會生存上の必要件なりとして依然之を行へり。概して穩和派は結婚を行へるも、其式を行ふべき僧侶を有せざるに因り、唯だ兩親の祈禱及び家族の面前にて十字架と聖書に接吻して誓を爲すに止まれり。又中には聖式としての結婚廢せられたる以上は、存する所は唯だ男女雙方の合意なるが故に、若し愛にして成立たば自由に結婚して可なりと唱へ、當今の自由戀愛論を主張し且實行せるものあり。蓋此等「非婚論者」中の大多數が反對する所は、男女の關係を離れ難き者と爲すに在り。即ち男女夫婦の緣を結ぶは可なるも、此緣を以て離れ難き者と爲すは畢竟人爲的束縛にして、戀愛の自由を害するものなり、故に結婚の式と云ふが如きは之を廢棄し、相愛する者は自由に相結ぶべしと云ふに在り。而して一部の人は此主義を以て新福音と爲し、是れ男女同權の道なり、是れ婦人の奴隷的境涯を救ふものなりと讃賞せり。

自由戀愛、是れ非婚論者の到達すべき結論なるが、さりとて何等の作法にも無頓着

なるに限れるに非ず。即ち或地方に於ては一種の儀式を行ふて其關係を鞏固にせり、例へば兩親の同意を受け、又之を世間に披露するが如し。或村落にては新に夫婦と爲りたる者は互に手を携へ、或は各ハンカチーフの一端を握りて市場を歩行するとあり。又離縁の時にも兩親親戚及朋友の面前にて其式を爲すとあり。而して此等自由合意の夫婦は風の向き次第直に離別するを得るものなれども、案外に睦しく世を送りて偕老同穴の契を完ふする者多しと云ふ。

然れども或派に於ては忽ちに合ひ忽ちに離るゝの弊害を極め、言語同斷の沙汰を聞くこと少なからず。特に市町に於ては家に婦人の必要なると村落の如くならず、勞働者は却て家族を以て煩累と爲すの有樣なるに因り、此弊最も盛なり。是れ實に酒煙草の類を節し且正直なりとの故を以て、普通の露西亞人よりも令聞ある別派信徒が特り男女間の事に關して他より不道德なりとの詆を受くる所以なり。且村落に於てすら父にして其女を誘ふて有らゆる不行狀を盡さしめ、以て利益を收めて得々たるものあり。思ふに彼等は男女間の關係を以て道德區域の外に屬すると爲せるならん。實に奇怪と謂はざるを得ざるなり。

然れども此自由戀愛よりも猶奇怪なるは、無僧派中最も峻嚴なる說を唱ふる者の教規なり。彼等は神學的觀念に加るに禁慾的思想を以てし、思へらく、結婚聖式の一度廢絕したる以上は、男女の交際は凡て不正にして、交接は不淨、結婚は醜事たりと。即ち無僧派中有力の地位を占る「セドオシアン派」は之を一個の箴言の形と爲して曰く、「既婚者は夫婦たるを止めよ、未婚者は夫婦となる勿れ」と。即ち未婚の男女が婚姻し、又既婚の男女が夫婦として生活するを禁じたるなり。又曰く「青年をして妻を持たざらしめよ、夫をして其權利を用ゐざらしめよ」曰く「處女をして結婚せざらしめよ、妻をして子を生まざらしめよ」と。斯くて此教を犯す者は或は之を破門し或は之に苦行を課したり。されば此嚴法を守ると能はざる者は窃に其罪跡を蔽はんと欲し、殺兒は「プレオブラジェンスキー墓地」に於ける流行の一犯罪となれり。聞く所に依れば此「墓地」に接せる池より多くの赤子の骨を發見せりと云ふ。斯かる慘絕の犯罪に陷らざらしめん爲め「セオドシアン派」は莫斯科及リガに大孤兒院を設立せり。又或教狂者は生きながら其の赤子を地中に埋めたりと云ふ。「セオドシアン派」の人は常に其の虛報なるを辯すと雖も、元來斯かる犯罪は其

教の間接の結果たり。其教に曰く「今日に於ては子供の懷胎したる時之に靈魂を與ふるは神に非ずして惡魔なり」と。其の生兒を殺すは自然の結果と謂ふべきなり。

然れども斯かる峻嚴窮屈なる教規は到底永久に保存實行せらるべき者に非ざるが故に、流石の「セオドシアン派」も次第に寛和と爲り、其説も徐々に變じ往日露西亞を化して一大僧庵と爲さしめんとしたる其人々の中に、今や家に「世話人」(Striapukha直譯すれば料理人)を置き妻帶の實を爲せるもあり。又子供に關しては、非婚派の人は孤兒院を擴張して之に自由に子を托するを得せしむるとせり。即ち結婚問題は未だ好都合に解釋せられずして一種の蓄妾の有樣と爲れりと雖も、兎に角に住時に比すれば一大變化を來せるや疑なし。實に今日の無僧派は先輩の唱へたる矯激なる教規を否認し、敢て之を口に上さず、唯だ其の教敵が其の變説を指摘攻擊するの材料として之れを擧ぐるとあるのみなり。

往事の無僧派が唱へたる奇怪矯激なる説は十九世紀の今日猶ほ「遍歷派」(Stranniki英語にてTramps)一名「走者」(Runners)即ち「巡禮者」と自稱する一派に依て株守せられ居れり。是れ脱走兵にして「セオドシアン派」の庵僧たりしエフィムが十八世紀の末に開きし所なり。而して惡魔は現に此世を支配せりとの信仰は此派の大主眼にして、近世の無僧派の變節を非常に擯斥し、惡魔の從僕の手の屆かざる森林の奥に隱遯せり。又其の率ずる格言は『汝の父と母とを棄て十字架を負ふて予に隨へ』との聖書の句にして、彼等は之を字義通りに解釋し、畑を棄て家族を棄てゝ遠く深林の中に隱れ、茫茫たる蒼天の星と相對して眠るを以て信者の本分と爲せり。蓋露西亞人は廣漠なる土地に住し長途の旅行を少しも意とせず、自ら天下を漂泊して游牧的生活を爲すを好むの風あるは嘗て吾人の説きたる所なれば、此「遍歷派」の如き特種の派の生じたるは決して偶然に非ざるなり。此派の信者は北部の森林地方に多く、ヤロスラヴル州又其附近の地方は正に其中心たり、(此州は文字を讀むの力ある者最も多く、別派特に無僧派に屬する者最も多く、而して道德は最も卑くして、四人の處女中一名は必ず私生兒を有すとは奇と謂ふべし)。

「遍歷派」は世を去り社會を脱するの外かに救の道を有せざるに因り、家を棄て妻を棄て、子女を棄て、其の戸籍ある村圍を棄て、飄然として放浪の生活を營むなり。且

社會と縁を絶つの證として、彼は旅行券其他一切の證券を用ひず、是れ「眞正なる耶蘇教徒」となるに就ての第一の條件なり。旅行券の代りに「遍歷派」は其派の格言又は單に十字架若くは「此れはヨエルサレムにて妻書したる眞の旅行券なり」との文句を記せる紙片を携帶せり。又此派の男女は平等無差別の共產的社團を成し、互に兄弟と呼び姉妹と稱せり。且彼等は嚴に結婚を禁じ、寧ろ野合を以て可なりとせり。是れ結婚の罪は回復し難きも一時の野合は人力を以て贖罪するを得べしと信ずるに因るなり。然れども人情の弱點は容易に防ぎ難きに因り、到る處野合を恣にして多妻の實を爲せるもあり、或は大勢の婦人を引連れて漂泊的生活を爲すもあり。而して彼等は一定の生業を有せざるに因り、往々窃盜を働き、此世は惡魔の支配に歸せるに因り、社會に攻擊を加ふるは即ち地獄に對して爭ふものなりとの理由を以て常に之を辯護せり。

斯かる主義を悉く實行するは萬人に向て望む能はざるに因り、「遍歷派」は之を完全に行ふの人(所謂「巡禮者」或は「走者」)と、此世に止まりて稅を拂ひ且場合に依ては教會にも行くの人(所謂「在家者」(レヒヴレト))とに分てり。後者の本務と云ふは唯完全なる信徒を庇護し、之に潜伏所を與ふるに在り、故に又「施主」(ホスピタラー)の異名あり。

「遍歷派」の洗禮を受くるは唯だ前者のみなるが、偖て之を行ふには夜間山野の淋しき所に於てし、水は天水或は路外の沼の水を用ゐ、河水は「惡魔」の徒の爲めに汚れりとて之を用ひざるとあり。而して此洗禮を受けたる「巡禮者」は男女の別なく皆木椀匙及金屬製の神像を有せり。又彼等は教會若くは禮拜堂を有せず、法務を行ふには通常森林中に赴き、神像を木に懸けて之を爲せり。所謂「施主」は洗禮を受けざるも可なりと雖も、是れ唯だ延期するのみにして終には必ず之を受けて家を棄て妻子を棄てざる可らず。故に病氣危篤にして死期の迫りたる時は、之を林中或は或る淋しき處若くは少なくも他の何人かの家に連れ行き洗禮を受けしむるなり。「施主」の此世に在るや家には秘密室を設けて「巡禮者」の潜伏に供し、且種々の戸を設け置きて警官の捕縛を逃るゝの用意と爲せり。而して彼等は互に一種の符徽を有し、一見直ちに其の同派の徒なるを知り得るなり。斯く種々の用意整へるに因り、「巡禮者」は一枚の旅行券をも有せずして秘密に全國を遍歷するを得。破獄の罪人及其他の脫走者が「巡禮者」の風を裝ふて窃かに「施主」の好意に與らんとするとあ

るは之が爲めなり。

ニコラス皇帝の世は最も「遍歴者」の盛なりし時なり。蓋其の取締の嚴なるは却て此派の勢を助長したるなり。而して此派に入り來る者は如何なる徒なりやと云ふに、脫走僕農、西比利亞の脫走者及脫營兵(其の當時兵役の義務は二十年なりしに因り、入營は社會上の死亡と異ならざりしなり)は其の主なる者にして、夫の所謂無旅行券の浪人は其の無盡の源なりしなり。

東北地方にては遍歴者の捕縛せらるゝ者年々數百に達せしが、其際警官との間に起るは概ね左の如き問答なるべし。『旅行券を持つてるか』『持つてます』『見せよ』。是に於て巡禮者は紙片を差出すに、其面には「汝を迫害する者は自ら地獄に陷るの支度を爲せるなり」と云ふが如き文句あり。因て警官は尋ぬらく、『誰から此旅行券を貰つたのだ』『宇宙の主宰なる天國の王樣から』『では制規の旅行券を持たないな』『はい』『何故持つて居ないのだ』『警察で下ださる紙には惡魔の印が刷さつてるからです』『官用の紙の鷲印を云ふ』『牢に入りたいのだな』『どんな苦難も覺悟して居ます、拷問も怖はくはありませぬ、怖ろしい獸でも惡魔の手下の鬼でも怖はくはありませぬ』。傲頑不屈の風躰多くは此の類なり。

「遍歴」は今日も未だ其跡を絶たず。アレキサンドル二世の晩年老兵士にして脫營者なるニコノフと稱する男は、オロチッツの農民間に其派の敎を說き廻り、終に千八百七十八年三度目に捕縛せられたるとあり。彼は第一回には逃走し、第二回には農民の爲めに救ひ出されしが、第三回目には巡査は農夫等の仕事に出て行きたる跡を見澄まし、其の潛伏せる所を捕へたるなり。

斯かる極端の場合は今日は稀にして、此派の信徒の竟見も時と共に變遷し、今や稍合理主義に傾き、聖書に說く所を比喩的に解釋し、果ては禮拜の外形上の儀式類を排斥するの趣あり。而して此傾向の最も著しく極端に走れるは無僧派中の「無言派」及「否定派」等なるべし。

「無言派」(Mutes)は近年ベッサラビヤ、ヴォルガ下流又は西比利亞の地方に起りたる者にして、無言を第一の主義とするに因り其の詳細を知るに由なし。或人の傳ふる所に依ればキヤサリン二世の時西比利亞の知事ベステルは此派の徒を捕へ、或は沸騰せる蠟を其身躰に注ぎ、或は笞刑を加ふる等色々手を代へて拷問したるも、

遂に口を默して一言も發せざりしと云ふ。又千八百七十三年アレキサンドル二世の時此派の男女にして無言の儘サラトフの裁判所より西比利亞に送られたる者ありたり。

「否定派」(Deniers)の主張する所は、稍明なり。即ち彼等はナイコン及僧侶排斥の時より以後は、此世に神聖なる者一も存するなしと說き、禮拜の外形上の儀式を一切斥け、聖式も神像(アイコン)も無用の長物として之を棄て、唯直接に救世者と接せんとするなり。

無僧派中に潛める否定の精神は、非祈禱派(Non-prayers)最も明かに之れを示せり。蓋「別派」は此に至て議論の順序を廻り盡して始めの出發點に返へれるなり。此の「非祈禱派」の開山はザィミンと稱するコサック人にして千八百三十七年捕縛せられたり。其說に依れば、今の此世は惡魔の世にして眞正なる禮拜法は廢絕に歸したるに因り、救を得るには有形の儀式に依るも無効なり。神を禮拜するには唯だ精神を以てすべし。口に誦するの祈禱は最早神意を喜ばすに足らず、祈禱書の文句は最早神の目には無價値なり。唯だ心より來り精神より發するの祈禱にして始めて神意に合するを得べし。知らずや、在天の父は之を訴へざるも尙ほ吾等の欲する所如何を知り給へるとを。斯くて此主義を極端に論じ詰め、祭を斥け、斷食を斥け、聖骨神像乃至十字架をも斥け、一心以て救を得べしと說けり。されば此派の徒は洗禮式をも他の聖式と同樣に斥け去り、結婚を行ふにも男女雙方及兩親の合意あれは可なりとて祈禱を爲さず儀式を行はず。又塵より出でたるの此肉躰は單に塵に復歸せしめて可なりとて、埋葬の儀式をも非難せり。

「非祈禱派」は精神的に禮拜を行ふべしと云ふ其主義を擴張して、耶蘇教の信條及聖書中の記事を解釋するにも精神的筆法を用ゐ、基督の誕生死亡復活は比喩なりとし、「聖女メーリー」は「德」の事なり、救世主の再來最終の裁判及死者の復活の如きも字義通りに解釋すべき者に非ず、其事は平常日に此世に於て起れるものなりと說けり。又或人の說に依れば、彼等は靈魂の不滅を否定し、死後は空寂に歸すと信ずるにも至れりと云ふ。

奇なる哉「別派」の議論は遂に此極度に到達せり。二世紀以上の間前後左右各種の枝を生じたる其の果てに伸び出でたるは合理主義(ラショナリズム)なり。殉教者の血を以て培養せられたる其幹の最後最大の花は自然神教(deism)なり。迷信より起り形式に拘泥

するより起りたる其派は終に理論一片の派となれり。蓋彼等の進化の第一の起點は惡魔が現に此世を支配すと信じたるに在り。即ち此信條は始には字義通りに解釋せられたるも、後には比喩的に之を見、更に其精神的解釋を種々の信條にも應用し、以て新生面を開くに至りたるなり。勿論「別派」は未だ悉く合理主義となれりと云ふには非ざるも、此傾向は全般に著しくして、啻に「非祈禱派」のみに止まらざるなり、啻に「無僧派」のみに止まらざるなり。現に今日に於ては、多年尊重せられたる「舊信家」及「舊式家」等の名を避けて、單に「耶蘇教徒」と自稱する者少なからず。又往時官許教會より加へられたるの非難即ち宗教を化して儀式の塊たらしむとの非難を、逆に投げ返へさんとする者少なからず。是れ要するに時勢の變にして、内に欝勃たる此新潮流は遂に迷信の舊壘を壞ち去らずんば止まざるべきなり。

第七章

「別派」に無關係なる宗派。其二大別。「神秘派」。「神秘派」の一般の特色。豫言及權現を信ずる事。神秘派中の分派。「苦行派」。苦行派の主義及傳說。其儀式。其信徒の社會の上下に多き事。

「跳踊派」。猥褻なる儀式。所謂「聖愛」。殘忍なる儀式

ナイコンの祈禱書改正の結果として生じたる異派は前章に說きたる如くなるが、然れども是れ未だ露西亞國教背反者の一圣躰を盡せるに非ずして、僅に其の上層たるに過ぎず。有僧派及無僧派より成れる「ラスコル」の下にナイコンの改革に無關係なる幾多の異宗派あり。而して此等は敢て官許教會に反對して起りたるに非らず。耶蘇教全躰を敵とせざるのみ。先づ東方正教の敵として現はれたるものなり。

此等の異宗派は其數複雜にして且互に相反對する所ありと雖も、十七世紀の「ラスコル」とは反して儀式を輕んずるの點は皆一致せり。即ち彼等の信ずる耶蘇教は文字形式の教に非ずして、全く精神的の者なりとは、其の自稱する所なり。此點より見る時は彼等は前に說きたる非祈禱派等と同一部類に屬するが如し。而して其起源に至ては曖昧にして之を確知すると能はずと雖も、兎に角に其の露西亞の

國産に非ずして、其根の遙に外國より來れるは疑なきが如し。

彼等は儀式を輕じて精神を重ずるの點は皆同一なるも、其中想像に依賴する者と道理に依賴する者、換言すれば直覺的に救に入らんとする者と冷かなる推理冥想より叩き上げんとする者との二派あり。是れ神秘派(ミスチックス)と合理派(ラショナリスト)との二大別を生ずる所以にして、前者は古代の「ノスチシズム」に似、後者は近世の宗教革命派の主義と稍趣を同ふせり。蓋露西亞は頗る奇妙なる國にして、非常に古き者と非常に新き者とを並せ用ひ、十字軍又は羅馬帝政時代の宗教と近世の革命的新主義と共存せり。思ふに露西亞人は極端に走るの特性を有するに因り、自ら一方は古風の極に走り、一方は新奇の極に赴くとならん。

古風にして神秘的なりと云ふ其派に共通せる特色あり、即ち豫言者を信ずると是れなり、換言すれば靈感奇幻に依て直に神と感通するを得と信ずると是れなり。故に彼等に取ては今も尙ほ天啓の時代にして、一方に豫言者のあると共に、又神の權現も在る筈なり。されば こそ「吾は豫言者の稱へ居たる神にして、人類を救ふ爲めに再び降臨したるなり而して吾の外には神あるなし」(苦行派の權現の神なるダニエル、フィリッポヴィッチが其の十二誡の第一に擧げたる句)と宣言する者も現はれり。

神秘派中に二分派あり、一を「苦行派」(Flagellants)と云ひ、一を「去勢派」(Eunuchs)と云ふ。苦行派とは他人より與へたる異名にして、己れは「神の民」又は「兄弟姉妹の社團」と自稱せり。「苦行派」の第一主義は教理を文字に書き止めざるに在り。されば其の大豫言者にして又神の權現と稱せらるゝダニエル、フィリッポヴィッチは先づ其書をヴォルガ河に投じ、且其教を筆にする勿れと諭したり。此派の傳ふる所に依れば、眞正なる信仰の露西亞に現れたるは彼得大帝の時よりなりと云ふ。其次第は同帝の時に天父はヴラヂミル州のゴロヂン山に降り、人間に化して此世に現はれたりと云ふに在り。而して此の權現の神こそは即ちダニエル、フィリッポヴィッチなり。又ダニエルは其の昇天前百歲の老婦にアイヴアン、サスロフなる者を生ましめしが、是れ其の子にして、即ち基督なりと云へり。爾來基督は代々絶へず此世に現はれりとなり。且基督は一人に止まらずして一時に幾人もありと云ふ其次第は、抑も彼等の說に依れば、聖靈は各信者の上に降り、必ずしも一個の人に限らざ

るが故に、何人にても之を受くる時は即ち基督なりと云へり。又女子の豫言者の在るは固よりにして、之を「神母」と云ひ、又「女神」として尊稱せらるゝ者もあり。

最初の基督即ちアイヴァン、サスロフに付ては奇怪なる傳說あり。彼は十二の使徒を選び、オカ河畔ノ地方にて父の遺訓十二誡を說敎し居たるに、政府は之を捕縛して種々殘酷なる拷問に附したるも、一向其信條を自白せざるに因り、遂に之を磔刑に處したり。然るに彼は復活して再び說敎を始め、又捕へられて磔刑に處せられたり。今回は其の再び復活するとを妨げん爲め、其皮を一々剝ぎ棄てたるに、一婦人屍衣を取て遺骨を藏ふや、不思議にも其衣は忽ち化して皮となり、斯くて再び復活して昇天前長く生存布敎したりと云ふ。

彼等は斯かる傳說を信じ、其古跡を非常に神聖視せり。且一般には結婚を不淨と認めるにも拘らず、ダニエル並にアイヴァンの一家に限りては、神聖なる血統を絕へざらしむる爲めに之を許したり。而してスタロエ村のウラヤナ、ヴァッシリーフと稱する小女はダニエルの後裔なりとの故を以て彼等の尊信を博せしが、政府は之を捕へて或寺に幽せり、正にニコラス一世晩年の事なり。然るに神の子孫の

絕ふるや彼等は其の尊信の心を古跡靈所に轉じ、ダニエルの住みたりと云ふ莫斯科の或家は其の參詣所となり、スタロエ村は其のナザレとなれり。又此村には一の靈泉あり、聖餐のパンを焙るには必ず其水を用ひたり。尤も冬季水の氷結して運搬に便なる時に之を全國に頒ちたりと云ふ。

「苦行派」十二誡なる者は單に禁慾的訓誡なり。例へば飲酒を禁じ、饗宴及結婚の式に會するを禁し、僞誓を禁じ、窃盜を禁じ、結婚及交接を禁ずるが如し。斯くて其の青年男女が結婚するを禁じ、又既婚の男女は唯兄妹として生活すべしと命ずるの點は、夫の「無僧派」中の一派に酷似せり。又十二誡中には聖靈を信じ且秘密を守れよと命ずる二ヶ條あり。思ふに此の二ヶ條は此派の成功を助けたるに於て最も力あるべし。蓋「聖靈を信ぜよ」とは「靈感を信ぜよ、自己を信ぜよ夢想奇幻を信ぜよ」と云ふと同一にして、神秘的迷妄を是認するものなり。又何事をも秘密に附して之を他人に公示せざるは、即ち之に一種神秘的風貌を與へて幽趣無量ならしむるなり。秘密に關するダニエルの誡は左の如し、「此等の訓誡汝之を秘密にせよ、父にも示すと勿れ母にも示すと勿れ、身を鞭たるゝも火にて燒かるゝも、汝忍びて何事を

も語るを勿れ」。

此派の信徒が靈感に接せんと欲し、圓くなりて一種の舞踏を行ふ其の有樣は最も奇なり。其會は通常夜にして、男女とも白衣を被り、先つ頌歌を誦し、神ダニエル及び基督アイヴァンに對する祈禱を行ひ、次に其中の長なる者聖經中より數節を讀み、偖て其次に愈々舞踏となる。舞踏は始めには數人の信徒之を行へるも、次第に他の人々之に加はり、男子は中央に女子は外に、皆手を握り合ひて歌を誦みながら節を合して、回轉するなり。而して始めは徐々に廻はれるも、一舞一踏益々其歩を早めて、終には旋風の地を捲くが如き勢となる。偖て狂氣の如くに廻り〳〵て、愈々其極に達するや、踏舞の輪を解きて各々其靈感を求め、或は我知らず痙攣的動作を爲せるもあり、或は足にて地を踏み叩き、傲然として再び飛び上るもあり、或は室を躍り廻れるもあり、或は目を閉ぢて前の通りに獨り廻轉せるもあり、或は又一點を見詰めて凝然たるもあり。斯くて茫然として氣失せ神遠く、宛も氣息の絶へんとするや、即ち是れ靈感將に降らんとするなりとて、歡喜措く所を知らず。斯かる有樣なるが故に其舞踏の際は全く夢中にして、念頭一切外物の在るなし。されば或官人の語る所に依ばれ、彼等は巡査に闖入せられて捕縛の身となるも、猶之に氣付かざるとありと云ふ。

此の躍りの外に又時として棒を以て自己を鞭ち或は蠟燭の火にて自ら身を燒く、とあり。是れ肉を去て靈に就くの同一目的より出つるものにして、彼等に「苦行派」の異名あるは之が爲めなり。又彼等の中には奇幻の天より現はるゝを待たずして自ら作り出さんとするとあり。即ち大なる桶に水を滿たし、其の緣には多くの蠟燭を立て終夜其の周圍に舞踏し、以て基督が彩雲に駕して桶上に現るゝを拜せんとするなり。

「神の民」と自稱する此派の信徒は各市町村に小團隊を結べり、之を「コラブル」と云ふ、舟又は軸の義なり。而して各自男女の豫言者を有せり。又大抵は銘々に基督と女神とを有せり。

「有僧」「無僧」二派の舊信家は彼得大帝以來唯だ下級の人民に止まれるに、此の「苦行派」の如き神秘派は奇怪にも上下に通じて信徒を有し、商人も貴族も、露人も外國人も、俗人も出家も、一として之に加らざるとなし。特に庵僧尼及寺參りに熱心なる農

民の間に、其の主として蔓延したるは奇と謂ふべし。

女皇アーンの時には彼等が餘りに其派の古聖の聖骨を崇拜するに因り、其迷信を破る爲めに之を發堀して燒かしめたるとあり。又た其の信徒なるの故を以て死刑に處せられたる者もなきに非ざりしが、十九世紀に至りアレキサンドル二世及ニコラス一世の時にも、彼得堡に於て此派の秘密會を發見したることあり。即ち千八百十七年或皇族所有の家に於て、普通の人民を始め役人兵士其他多くの信徒が、密かに會合を開き居りしを、偶々一信徒の手紙の間違より之を發見し、巡査は解散を命じたり。然るに其後二十年再び其近傍に於て同樣の會を發見せり。

此派の信徒が催す夜中の會は男女の風儀を亂すの弊ありとは世間の非難なるが、或は誤解に出づる所もあるべし。蓋終夜の舞踏に疲れ果てゝ、宛も死人の如くに横はり、男女混淆して其儘眠むるとあるに因り、世人の疑惑を惹くも尤なり。然れども實際不道徳なる慾望を懷て入り來るの男女も決して無きには限らざるべく、且解釋の仕樣に依りては、靈と靈との交は肉と肉との交を得て始めて完全なりとなし、或は肉の慾を充たすは之を殺す所以にして即ち靈を救ふの道なりとなす者も無きに非ざるべし。要するに夜間の舞踏が淫行の媒介となれるは蔽ふ可らざる事實にして、嘗て十八世紀に宗務院の調査したる所に據れば、或會にて舞踏後一同食事を爲し、之を終るや信徒の男女は自由に「聖愛」の快樂に耽りたりと云ふ。「若行派」に近き「跳踊派」(Jumpers)は此の淫猥なる神秘派の好適例なり。此派は外國より來りたる者らしく、又其の始めて現はれたるは彼得堡郭外の地にして、唯だ新教を奉ずるフィン人間に行はれしが、後に至り內地の農民も之に加はれり。而して其の始めて世の注意を引きたるはアレキサンドル一世の時なり。

跳踊派の信徒は輪を爲して回轉するに非ずして飛び踊りたり、是れ其名の在る所以なり。而して集會は矢張秘密にして、冬なれば寂しき小屋、夏なれば森林中にて之を催ふせり。偖て會の長たる者先づ頌歌を歌ふて次第に其調子を活潑にし、不意に踊り出すや、一同之に和して歌ひながら踊り、熱情の加はると共に益々舞踏は盛となるなり。此踊に於ては男女一組宛と爲れると其の特色にして、此の男女は宛も世間の舞踏會と同じく前以て約束して組合へるなり。既にして長なる男が天使の聲を聞きたりなど云へば、之にて舞踏を終り、燈火を消し、各組の男女は暗中

於て「聖愛」の樂を恣にするなり。蓋彼等は此際に於ける感情慾望は凡て神聖なる靈感なるに因り、須く從ふべき者なりとなせるなり。又基督の前にては信者は皆兄弟姉妹なりとの故を以て近親の姦淫をも許したり。

教會及警察の盡力も其甲斐なく、此派は段々に内地に蔓延して、夫の「苦行派」と混ずるに至り。彼得堡及ペテロフ地方の「跳踊派」信徒は解散を命ぜられ、男子は牢獄に女子は感化院に送られたるも、後數年にしてコストロマリアザンズモレンスク及サマラ等莫斯科の東西南北の諸州に其派の會は發見せられたり。リアザン州にては淫行は一層宗教的なる形を取るに至りたり。即ち舞踏の終りたる後「神女」と自稱する婦人は來會の小女に向ひ「聖愛」を享け樂めよと告げ、一種奇怪の歌を踊して肉の交を爲さしむ。曰く『近寄れよ、新婦よ、新郎は來りて優しく迎へんとせり、眠る勿れ、目を閉づる勿れ、乙女子よ、燈火をして絶へず明かならしめよ』。斯く歌ひて會衆を誘へば、會衆は一齊に謝語を唱へ、手にて十字架の形を作すなり。又スモレンスク州の「苦行派」及「跳踊派」は少しも儀式らしき事を行はず、裸躰と爲りて其の所謂「勤行」を爲すとあり。されば之に「キユービッド」(戀の神)の異名あり。

精神的と物質的とが怪しくも相交はれるは唯此のみに非ずして、猥褻なる儀式の外に殘忍なる儀式あり。是れ亦其の純粋に精神的ならざるを示す者なり。即ち生ける人間の血と肉とを犧牲に供するとにして「苦行派」は此點に於ても夫の不道德の事に於けると同しく世の非難を逃るゝと能はざるが如し。實に彼等は黑きパンと水との代りに赤子の肉と血とを用へり。但其赤子は未婚の乙女の初產の男兒に限れり。而して其乙女は之が爲めに「神母」の位に昇り、即夜會集に禮拜渴仰せらる。即ち豫言者等は其の前に伏し『汝は救世主を生み、王は皆來て天國の君を拜するなるべし』と誦する其間に、新神母の衣を脫ぎて裸躰と爲し、之を神像の下なる聖壇に載せ、信徒は其の前に列りて手足又は胸に接吻し、之を「天の大女王」と尊稱し、且他日其の「聖靈」の惠に依て「小基督」を生まん時、其の清らかなる身と交はるの榮を得んとを祈るなり。斯くて此神母が其後例の舞踏の祭を勸めたるの結果として、愈子を生み、其子が女なればやがて神母となり、男即ち「小基督」なれば生後八日目に之を殺して犧牲と爲し、其の心臟と血にて聖餐の菓子を作るなり。思ふに此の殘忍なる儀式は今や極めて稀有に屬すべしと雖も、現に自ら身を殺し或は幼兒を

殺すことを敎へたる敎狂者も在りたること故、必ずしも之を以て不思議の事例となすに足らざるなり。且斯かる事は信じ難きが如しとするも、今日現在血若くは火を用ひて洗禮を行へる者あり。是れ即ち神秘派中の一派にして「キリスト派」とは緣の近き「去勢派」なり。我輩請ふ之を次章に於て說かん。

第八章

「神秘派」(其の續き)。「去勢派」。男女の去勢。「血の洗禮」及「火の洗禮」。其布敎法。「去勢派」の歷史及敎義。十八世紀に於ける此派の基督。彼得三世及ナポレオンは其救世主。「去勢派」の得意の職業。其の富。「去勢派」に對する政府の取締。精神的去勢を說く者あり

去勢は禁慾主義の一方便にして、各種の苦行中最も過激に且有効なるものなり「去勢派」は肉を忌み慾を憎むの極、直ちに其の根本に溯り、一刀に罪障の源を切り去らんとし、且思へらく、人若し神と合躰とならんとを欲せば、先づ天使の如くならざる可らず、而して天使は男女の性を有せざるなりと。斯くて誘惑の根を斷ち、身を淸淨無垢にし自から呼で「白鳩」と云ひ、又其の詩中に雪よりも白しと稱へて窃に誇れり。人或は去勢を以て厭世主義の極に達したるものと爲し、人生は惡なり、生々の道を講ずるは無用なり、即ち生殖の源を絕つべしと論理的に辯ずるものあり。論理の赴く所は實に然りと雖も、露西亞の「去勢派」は必ずしも此論點より來りたるに非ず。彼等はショーペンハウエル又は佛陀の主義とは少しも關係なきなり。彼等は人類の種を滅さんと欲するに非ず、唯だ個人の德性を完全にして神に接せんと欲するのみ。

結婚及生殖に關し露西亞の宗派は二極端に走れり。即ち一方に於ては無僧派中の一派及跳踊派等の荒淫放逸となり、他に於ては非結婚論者の無理獨身及白鳩派の去勢となれり。而して肉の事を憎むの點に於ては、去勢派は無僧派中の或者と頗る類似せるが、其の相似たるは敢て此一點に止まらず。第一には極端の極に走るの露西亞人の特性を示せると、去勢派も「セオドシヤン派」及遍歷派も異るとなし。第二には此の神秘派の中にも古モスコヴィア人の實物主義即物に依り拘はるの

性質自ら現はれり。即ち外科的手術に依て救を得んとするは明かに物質的性質を示すものにして、又一見したる所神秘主義とは相容れざるが如きも、彼等は依然として形を拜し字義に拘泥する舊信家一流の範圍を脫せざるなり。抑も去勢派が第一の根據と爲せるは馬太傳十九章の十二節なり、『生れながらの去勢者あり、人に因て爲されたるの去勢者あり、又天國の爲めに自ら爲したるの去勢者あり、之を受くるに足る者は之を受けよ』。又基督の語に曰く、『右の目若し汝を誘惑に導かば之を抉ぐり棄てよ、右の手若し汝を誘惑に導かば之を切り棄てよ』。去勢派の徒は此等の句を文字通りに解釋し、且其他の事に就ても同樣の筆法を用へり、是れ舊信家が字義的解釋に拘泥したると正に同一なり。

去勢の式は之を小供には行はずして大人となりたる時に爲せり。又一部分の不具に止むると、全く之を不具にするとの別あり。又女子も此式を受くと雖も、生殖の機能を滅すに非ずして唯だ哺育の力を失はしむるを常とす。即ち乳を不具にするとにして、時としては左右の胸全く切り去らるゝとあり、或は又更に主要の部分に刀を加ふるとなきに非ずと雖も、元來不熟練の手にて之を行ふものなるに因り、此等の手術の爲めに子を生むの機能を失ふに至るとは殆と稀なり。而して此の殘忍なる事實は屢々法廷の審問に因て世に明かとなり、裁判官は十五十七二十才の少女より八十近き老女に至るまで、教狂者の利刀に因て不具にせられたるの身躰を實見したると少なからず。實に無殘の極と謂ふべし。

教義とする所此の如き以上は、信徒を得るには唯だ他より招き來て改宗せしむるの外なかるべしと思はるゝも、必ずしも然らず。去勢派は敢て絕對に結婚及生殖を非難せず。己れは神の撰民聖教の維持者なるも、別に又之を天下後世に布教するの人を作るは正當なりと思ふ者あり。故に結婚は必ずしも之を咎めず、其の愈「血の洗禮」を受くるは子を生みたるの後なると往々にして然かり。而して生れたる子は相當の年齡に達したる時「血の洗禮」を受くべきものにして、若し脫走等を企つる時は彼等は決して之を許さず。彼等は宛も政治上の秘密結社と同じく、全國到る處に黨類を有するに因り、其網を潛るは容易に非ず。嘗て或信徒は父を棄て外國に脫走して結婚し、十五年の後に至り、最早安全ならんと思ひて歸國したるに、忽ち父に認められ、其儘行方不明となれりと云ふ。

然れども自派の人のみにては數少なきに因り、他より改宗者を得るの必要あり。特に彼等の信ずる所に依れば、救世主は聖人の數、十分なるに至らざれば此世に現はれざると黙示錄に示す如くなるに因り、是非とも天使の封印を受けたるの聖人を十四萬四千の數に達せしめざる可らず。是に於て彼等は改宗者を造るに力を盡し、爲めには金力詐謀威赫等有ゆる手段を取るを辭せず。或は賄賂にて誘ふとあり、或は人の子を買ふとあり、或は徐々に引き入れて逃れ難き地位に陷れ、然る上にて無理に無殘の小刀を加ふるとあり。嘗て莫斯科に一少年あり、一夜或老人と相對し、茶を喫て何心なく談話を爲し居たるに老人の曰く、『清淨の人のみ神の前に立つを得べし』、『女を見て慾情を懷く者は心に姦淫したるなり、而して姦淫者は天國に入ると能はざるべしと』。少年の尋ぬらく、『然らば吾等罪ある者は如何にすべきや』。老人は答へて曰く、『主基督の語を知らずや、右の目若し汝を誘惑に導かば之を抉ぐり棄てよ、右の手若し汝を誘惑に導かば之を切り棄てよと敎へられしに非ずや、即ち汝の爲すべきことは肉を殺すに在り、汝は天使の如くに爲らざるべからず、而して是れ唯だ雪の如く白くなるに因て始めて達せらる』。『して如何にせば斯く白くなるを得るや』と重ね問ひたるに、老人は『來り見よ』と告げて之を燈火燦然たる地下の室に導きたり。只見れば十五名程の白衣の男女其室内に在り、一方の隅には暖爐正に盛に燃へ居れり。頓て祈禱と舞踏とを濟したる後、老人は少年に向ひ、『今ぞ汝は罪ある者が雪の如くに白くなるの道を知るべし』と嚴かに言渡し語を發するの暇もあらばこそ、直に之を捕へて猿轡を銜ましめ目を掩ひ地上に仰臥せしめ、紅熱のナイフを以て清淨を保つの封印をぞ押したりける。是れサルチコフと稱する農夫の遭遇したる出來事なるも、斯かる方法にて「火の洗禮」を强ひられたる者は敢て彼のみに非ざるべきなり。偖て此少年は一時氣絶せしが、頓て正氣に反り目を開けば、老人は秘密と死と何れを望むかを問へり。勿論斯くなりては唯だ其命を奉ずるの外なきなり。

此派が明かに一派として世に知らるゝに至りたるは極近頃にして即ち千七百六十若くは同七十年頃なり。又其本山の地は彼得堡にして、之が開山たるアンドレー、イセリヴァノフはナポレオン、一世の時に敎義を說き、千八百三十二年ニコラス帝の時に死せり。此派の信徒は彼を權現として尊び、宛も若行派のアィヴァン、サ

スロフニ於けるが如し。蓋去勢派は信條及禮拜の法に至る迄頗る苦行派に酷似せる所より察すれば、前者は當に後者より出でたるものなるべし。即ちセリヴァノフの野蠻的禁慾主義はサスロフの徒の奇怪なる放慾主義の反動に外ならざるべきなり。

去勢派は苦行派と同じく靈感及豫言に最も重きを置き、又輪と爲りて廻轉するの舞踏法を行ひ、各所の信徒の小團隊を同じく「コラブリ」(舟)と呼べり。且嫌疑を避くる爲めに表面は官許教會の慣例を採用せること苦行派と異ならずして、未だ「火の洗禮」を受けざる者にても信徒は凡て其會合に列るを許せり。去勢派は又女の豫言者及女神をも有せり。

彼等の稱して救世主と爲せるセリヴァノフはキヤサリン二世の時に現はれ、始めは苦行派に入りたるも後之を脫せり。實に其新教の發表せられ且彼が神として「承認」せられたるは、老女豫言者アクライナ、イヴァノヴナノ管轄せし苦行派の教會なりしなり。セリヴァノフハ目に一丁の字を解せざる無教育の男なりしが、其教は信徒に因て筆記保存せられたり。彼は愚民を蠱惑するとの故を以て捕縛せられ笞刑を受け、且西比利亞に流されしが、ポール帝の代に至り歸國せり。又彼は神と自稱したるのみならず、皇帝と自稱したり。斯かる天一坊流の詐僞師は近世の露西亞に珍らしからざるも、大膽にも一時に二樣の面を僭かし被りたるは、恐らく彼れ一人なるべし。

當時彼得三世の廢せられてキヤサリン二世之に代はり立つや、多數の愚民は彼得の再來を待ち構へ居たり。世の野心家は好機乘すべしとなし、「別派」のプガチョフの如きも自ら彼得三世なりと稱して其の布教の方便を圖りたり。セリヴァノフは即ち此同一筆法を用ひ、「神の神にして王の王」と自稱せり。而して彼にして彼得三世と爲る以上は夫の老媼アクリナ、イヴァノヴナは其の母と云ふことになり信徒は之を皇大后エクサベスとして尊號を奉れり。されば、ポール帝が彼を西比利亞より呼返すや、是れ其の父に面會せんとを欲したるなりなど彼等の間には種々の訛傳行はるゝも要するにポールは唯だ彼を狂人と見做し之を瘋癲院に幽したるなり。尋てアレキサンドル一世の時彼は放免せられて自由の身と爲れり、是れ波蘭生れの貴族にして此派の秘密信徒なるエリンスキーと稱する男が賄賂を行ふ